

筑後北部地区遺跡群 I

福岡県筑後市大字熊野・藏数所在遺跡の埋蔵文化財調査
筑後市文化財調査報告書
第61集

2005

筑後市教育委員会

筑後北部地区遺跡群 I

福岡県筑後市大字熊野・藏数所在遺跡の埋蔵文化財調査

- ・熊野水町遺跡第1次調査
- ・熊野松ノ下遺跡第1次調査
- ・熊野五反田遺跡第1次調査
- ・熊野宮ノ後遺跡第1次調査
- ・藏数島崎田遺跡第1次調査



2005

筑後市教育委員会

中扉図版



1 筑後北部地区遺跡群 全景 (熊野松ノ下遺跡上空より西側)



2 筑後北部地区遺跡群 全景 (熊野松ノ下遺跡上空より西南側)

中扉図版



3 氷後北部地区遺跡群 全景 (熊野松ノ下遺跡上空より北西側)



4 氷後北部地区遺跡群 全景 (熊野松ノ下遺跡上空より北東側)

序

筑後平野の中央部、矢部川中流域北岸に位置する筑後市は、古代より水稻耕作の適地として開発が進み、また交通の要衝として多くの人々が往来することにより、歴史を刻んできました。

この度報告する筑後北部地区遺跡群は筑後市の北西部に位置し、筑後市を代表する弥生時代の蔵敷森ノ木遺跡、中世広川荘の中心であった坂東寺・熊野神社、戦国時代筑後15将のひとつであった西牟田氏の拠点・三瀬郡西牟田郷に閉まれた歴史豊かな地区であります。今回の調査では主に中・近世の遺跡が確認され、この地域の開発の歴史を知る上での貴重な資料を得ることが出来ました。

発掘調査から報告書作成に至るまで、各工事関係者、各関係機関、有識者各位には多大な御協力と御援助を頂きました。ここに心から感謝を表する次第であります。本書が文化財保護への理解を深める一助となり、併せて研究資料として御活用いただければ幸いです。

平成17年3月

筑後市教育委員会

教育長 城戸 一男

例 言

1. 本書は県常は堤整備事業（担い手：芦川）芦川北部地区の実施に伴い、福島県荒川水系農地開発事務所の依頼を受けて、真後由教育委員会社会教育課文化スポーツ係が、平成15年度に大字御野・藏敷において実施した地理文化財の発掘調査報告書である。

2. 本書使用の遺構実測図は小林勇作・上村英士・立石真二が製作し、原書を平版あけみ・佐々木秀代が行なった。また遺跡の航空測量は株式会社理文附サガーネットシステムに依頼した。

3. 本書使用の遺物実測図は佐々木・柳井理松が製作し、原書を平版・佐々木が行なった。

4. 本書使用の写真は小林・立石が撮影した。なお、遺跡の気球写真是撮影中写真企画部に依頼した。

5. 本書使用の標高は海拔高であり、方位は G.N. である。

6. 本書が使用した座標は世界測地系を使用しているが、從来の國土測量法第II座標系も併記している。

7. 本書に掲載した遺構の縮尺は1/40を基本とする。

8. 本書に掲載した遺物の縮尺は1/3を基本とする。

9. 本書に使用した記号は以下の通りである。

SD	清水遺構	SE	井戸
SK	土壙	SP	ビット
SX	不明遺構（木田跡・流路・落込み状遺構・留り状遺構など）		

10. 本書の執筆は第3章2・4節を小林が、その他を立石が行なった。編集は立石が行なった。

11. 本書に関する問面・写真・遺物などの資料は荒後市野作委員会で保管・管理され、今後公開・活用される予定である。

目 次

第1章 調査経過と組織	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査組織	2
3 調査区域	3
第2章 位置と環境	
1 地理的環境	5
2 渋路地周辺の地理的環境	6
3 歴史的環境	6
第3章 調査成果	
1 猿野木町道路の調査	7
2 飛野松ノ下道路の調査	21
3 猿野五反田道路の調査	27
4 猿野宮ノ後道路の調査	35
5 猿野島町田道路の調査	53
第4章 結語	63
図版	
Fig. 1 猿後北部地区道路網 位置図 ($S = 1/25,000$)	1
Fig. 2 猿後北部地区道路網 平成14・15年度試掘トレーン位置図 ($S = 1/12,000$)	2
Fig. 3 猿後北部地区道路網 周辺道路位置図 ($S = 1/25,000$)	5
Fig. 4 猿野木町道路 位置図 ($S = 1/2,500$)	7
Fig. 5 A区道路配置図 ($S = 1/300$)	8
Fig. 6 A区 土壌 ($S = 1/40$)	9
Fig. 7 A区 满状道構 ($S = 1/40$)	10
Fig. 8 1SX15±土層断面 ($S = 1/40$)	11
Fig. 9 B区溝構配図 ($S = 1/300$)	12
Fig. 10 1SD25±30 ($S = 1/40$)	13
Fig. 11 1SD35±10 ($S = 1/40$)	14
Fig. 12 1SXN6±07±土層断面 ($S = 1/40$)	15
Fig. 13 1SXN20±土層断面 ($S = 1/40$)	16
Fig. 14 出土遺物(1) ($S = 1/3$)	17
Fig. 15 出土遺物(2) ($S = 1/3 \cdot 1/2$)	18
Fig. 16 調査地点位置図 ($1/2,500$)	21
Fig. 17 溝土層断面図 ($1/40$)	22
Fig. 18 猿野松ノ下道路道路剖面図 ($1/200$)	23
Fig. 19 山木遺物反映図 ($1/3$)	25
Fig. 20 猿野五反田道路 位置図 ($S = 1/2,500$)	27

Fig. 21	基本層序模式圖	27
Fig. 22	熊野五反田遺跡 遺構配置圖 ($S = 1/200$)	28
Fig. 23	ISD01土層断面 ($S = 1/50$)	28
Fig. 24	ISD02・1SK03 土層断面 ($S = 1/40$)	29
Fig. 25	ISX05土層断面 ($S = 1/50$)	30
Fig. 26	ISD01出土遺物 ($S = 1/2 \cdot 1/3$)	30
Fig. 27	ISX05出土遺物1 ($S = 1/3$)	31
Fig. 28	ISX05出土遺物2 ($S = 1/3$)	32
Fig. 29	調查地點位置圖 ($1/2,500$)	35
Fig. 30	A調査区：ISDX03測量圖 ($1/100 \cdot 1/40$)	36
Fig. 31	熊野宮ノ後邊櫛略測量 ($1/200$)	37
Fig. 32	H調査区：ISD01・03・04、1SK02、ISX07測量圖 ($1/100 \cdot 1/40$)	39
Fig. 33	B調査区：ISD08・09測量圖 ($1/100 \cdot 1/40$)	41
Fig. 34	B調査区：ISD10測量圖 ($1/100 \cdot 1/40$)	42
Fig. 35	C調査区 ISK05～28、ISD25測量圖 ($1/40$)	44
Fig. 36	A調査区出土遺物測量圖 ($1/3 \cdot 1/2$)	46
Fig. 37	B・C調査区、表土...遺物測量圖 ($1/3 \cdot 1/2$)	49
Fig. 38	鹿敷島田遺跡 位設圖 ($S = 1/2,500$)	53
Fig. 39	鹿敷島田遺跡 遺構配置圖 ($S = 1/250$)	54
Fig. 40	1SK01 ($S = 1/40$)	55
Fig. 41	1SK02 ($S = 1/40$)	55
Fig. 42	ISK05・11 ($S = 1/40$)	56
Fig. 43	ISD06 ($S = 1/40$)	56
Fig. 44	ISX10土層断面 ($S = 1/40$)	57
Fig. 45	出土遺物 ($S = 1/2 \cdot 1/3$)	58
Tab. 1	熊野木町遺跡 遺構一覧	20
Tab. 2	熊野木町遺跡 出土石器一覧	20
Tab. 3	熊野木町遺跡 出土石器一覧	20
Tab. 4	熊野松ノ下遺跡 遺構番号台帳	23
Tab. 5	熊野松ノ下遺跡 出土遺物觀察	26
Tab. 6	熊野五反田遺跡 遺構一覧	34
Tab. 7	熊野五反田遺跡 出土石器一覧	34
Tab. 8	熊野五反田遺跡 出土石器一覧	34
Tab. 9	熊野宮ノ後邊櫛 遺構番号台帳	37
Tab. 10	熊野宮ノ後邊櫛 出土遺物觀察	52
Tab. 11	鹿敷島田遺跡 遺構一覧	62
Tab. 12	鹿敷島田遺跡 出土石器一覧	62
Tab. 13	鹿敷島田遺跡 出土石器一覧	62

付表目次

図版目次

中層図版	
Pja. 1	筑後北部地区遺跡群 全景 (熊野松ノ下遺跡上空より北西側)
2	筑後北部地区遺跡群 全景 (熊野松ノ下遺跡上空より北西側)
3	筑後北部地区遺跡群 全景 (熊野松ノ下遺跡上空より北東側)
4	筑後北部地区遺跡群 全景 (熊野松ノ下遺跡上空より北東側)
Pja. 1	熊野水町遺跡 全景 (東から) 熊野水町遺跡 ▲区全景 (上から)
2	熊野水町遺跡 B区全景 (上から)
Pja. 2	熊野水町遺跡 C区全景 (上から)
Pja. 3	熊野水町遺跡 ISK01焼出状況 (北から) 熊野水町遺跡 ISK01土層断面 (南から)
Pja. 4	熊野水町遺跡 ISK01完掘状況 (南から)
Pja. 5	熊野水町遺跡 ISK04焼出状況 (北から) 熊野水町遺跡 ISK04土層断面 (南から)
2	熊野水町遺跡 ISK04完掘状況 (南から)
Pja. 6	熊野水町遺跡 ISK05土層断面 (南から)
2	熊野水町遺跡 ISD05竹製明渠出土状況 (南から)
Pja. 7	熊野水町遺跡 ISD10土層断面 (西から) 熊野水町遺跡 ISD10完掘状況 (西から)
2	熊野水町遺跡 ISD25土層断面 (北から)
Pja. 8	熊野水町遺跡 ISD25完掘状況 (北から)
2	熊野水町遺跡 ISD30土層断面 (北から)
Pja. 9	熊野水町遺跡 ISD30完掘状況 (北から) 熊野水町遺跡 ISD35土層断面 (北から)
2	熊野水町遺跡 ISD35完掘状況 (北から)
Pja. 10	熊野水町遺跡 ISD35完掘状況 (北から)
2	熊野水町遺跡 ISD35完掘状況 (北から)
Pja. 11	熊野水町遺跡 出土:遺物 空中写真 (西から)
Pja. 12	熊野松ノ下遺跡 洞蓋区遺跡 空中写真 (上から) 熊野松ノ下遺跡 ISD1土層断面状況 (西から)
2	熊野松ノ下遺跡 ISD2土層断面状況 (西から)
Pja. 13	熊野松ノ下遺跡 ISD3土層断面状況 (西から)
2	熊野松ノ下遺跡 ISD3土層断面状況 (東から)
3	熊野松ノ下遺跡 ISD4土層断面状況 (西から)
Pja. 14	熊野松ノ下遺跡 ISD4中央ベルト土層断面状況 (西から)
2	熊野松ノ下遺跡 ISD4西ベルト土層断面状況 (西から)
Pja. 15	熊野松ノ下遺跡 ISD5東ベルト土層断面状況 (西から) 熊野松ノ下遺跡 ISD5西ベルト土層断面状況 (東から)
2	熊野松ノ下遺跡 ISD5東ベルト土層断面状況 (西から) 熊野松ノ下遺跡 ISD5西ベルト土層断面状況 (東から)
Pja. 16	熊野松ノ下遺跡 出土:遺物 全景 (上から)
2	熊野五反田遺跡 洞蓋区より熊野集落を見る (北から)
Pja. 17	熊野五反田遺跡 ISD01土層断面 (西から)
1	熊野五反田遺跡 ISD01完掘状況 (西から)
Pja. 18	熊野五反田遺跡 ISD01完掘状況 (西から)
2	熊野五反田遺跡 ISD01完掘状況 (西から)
Pja. 19	熊野五反田遺跡 ISD01完掘状況 (西から)

Pla. 20	1	熊野五反田遺跡	ISX05土層断面 (西から)
	2	熊野五反田遺跡	ISX05土壤状況 (東から)
Pla. 21	1	熊野五反田遺跡	ISD02土壤状況 (北から)
	2	熊野五反田遺跡	ISK03土壤状況 (南北から)
Pla. 22	1	熊野五反田遺跡	ISX04土壤状況 (南北から)
Pla. 23	1	熊野五反田遺跡	出土遺物
Pla. 24	1	熊野宮ノ後遺跡	空中写真 (東から)
	2	熊野宮ノ後遺跡	測量区溝槽 空中写真 (東から)
Pla. 25	1	熊野宮ノ後遺跡	△測量区全貌 空中写真 (東から)
	2	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: 作業状況 (東から)
Pla. 26	3	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: 地下構造 (東から)
Pla. 27	1	熊野宮ノ後遺跡	A測量区: 土層断面 (東から)
	2	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: 土層断面 (東から)
Pla. 28	1	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: ISD30土層断面 (北から)
	2	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: ISD04土層断面 (北から)
Pla. 29	1	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: ISD08土層断面 (北から)
	2	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: ISD10土層断面 (北から)
Pla. 30	1	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: ISX07土壤土層断面 (西から)
	2	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: ISX07北壁土層断面 (西から)
Pla. 31	1	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: 不明地盤①
	2	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: 不明地盤②
Pla. 32	1	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: 不明地盤③
	2	熊野宮ノ後遺跡	B測量区: 不明地盤④
Pla. 33	1	熊野宮ノ後遺跡	出土遺物①
Pla. 34	1	熊野宮ノ後遺跡	出土遺物②
Pla. 35	1	熊野宮ノ後遺跡	出土遺物③
Pla. 36	1	熊野宮ノ後遺跡	出土遺物④
Pla. 37	1	熊野宮ノ後遺跡	出土遺物⑤
Pla. 38	1	淡路島遺跡	全景 (上から)
	2	淡路島遺跡	測量区より淡路島像を見る (西から)
Pla. 39	1	淡路島遺跡	測量区南側足跡群 (上から)
	2	淡路島遺跡	ISX10完壁状況 (上から)
Pla. 40	1	淡路島遺跡	ISX10土層断面① (東から)
	2	淡路島遺跡	ISX10土層断面② (東から)
Pla. 41	1	淡路島遺跡	ISX10土層断面③ (東から)
	2	淡路島遺跡	ISX10土層断面④ (東から)
Pla. 42	1	淡路島遺跡	ISK01土層断面 (東から)
	2	淡路島遺跡	ISK01完壁状況 (東から)
Pla. 43	1	淡路島遺跡	ISK02土層断面 (東から)
	2	淡路島遺跡	ISK02完壁状況 (北から)
Pla. 44	1	淡路島遺跡	ISK11東側土層断面 (北から)
	2	淡路島遺跡	ISK11南側土層断面 (南から)
Pla. 45	1	淡路島遺跡	ISK11西側土層断面 (南から)

	2	藏敷島崎田遺跡	1SK11北側土層断面（東から）
Pla. 46	1	藏敷島崎田遺跡	1SK05東側土層断面（南から）
	2	藏敷島崎田遺跡	1SK05南側土層断面（東から）
Pla. 47	1	藏敷島崎田遺跡	1SK05西側土層断面（北から）
	2	藏敷島崎田遺跡	1SK05北側土層断面（西から）
Pla. 48	1	藏敷島崎田遺跡	1SK05完掘状況（北から）
	2	藏敷島崎田遺跡	1SD06完掘状況（北か <i>t₂</i> ）
Pla. 49	1	藏敷島崎田遺跡	出土遺物

第1章 調査経過と組織

1. 調査による経緯

筑後北部地区遺跡群は福岡県筑後市大字椎野・麻敷に所在する。ここは筑後市西北部、標高5～10mほどの平野側にあたり、米麥を中心とした二毛作が行なわれる豊かな穀倉地帯である。

平成14年8月19日、「甲」を中心とした二毛作が行なわれる筑後北部土地区改良区（以後「甲」とする）が立ち上がった。同年10月28日、筑後川水系農地開拓事務所を事業主体とする筑後北部土地区改良区（以後「乙」とする）が立ち上がった。同年10月28日、「甲」より該当地域に対しての埋蔵文化財の確認依頼がなされた。両者は協議を行い、平成14年度及び15年度の工事対象地域の一部について、工事により破壊が予想される地点について確認調査を行うこととなった。期間は平成14年11月1日より同15日まである。この結果・近世を中心とした暗黒土の包含層を確認したが、明確な遺構は存在していなかった。この根を受け、「乙」は対象地区での埋蔵文化財の発掘調査は必要ないとの返答を「甲」に行なった。

平成15年10月9日、「甲」より「乙」は封し、平成15年度予定工区の未解地図と平成16年度工事対象地図に封し、埋蔵文化財の確認依頼がなされた。「乙」は同10月23日より12月1日にかけて該当地域において確認調査を行ない、結果中世を中心とした遺跡の存在が認められることを「甲」に伝えた。両者は協議を行い、平成16年度に確認された5遺跡の発掘調査を行うこととなつた。費用負担は8割を筑後川水系農地開拓事務所、残り2割を市と地元負担で行なうこととなつた。調査が実施面積は3,120m²、期間は平成16年4月9日から同7月31日までとした。



Fig. 1 筑後北部地区遺跡群 位置図 (S=1/25,000)

2. 調査組織

北都地区道路計画に関する調査組織は以下の通りである。

(1) 様認調査体調 (平成14～15年度)

調査主体	筑後市教育委員会
教育長	牟田口和良（～H15. 9. 30）
教育部長	下川 雅晴（～H15. 3. 31）
社会教育課長	松水盛四郎
社会教育係長	成瀬 平和
文化財専門職	水見 秀雄
文化財学芸員	小林 勇作（H15年度担当）
	上村 英士（H14年度担当）
	柴田 明
	立石 真二

(2) 発掘調査・整理作業体調 (平成16年度)

調査主体	筑後市教育委員会
教育長	城戸 一男
教育部長	森原 修
社会教育課長	田中 優一
社会教育係長	成瀬 平和
文化財専門職	水見 秀雄
文化財学芸員	小林 勇作（発掘調査担当）
	上村 英士
	阿比博士助
	立石 真二（発掘調査担当）



Fig. 2 筑後北部地区道路群 平成14・15年度調査トレーニング位置図 (S = 1/12,000)

調査作業 石橋香代美 井上むつ子 今山三咲子 植田 純子 内野 康隆
(五十音順) 江崎 木蘭 江崎トシ子 奥村 大郎 加藤らえ子 加藤 札子

川添 幸子 古賀 明美 古賀三ツ保 下川 義文 鹿崎マスヨ

角 里子 田島 好江 田島ヤス子 比 名草 江 啓 肴 伸
高永八重子 富安 美子 水井盛三郎 中村 富男 中村 三男
馬場千鶴子 馬場 実 原 清隆 渡辺 瞳子 渡辺 泰代
古江 黒 松尾喜代美 渡辺 茂喜 渡辺 泰代

整理作業 仲 文恵 平塚あけみ 佐々木寿代 野口 晴香
石崎 千恵 (12月1日～2月28日) 佐々木寿代 野口 晴香
野間口朔子 (～9月30日) 佐々木寿代 野口 晴香

3. 調査の經過

今回の調査は、東側から西側へ向かう形で進められた。4月からは熊野水町道跡(担当: 七石)、熊野松ノ下道跡(担当: 小林)で測量を始めたが、時期外れの長雨により思うように調査が進まない状況であった。測量跡は5月27日に航空測量を行い、調査を終了した。6月からは熊野宮ノ後道跡(担当: 小林)、熊野五反田道跡(担当: 立石)の調査が始められた。この間は梅雨ということもあり、曾木川南岸に位置する熊野宮ノ後道跡では度々水没する状況であった。而候の小さい熊野五反田道跡は7月16日に発掘を終り、8月18日まで歳数島崎田道跡(担当: 立石)の調査に費りかかった。熊野宮ノ後道跡・熊野五反田道跡・歳数島崎田道跡は8月20日に航空測量を行い、9月3日までに現場での全工程を終了した。

以下に調査の抄録を記す。

- H16. 4. 9 熊野水町道跡、重機搬入
4. 17 熊野松ノ下道跡、重機搬入
4. 21 熊野木町道跡、発掘調査開始
4. 23 熊野松ノ下道跡、ISOD10 (水路・現代) 調査開始
4. 25 熊野水町道跡、ISOD5 より竹製明渠 (現代) 確認
4. 30 熊野水町道跡、熊野松ノ下道跡、気球写真撮影
5. 25 熊野木町道跡、熊野松ノ下道跡、航空測量
5. 27 熊野水町道跡、熊野松ノ下道跡、転轍点設置
5. 30 熊野水町道跡、熊野松ノ下道跡、埋め戻し終了
6. 8 熊野五反田道跡、重機搬入
6. 10 熊野宮ノ後道跡、重機搬入
6. 14 熊野五反田道跡、発掘調査開始
7. 2 熊野宮ノ後道跡、発掘調査開始
7. 7 歳数島崎田道跡、重機搬入
7. 15 熊野五反田道跡、気球写真撮影
7. 26 歳数島崎田道跡、発掘調査開始
7. 27 歳数島崎田道跡、S-10 (大溝) 調査開始
8. 12 熊野宮ノ後道跡、歳数島崎田道跡、気球写真撮影
歳数島崎田道跡、S-12 (野井川) 確認
8. 20 熊野五反田道跡、S-12 (野井川) 確認
8. 25 熊野五反田道跡、埋め戻し終了
歳数島崎田道跡、埋め戻し終了
9. 3 熊野宮ノ後道跡、埋め戻し終了

なお、発掘調査および報告書作成に際し、筑後川水系農地開発事務所、徳光重機、各関係機関に多大な御協力を頂いた。また、下記の方々・各機関からは調査・整理作業に際し、貴重な御教示・御指導を頂いた。記して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

小川 泰樹、斎部 麻矢（福岡県教育庁）、山村 信榮、井上 信正（太宰府市教育委員会）、堤 雅樹、花田 将明（福岡県立八女工業高等学校教諭）

第2章 位置と環境

1. 地理的環境

箕作市は福島県の南西部、荒賀平野の中央部に位置する。市域をJR 鹿児島本線と国道20号線が縱断し、国道412号線が横断する。また、市の北部には食日川、中央部には花深川や山ノ内川、南部には一級河川の大郡川があり、それそれ西流している。北部地域は耳納山地から派生した八女丘陵が西へと延び、灌漑用の溜池が点在している。一方、低位扇状地である東部や盆地である南西部には各河川より派生した農業用水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部を中心とする丘陵地帯では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麦を中心の田園地帯が広がる。市街地は市の中央部、国道に沿って形成されている。

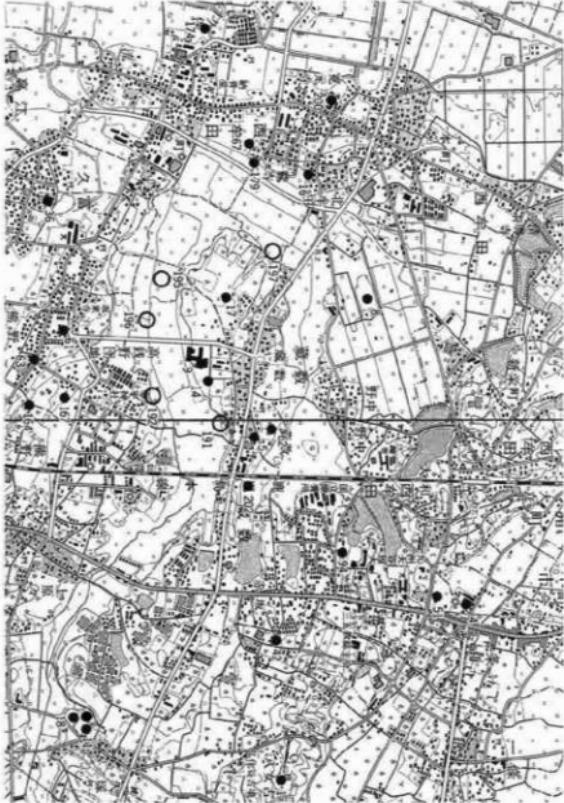


Fig. 3 箕作北部地区遺跡群 局地遺跡位置図 (S = 1/25,000)

*上記地名の番号は当市地図に記載している地名調査番号による

2. 遺跡周辺の地理的環境

箕面北岸地区遺跡群は箕面市北西側に位置する。谷日川・金屋川・境川が匯流し、箕面川水系山ノ井川へ合流する。地勢的には八女丘陵から派生した礫灘・黒野の礫高地（主に約15m以下）に挟まれた谷部からこれを出た平野部にあたり、標高は約5～10m、大部分が水稲と麦の二毛作が行われる水田地帯である。

3. 歴史的環境

北に位置する礪数丘陵は、箕面市内でも先史時代遺跡の集中する所として知られている。礪数坂口遺跡（017）からは田石器（角錐状石器）が出土している。この他、弥生時代中期前半の貝冠を出土した礪数東野屋遺跡（005）、弥生時代後期～古墳時代初期の集落遺跡である礪数森ノ木遺跡（009）・田佛遺跡（008）、出土した遺物の中に百濟系の馬具があるのではとは指摘されはじめた5世紀中頃の瑞王寺古墳（円頂、消滅、004）などが代表的なものである。

南の熊野丘陵には、古代より広川川の支配を行ってきた坂東寺熊野社がある。この熊野社は地方へ分離されたものとしては最古のものといわれ、かつて寺域は現在の熊野養林と呼ばれていたと思われる。広川筋は中世には水田庄（箕面市西南部）との境界争いなどを起したが、明治初期には武土の橋領により削除された。現在熊野社に伝わる「熊野神社裏の修生会」（11月例大嘗祭の鬼夜）は、「久留米大嘗祭」（園指定無形民俗文化財）よりも古い様相を残すとして、県指定無形民俗文化財に指定されている。

西側の大字西田庄には鎌倉初期に藤原氏の流れをくむ宇津宮氏が西田庄郷の地頭職として下向、以降西田氏を名乗り在地領主化する。西田氏は西田庄町（字序）を榮き城下町（字町）を形成、靈驚寺（字驚寺）や寛元寺（字荒元寺）などを建立した。鎌國時代には「英後15特」の1人に入數えられ、三浦郡東部（箕面市、久留米市三瀬町・城島町、三瀬畠大木町）に勢力を跨ったが、戦国時代後期の豐後大友氏・肥前龍造寺氏の争乱により衰退、以降龍造寺氏・鍋島氏の家臣となつた。西田氏の没後には彼らにまつわる城館跡、神社仏閣が多く残されている。

近世には領主の交代を幾度か経て有馬氏の支配下となつた。2代忠朝は西牛田町の復興、山ノ井川の改修などをを行い、4代頼元は西牛田驚寺を移転。9代頼忠は礪数の赤坂焼に御庭焼の朝龜焼の焼成を行わせ、熊野坂東寺より石造物を持ち出している。熊野ではこの頃久留米土産司田中氏により赤坂寺が作られていた。坂東寺焼は風がを得意としたが、現在その業は絶えてしまつてある。

【注】

1 文書中の遺跡名の後ろにある番号は、気候竹で使用している発掘調査番号である。（箕面市文化財調査報告書第34巻を参照）

【参考文献】

川添昭人	「瑞王寺古墳」	1984
川添昭人・眞	「前津中の玉遺跡」	1987
川添昭人	「田佛遺跡」	1988
佐々木裕彦・眞	「礪数遺跡町」	1990
箕面市史編さん委員会・眞	「箕面市史」	1995

第3章 調査成果

1. 熊野水町遺跡（1次調査）

1) はじめに

熊野水町遺跡は、筑後市大字熊野453外に所在する。八女丘陵より西に突き出た熊野低丘陵の南裾に位置し、西の丘陵上には彦森森ノ木遺跡、南側には倉目川が西流し、その先には熊野松ノ下遺跡、熊野の低丘陵地帯が広がる。標高10m以下の谷地形に立地する。明治15年（1882）字松ノ下より分離した。

試掘調査では、灰黄色の地山に挟まれる形で暗褐色の遺構が中世の遺物と共に確認されたため、中世の水田跡の可能性があるとして発掘調査を行うこととなった。調査対象面積は648m²である。調査は平成16年4月9日より始められ、同年5月30日にこれを終了した。

2) A区の遺構 (Fig. 5, Pla. 1-2)

対象地が道路および水路予定地で調査区が細長いため、便宜上東からA・B・C区とする。A区は調査前は丘陵南側の視野に立地する水田で、表土を0.1mほど振り下げたところで平坦な遺構面となる。遺構としては土塁6基、溝3条、水田1枚を確認した。

土壤

ISK01 (Fig. 6, Pla. 3-4-1)

A区中央部で確認された不定型土壤で、東側に1SK04、西側に1SD05が位置し、北側の1SK22を切る。長



Fig. 4 熊野水町遺跡 位置図 (S=1/2,500)

相模水田跡地 (1次調査)

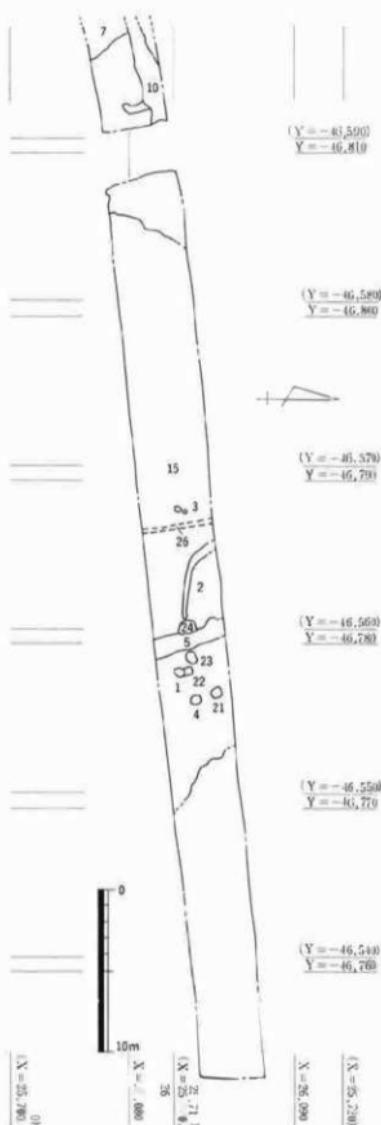


Fig. 5 A区遺構配置図 (S=1/300)

軸約0.7m、短軸約0.5m、深さ約0.15m。主軸の傾きはN=9°-Eを測る。検出時に北寄りに黒色砂質土(1層)を確認したが、土層観察の結果柱穴にはならないと判断した。

この遺構からは土師器片を出土したが、実測しらるものではなかった。

1SK04 (Fig. 6, Pla. 4-2~5)

A区中央部、東寄りに検出された角丸長方形の土壙で、北側に1SK21、西側に1SK01・22が位置する。長軸約0.6m、短軸約0.5m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN=7°-Eを測る。検出時に中央部に黒色砂質土(1層)を確認し、土層観察時に扁平な河原石を確認した。しかしながら、1層と河原石との間には別の埋土も確認でき、河原石も遺構床面には位置していなかった。

この遺構からは土師器片を出土したが、実測しらるものではなかった。

1SK21 (Fig. 6)

A区中央部、東寄りに検出された不定形土壙で、南側に1SK04が位置する。長軸約0.8m、短軸約0.7m、深さ約0.1m。主軸の傾きはN=26°-Wを測る。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

1SK22 (Fig. 6)

A区中央部から検出された楕円形になると思われる土壙である。東側に1SK04、西側に1SD05、北側に1SK23が位置し、南側の1SK01に切られる。残存部での長軸約0.5m、短軸約0.4m、深さ約0.1m。主軸の傾きはN=70°-Wを測る。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

1SK23 (Fig. 6)

A区中央部から検出された不定形土壙で、東側に1SK22、西側に1SD05が位置する。長軸約0.7m、短軸約0.5m、深さ約0.05m。主軸の傾きはN=31°-Eを測る。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

1SK24 (Fig. 6)

A区中央部で検出された土壙で、西側に1SD02が位置し、東側を1SD05によって大きく切られる。残存部での長軸約1.0m、短軸約0.8m、深さ約0.3m。主

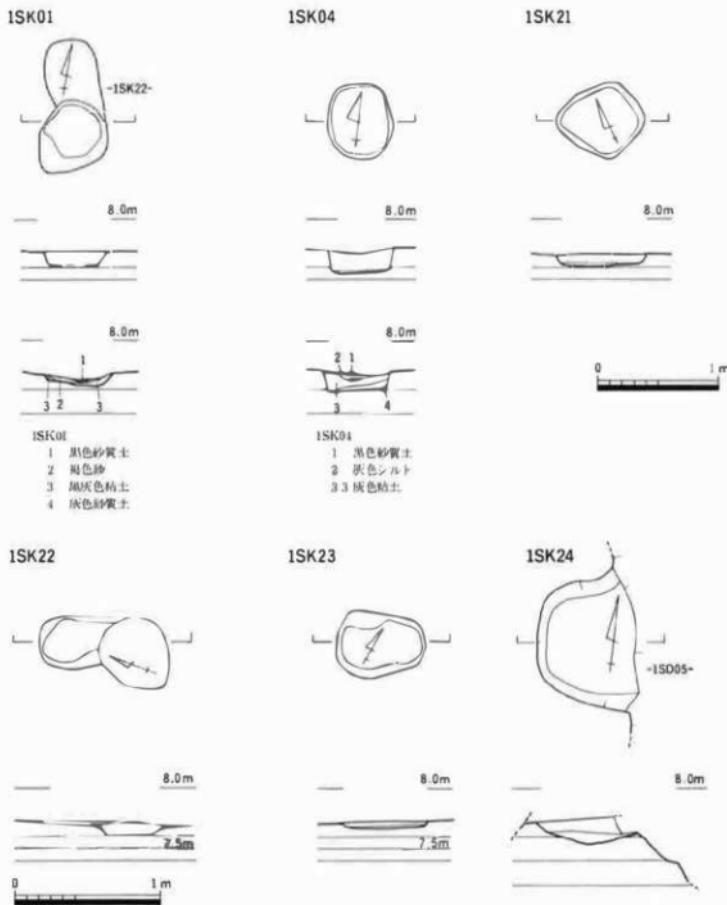


Fig. 6 A区 土壤 (S=1/40)

軸の傾きはN—7°—Eを測る。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

溝状遺構

ISD02 (Fig. 7)

A区中央部西よりから検出され、東側に1SK24が位置する。北側から東に向かい弧状の平面プランを有し、約4.5mほどを検出した。断面形は皿状で、深さは0.1m以下と浅い。埋土は暗茶色土の単一層であり、

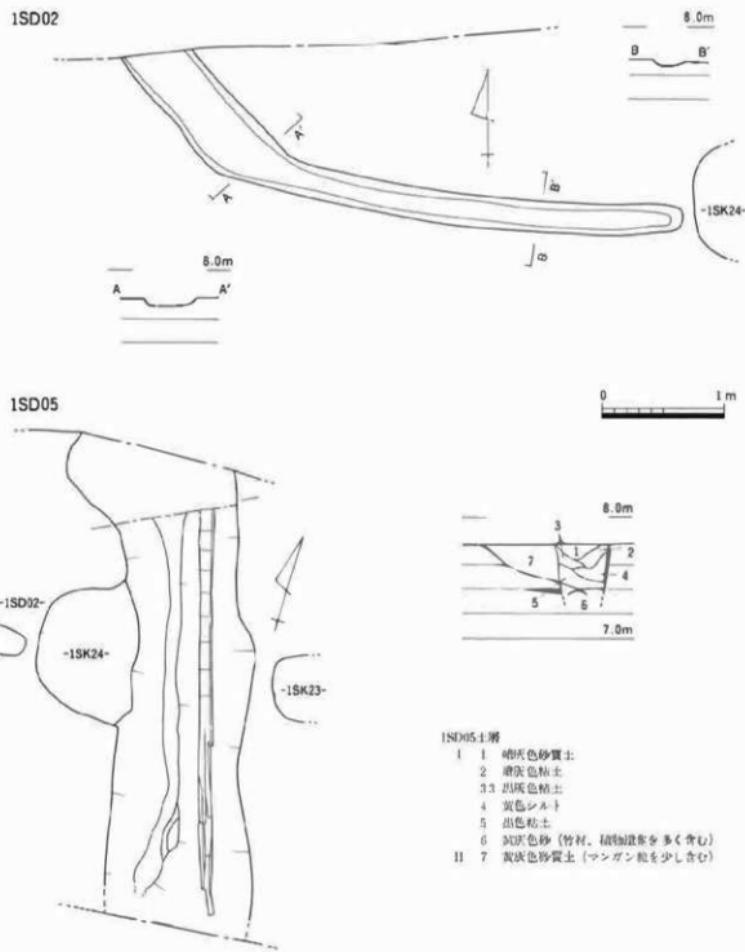
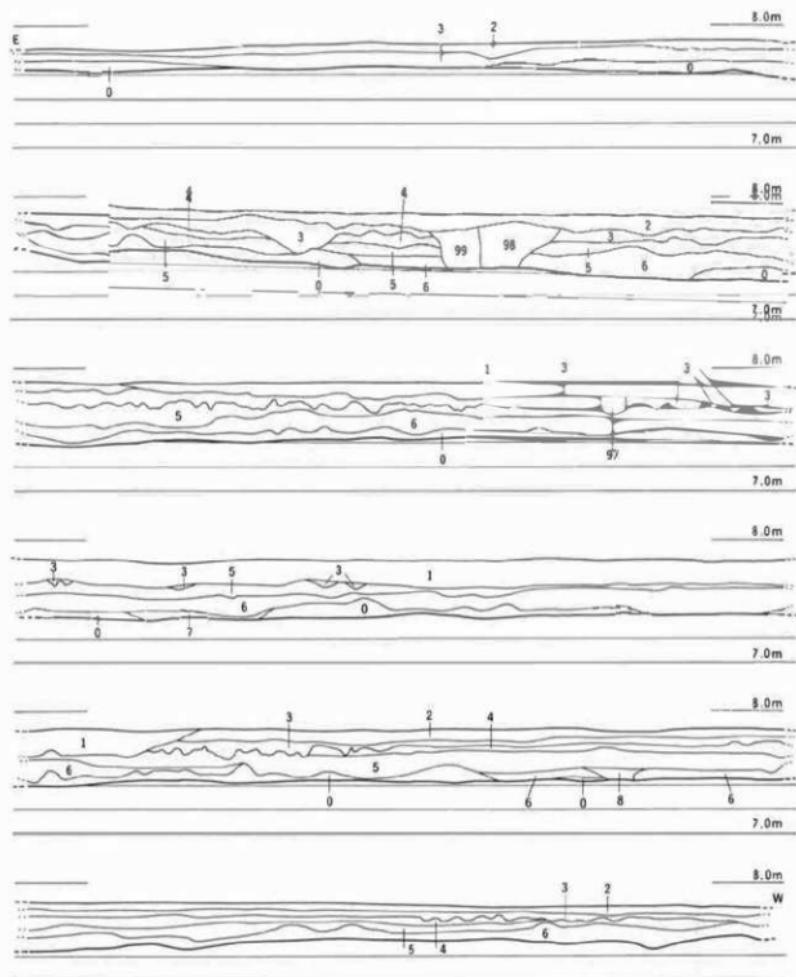


Fig. 7 A区 满状遗構 ($S=1/40$)

滴水などの痕跡は不明である。

この遺構からは土師器片、瓦器片、磁器片を出土したが、圓化しうるものではなかった。



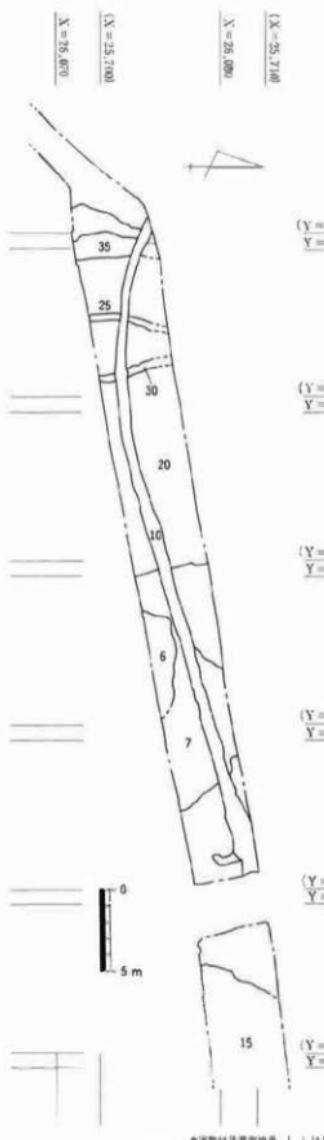
1SX15 土層

97 LSD 26 稲土
98 LSD 05 西明堆土
99 LSD 05 露頭底土 (Fig. 7 参照)
00 黄白色粘質土 (地山土)

1 白色土 (レンチ面)
2 黄灰色土 (耕作土)
3 底色土 (耕作土)
4 灰色粘土

5 深灰色シルト
6 黄灰色砂
7 黄色シルト
8 茶灰色シルト

Fig. 8 1SX15 土層断面図 (S=1/40)

Fig. 9 B区遺構配置図 ($S=1/300$)

1SD05 (Fig. 7, Pla. 6)

A区中央部から約3.8m分を検出した調査区を縱断する溝で、東側にISK01-22-23が位置し、西側のISK24を切る、幅約1.0m、深さ約0.5m。主軸の傾きはN-17°-Wを測る。断面形は西側は浅い漏鉢状、東側は深い逆台形となる。東側は竹製の暗渠を入れるために掘り直されたもので、人為的な埋没状況が確認された。出土した竹製暗渠は検出時点では良好な形を残しており、この遺構が新しいものであることを物語っている。西側は黄灰色砂質土による單一埋土で、マンガン粒を確認した他は滌水痕跡などは認められなかった。

この遺構からは土師器片、青磁片、染付碗、陶器鉢が出土している (Fig. 14-1・2)。

1SD26 (Fig. 5)

A区西側から約4.0m分を検出した調査区を縱断する溝で、幅約0.2m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN-9°-Wを測る。断面形は底面は粗状で壁面はほぼ垂直となる。この溝は塩化ビニル製の管による暗渠であることが確認できたため、掘り下げなどは行わなかった。

水田遺構

1SX15 (Fig. 5・8)

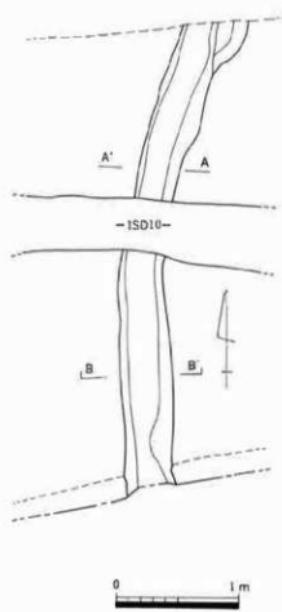
A区西側～中央部にかけて幅約36.5mが検出された。A区の他の遺構は全てこの1SX15の上に展開する。平面において畦畔などは確認できなかった。土層観察の結果、2層と3層の分層面はほぼ平坦な水平堆積であるのに対し、3層とそれ以下の層との分層面には多くの凹凸が見られる。また、1SD05が掘り込まれているのも3層面である。この事から2層は現況水田に伴う埋土であり、3層は1段階古い水田に伴う埋土と判断する。3層の凹凸は人馬による耕作痕跡であろうか。また、3層以下の観察でも畦畔の痕跡は認められなかった。

この遺構からは磁器の小片と陶器鉢の頸部が出土している (Fig. 14-3)。

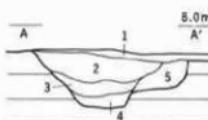
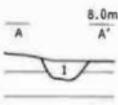
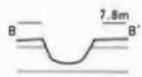
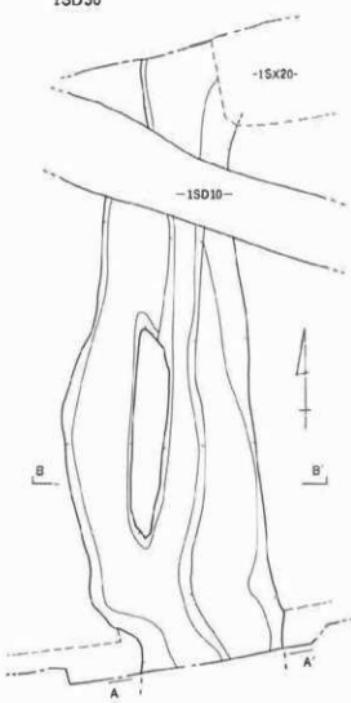
3) B区の遺構 (Fig. 9, Pla. 2-1)

B区はA区の西側に位置する。調査前は丘陵南側の緩野に立地する水田で、A区よりも一段高いのだが、常に湿気が抜けない状態であった。ここは表土を0.2mほど掘り下げたところで平坦な遺構面となるが、遺構面はA区より約0.1mは高い状況であつ

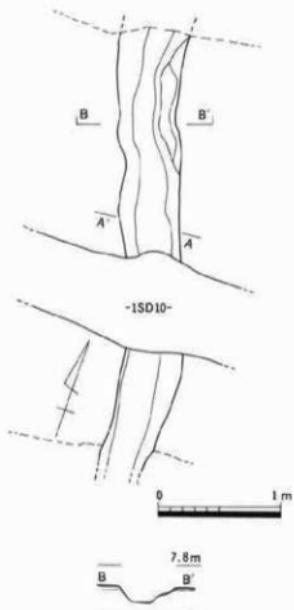
1SD25



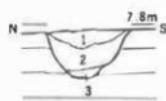
1SD30

1SD25
1 白色砂1SD30
1 晴灰色砂質土 (マンガン鉱)
2 灰色砂
3 晴灰色砂
4 暗灰色砂 (妙粒粗)
5 灰色砂 (2層より細)Fig. 10 1SD25・30 ($S=1/40$)

1SD35



- 1SD35
- 1 白色砂（マンガン较少ない）
 - 2 褐白色砂（マンガン较少ない）
 - 3 噴灰色粘土



- 1SD35
- 1 灰色砂質土（マンガン较多い）
 - 2 褐色砂質土
 - 3 灰色砂質土（しまりゅうい）

Fig. 11 1SD35 + 10 (S = 1/40)

た。ここからは溝4条、溜り状遺構3基を確認した。

溝状遺構

1SD10 (Fig. 9・11, Pla. 7)

B区を縱断するような形で検出された遺構で、西側では南側に張り出すような形をとり東側では直線に走る。B区に所在する遺構のほとんどを切り、検出長約42m、幅約0.8m、深さ約0.3m。東側直線部分での主軸の傾きはN-74°-Eを測る。埋土は締まっておらず、その西端は丘陵裾野の用水路に繋がると考えられる。この区画の湿度が多かったのは1SD10の埋土を通して水分がもたらされたためであった。断面形は逆台形となるが、床面は凹凸があり平坦ではない。

この遺構からは埴器壺、須恵器壺、須恵器鉢、土師器壺、土師器片、五徳、青磁碗、青磁合子、青磁鉢、青磁片、白磁片、染付碗、プリント皿、プリント瓶、陶器瓶、陶器鉢、陶器碗、陶器湯呑、陶器擂鉢、陶器片、丸瓦などを出土した(Fig. 14-4~29)。

1SD25 (Fig. 10, Pla. 8)

B区西側で検出された遺構で、西側に張り出すような形で弧状に走る。東側に1SD35、西側に1SD30が位置し、1SX20を切り、1SD10に切られる。検出長約5.0m、幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。断面形はU字状となり、白色砂による單一埋土である。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

1SD30 (Fig. 10, Pla. 9)

B区西側で検出された遺構で、南北に縱走する。東側に1SD25が位置し、1SX20を切り、1SD10に切られる。検出長約5.0m、幅約1.6m。主軸はほぼ南北を通る。途中2条に分裂したり、合流しても段差を残しているなど複雑な造りをしているが、主要部分の断面形は逆台形状となる。埋土は全て砂が主体であり、東側の段差は掘り直しに伴うと判断される。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

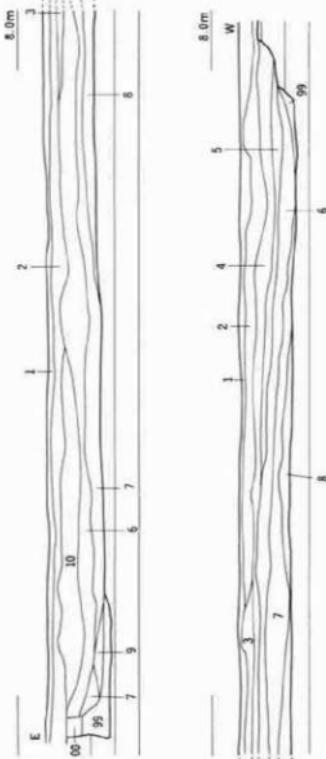
1SD35 (Fig. 11, Pla. 10)

B区西側で検出された遺構で、西側に1SD25が位置し、1SX20を切り、1SD10に切られる。検出長約4.7m、幅約0.4m。主軸の傾きはN-19°-Wを測る。断面形は逆台形状となり、埋土は砂を主体とする。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

溜り状遺構

B区で多く確認された遺構である。所々の事情により全てトレンチ調査を行った。

Fig. 12 ISX06 + 07 土壌断面 ($S = 1/40$)

ISX06 (Fig. 9 + 12)

B区東側から検出された遺構である。深さは約0.1mと深い。

この遺構からは須恵器縫を出土した (Fig. 15-30)。

ISX07 (Fig. 9 + 12)

B区東側から検出された遺構で、ISD10, ISX06に埋られる。深さは約0.4mを越り、下層ではラミナリテ構造が確認された。

この遺構からは遺物の出土はなかった。

ISX20 (Fig. 9 + 13)

B区西側で検出され、全ての遺構遺構に切られている。試掘当初、水田ではときれた遺構である。土層観察からは溝状堆積が造られる以前に水平堆積をしている事がわかるが、これが水田となる様子は認められなかった。また下位土層に見られるラミナリテは水平ではなく、若干の傾きを有するものであった。

この遺構からは土師器片、白磁片、磁器片が出土したが、同化および貯蔵の特徴をしうるものではない。

4) C区 (Pla. 2-2)

C区はISX20 - 1SD30より西側を指す。この一帯は關谷区北側を流れる用水路から築み出でくる水により、常に水浸しているような状況であった。また地元の方の話によると、この一帯は以前は池であったといい、調査前は草が茂っている状態であった。検出時点ではここに大きな倒木の埋土を確認しているが、所々の事情により発掘調査には至らなかった。また、遺物の採取もなかつた。

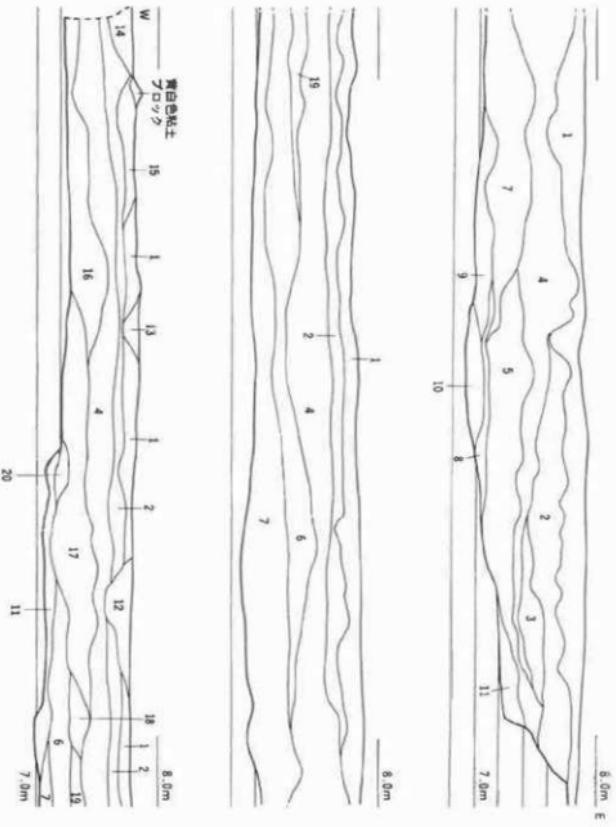


Fig. 13 1SX20土壤断面 (S=1/40)

1SX20	
1	白灰色砂質土 （白灰色沙質土）
2	褐色砂質土 （褐色沙質土）
3	褐色砂質土+黃色砂 （褐色沙質土+黃色沙）
4	褐色色シルト （褐色沙質土）
5	褐色色シルト （褐色沙質土）
6	褐色色シルト （褐色沙質土）
7	褐色色砂（テラノ+粘土質砂）
8	褐色色砂質土 （褐色沙質土）
9	褐色色シルト（テラノ+粘土質砂）
10	褐色色砂質土 （褐色沙質土）
11	白灰色砂土 （白灰土）
12	褐色色砂土 （IS1205砂土）
13	褐色色土 （IS1205泥土）
14	黒色砂（IS1303砂土）
15	黄褐色砂質土 （テラノ+粘土質砂）
16	白灰色砂土 （テラノ+粘土質砂）
17	KC砂 （テラノ+粘土質砂）
18	褐色砂 （テラノ+粘土質砂）
19	褐色砂（テラノ+粘土質砂）
20	褐色砂土 （IS1205泥土）

5) 出土遺物 (Pla. 11)

出土遺物には須恵器、土師器、陶器、磁器、瓦、石鏡があるが、全体に新しいものが中心である。

1SD05出土遺物 (Fig. 14, Pla. 11)

1は染付の瓶である。白灰色の素地に明るい青色で筆書きの文様があるが、全体に新しいものが中心である。
2は焼き甕が見られる。
2は陶器の鉢である。灰色の素地に茶色味の強い鉄釉を施す。

ISD05



ISX15



ISD10

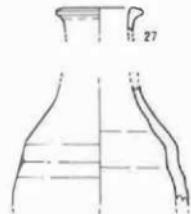
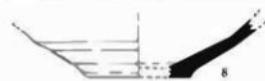
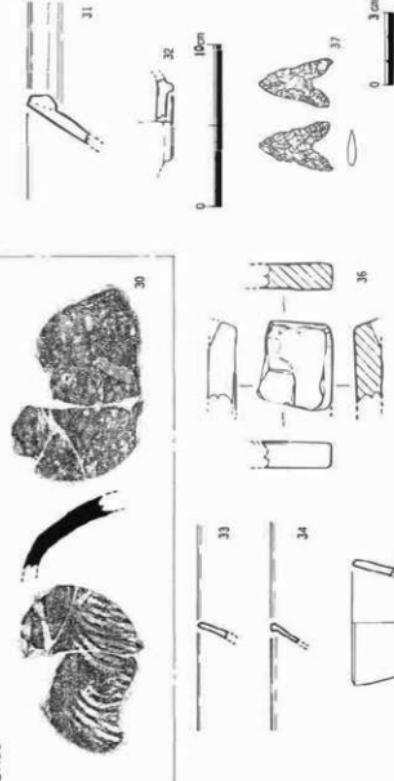


Fig. 14 出土遺物(1) (S=1/3)

Fig. 15 出土遺物(2) ($S=1/3 \cdot 1/2$)

ISX15出土遺物 (Fig. 14, Pla. 11)

3は胸器の底の口縁部である。灰褐色の素地に暗黄緑色の釉を施している。釉は内面にも見られるが遺存状況は悪く、意図して施釉されたものかは不明である。

4～6は須彌器の蓋の破片である。いずれにも内外面にタキが見られるが、6は還元不良で外側の擦減が激しい。

7は須彌器の短脚部である。還元は不良で、内面には工具痕跡が見られる。

8は須彌器の脚である。

9は土師器の蓋の口縁部である。

10は土師器の石燃である。脚の付き方から殆円形で両端に脚を有する可能性もある。

11～13は祭付の碗である。11は口焼けで、内面に鼻頭を用いた粗い筆書きの文様を施す。12は外面に鼻頭による文様が施されているが、全体に施された透明釉は白い点のような汚れが目立つ。13は内底面および高台底面の脚を残している。

14は青磁碗の口縁である。文様は見られず、灰褐色の素地に明青色の透明釉を施す。

15は青磁の体と思われる口縁部小片である。灰褐色の素地に暗黄緑色の透明釉を施すが、外面上部は緑色味が強い。

16は青磁の合子である。灰褐色の素地に文様を陽刻した後、暗青緑色の透明釉を施す。

17は白磁の瓶の口縁部である。

18は胸器の湯敷である。灰褐色の素地に暗黄緑色を下地とした白色の釉を施す。

19～21は陶器の碗である。19には表面に刺が施されていない。

22～26は陶器の瓶である。22は無釉、その他のは茶色系の釉が施されている。

27・28は陶器の瓶である。28は上部に暗青色釉、下部は白色粘土で文様を描いた後青黄緑色釉を施している。

29は丸瓦で、内面は布目、外面上部は白目が見られる。

ISX06出土遺物 (Fig. 15, Pla. 11)

30は須恵器の壺の肩部破片である。

表保遺物 (Fig. 15)

31は土鍋の口縁部である。

32は土師器の壺の底部で、内底面に重ね焼による粘土痕跡が見られる。

33は白磁碗の口縁である。文様はなく、白灰色の素地に透明釉を施している。

34は磁器の口縁部である。内側に粘土貼り付けによるつみあせしが見られる。

35は陶器の壺である。口縁部は無釉で、黄白色の素地に透明釉を施す。

36は現代瓦の破片である。

37は黒曜石製の石斧である。弥生時代のものか。

6) 小結

前述したように、今回の調査は一回に行われたとは言えない状況である。

A区については、出土・遺物が多く結論を出し難い状況であるが、検出面が表土からあまり下がらない事や検索された水田 (ISX15) が一面のみであること、古い時期と思われる遺物が見られないことなどから、近現代の遺構と判断する。

B区については遺物を多く出土したISD10が、ほぼ現状の地割りと大きく変わらない点と出土遺物に直後の赤坂焼に似た破片やアリント柄の磁器が見られた事から、これを近代以降のものと判断する。調査区を縦走するISD25・30・35からは出土遺物が見られず、ISX20からは瓦器の小片と熱い磁器の破片を出土しているが、出土遺物の総数が5点と少なく、これらの中の1つだけでは時代の特徴は出来ない。磁器はもともと本調査区は南側の熊野集落より北側の魔数集落に近く、耕作者も魔数居住の方が多い。元魔数には坂東熊野集落の西側に所在したといわれ、この辺りには「元魔数」という地名が残っている。「元魔数の観音堂」が残されていった魔数には、「元魔数天満神社が開かれた元魔数13年(1700)前後、その要因として北部の開発と留め池の設置により農業基盤が整備され、これがとされる。」これが傳承されば比較的新しい時期の遺物が多見られるることは自然な事と解釈できる。

しかし、中世頃の須恵器も依然としていることから、熊野神社との関係も考慮なければならない。ISX06

はトレンチ調査で、この時代の遺物1点のみの出土である。遺物の燃耗具合から流れ込みや開発による土の移動なども考えられるが、今回の調査では結論は出せなかった。この点は周辺調査の進展に期待する所である。

参考文献

「赤坂焼」	「魔数天満神社 一般ノホ通説の歴史」	1990	駿府市埋蔵文化委員会
「坂東熊野天満宮」	「坂東熊野天満宮」	1998	駿府市埋蔵文化委員会
「水見 穗庵」	「坂東熊野天満宮」	1999	駿府市埋蔵文化委員会

Tab. 1 熊野水町遺跡 遺構一覧

地区	省名	地名	经度(°E)	纬度(°N)	海拔(米)	生境	植被带	主要植物	附生植物	附生植物	附生植物
6	西藏	(5880)	93.7	0.0	3150	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→SA06-→SA07
7	西藏	(5890)	93.5	0.5	3100	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
3	西藏	(5900)	93.2	0.3	3150	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
4	西藏	(5900)	93.0	0.5	3120	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
7	西藏	(5905)	93.0	0.5	3110	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
7	西藏	(5910)	93.0	0.5	3110	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
7	西藏	(5915)	93.0	0.5	3110	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
11	西藏	(5916)	92.8	0.5	3110	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
11	西藏	(5917)	92.8	0.5	3110	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
8	西藏	(5918)	92.8	0.5	3110	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
16	西藏	(5919)	92.8	0.5	3110	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
13	西藏	(5920)	92.8	0.5	3110	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
6	西藏	(5921)	92.8	0.7	3100	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
6	西藏	(5922)	92.5	0.6	3110	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→SA02-→SA03
6	西藏	(5923)	92.5	0.5	3100	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
6	西藏	(5924)	92.0	0.6	3100	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→SD05
13	西藏	(5925)	92.0	0.6	3100	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→SD05
7	西藏	(5926)	91.0	0.2	3120	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→
10	西藏	(5927)	90.0	0.0	3120	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→SL05-→SD05
11	西藏	(5928)	89.0	-0.4	3120	N-寒带	针叶林	高山针叶林	杜鹃花科	无	SX05-→SD05-→SD10

Tab. 3 朝野水町遺跡 出土土器一覧

Tab. 3 熊野水町遺跡 出土石器一覽

Fig.	No.	雌蛾	雄蛾	全长 (mm)	触角 (mm)	后足 (mm)	重量 (g)	羽化日	寄主植物	羽化地	寄主
15	27	椭圆形灰黑 无斑石蛾		2.4	2.1	0.8	1.3	2008年6月16日	柳树条叶蛾	室内	柳树

2. 熊野松ノ下遺跡（1次調査）

1)はじめに (Fig. 16)

当遺跡は筑後市大字熊野字松ノ下1183-1に所在する。標高9m以下の低地に立地し、調査区北端には倉目川が西流する。試掘調査は平成15年度に行われ、当地からは細長い溝と土師器が認められた。その後、関係者と協議を重ねたところ、新設の水路工事予定箇所及び疏導渠によって削平を受ける箇所の646mを発掘調査対象として筑後市教育委員会が実施することとなった。調査は平成16年4月16日から同年5月30日まで行い、この間重機による表土除去（有限会社徳光建設に委託）、遺構の検出、掘削、測量（水準点設置作業はアジア航測株式会社に委託）、実測（遺構平面図作成は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託）、写真撮影（遺構全体写真撮影は有限会社空中写真企画に委託）等を実施した。発掘調査は小林勇作が担当した。



Fig. 16 調査地点位置図 (1/2,500)

2) 検出遺構

溝

ISD1 (Fig. 17, Pla. 13)

調査区北東部に位置する。やや蛇行した東西溝で、遺構上半部を大きく削平されているため約12.5m分を確認したところで終息する。溝幅は0.6m前後、遺構面からの深さは約0.07mを測り、埋土は濃黒茶色土を呈する。溝底はほぼフラットな状態を示しており、遺構の所々は現代の耕作による搅乱を著しく受けている。遺物は土師器（小皿）1点と小片が出土しており、中世以降の時期が想定される。

ISD2 (Fig. 17, Pla. 13)

ISD1とは平行した東西溝で調査区北東部に位置する。検出長約7m、溝幅0.55m前後、遺構検出面からの深さは約0.05mと浅く、僅かに溝底部を残存するのみである。埋土はISD1と類似した濃黒茶色土であり、遺物は僅かに土師器（小皿）2点が認められている。中世以降の埋没であろう。

ISD3 (Fig. 17, Pla. 13)

ISD1の南側で検出した。検出長約10mを測り、中央東部は一端途切れている。溝幅は最大で0.80m前後、遺構検出面からの深さは0.08mを測り、埋土は濃黒茶色土を呈する。当溝からは土師器小片が出土しており、検出されたISD1・2と同じ性格を有する同時期の溝である可能性が想定される。

ISD4 (Fig. 17, Pla. 14 - 15)

調査区南東部で検出した東西方向の溝で、遺構東端部は調査区外へ転じ、西端部は丘陵の谷部へと落ち込む。ほぼ直線的な溝で西部は途中ISD5へと分岐する。当溝とISD5の切り合いについて、堆積土の状況からは先後関係がなく、埋没時期までは分岐していたと思われる。土層観察から溝の構造について着目すると、上半部は断面がU字状（幅0.50~0.70m × 深さ0.40m前後）、下半部は断面が縦長の逆V字形（幅0.35~0.40m × 深さ0.20~0.30m）を呈する溝であった。また、埋土には砂が混入しない粘質土の堆積層

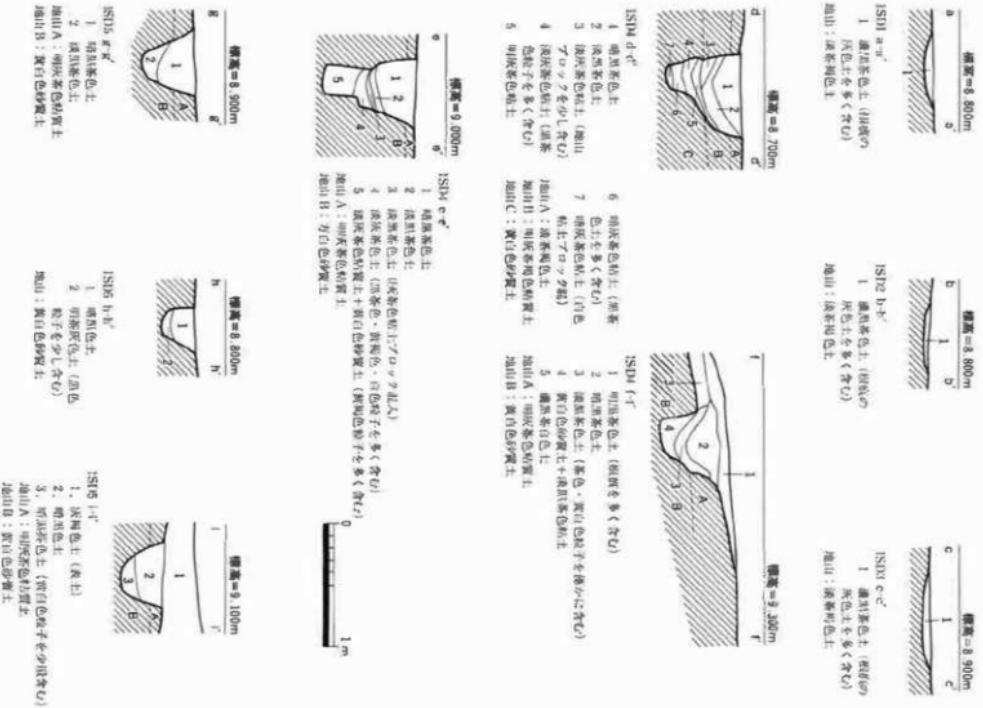


Fig. 17 溝土層断面測量図 (1/40)

が看取されたことから水流を殆ど伴わない水路であったと推測でき、水路としての機能を特徴するための補修や清掃が幾度となく行われたものと想定される。出土遺物は中世の土器小片、白磁片が僅かに認められているのみである。

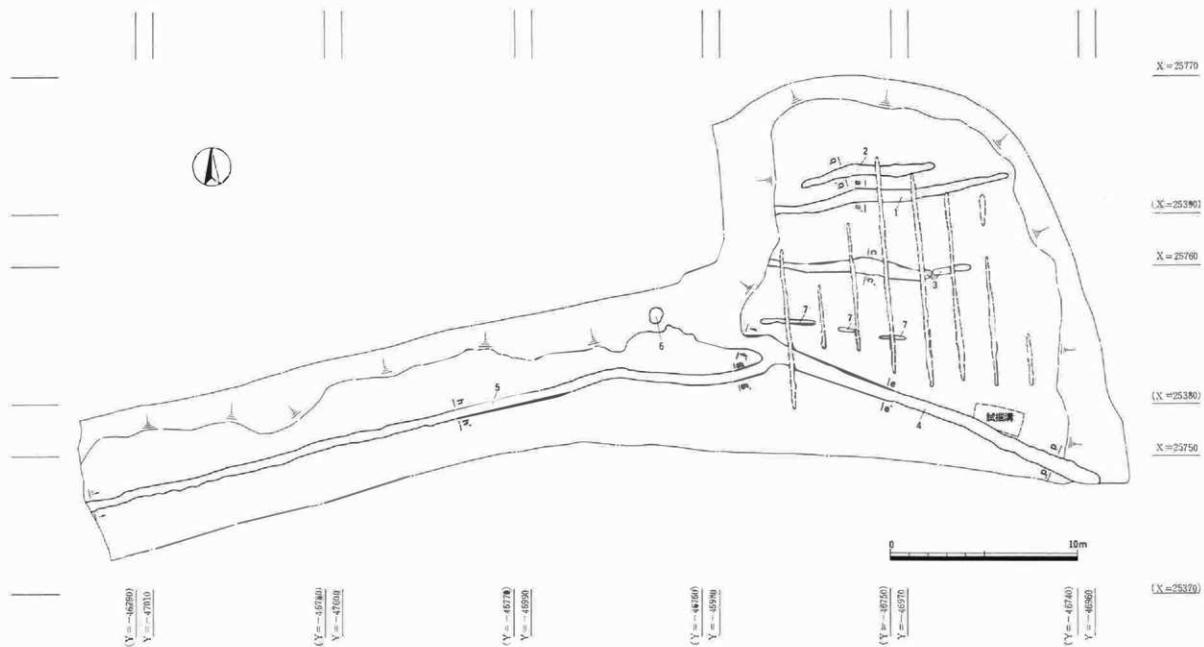


Fig. 18 熊野松ノ下遺跡遺構略測図 (1/200)

地図
 () 日本地図
 () 世界地図
 () 地質地図

S-番号	遺構番号	性格
1	1SD1	溝
2	1SD2	#
3	1SD3	#
4	1SD4	#
5	1SD5	#
6	1SK6	土坑
7	1SD7	溝

Tab. 4 遺構番号台帳

1SD5 (Fig. 17, Pla. 15・16)

関ケ区東部から西部へかけて検出された東西溝である。当溝と1SD4の切り合ひ關係については前述したとおりで、当溝の東端は1SD4より分岐する。幅0.45~0.60m、深さ0.28~0.43mを測り、溝の断面形は逆台形状を呈する。横た黒茶色土と灰茶色土の2層が堆積し、遺物は古代の土師器片（丸环）が出土しているが、流れ込みによるものと思われる。なお、1SD4から1SD5へと分岐したルートは、南側に現存する用水路とは平行する位置關係になり、当溝は現存溝の前進であった可能性が考えられる。

1SD4西端部の溝底で確認した標高より水の土坑で約0.7m前後を測る。平面形は不定円形状を呈し、地盤は暗黒茶色粘質土を基剣とする。出土遺物は皆無である。

3) 出土遺物

溝

1SD1 (Fig. 19, Pla. 17)

土師器

皿（1） 底部細片で底径は8.0cmを復原する。底部外面は糸切りで底盤内面はナデ、底部下位の内外面はヨコナデを施す。明白體色を呈し、胎土は微砂粒・角閃石・金雲母を含む。燒成良好。

1SD2 (Fig. 19, Pla. 17)

土師器

皿（2） 底部細片で底径5.8cmを復原する。底部外面は糸切り、底部下位の外表面は調整不明、内面にはヨコナデを施す。淡白茶色を呈し、胎土に微砂粒・黑色粒子・金雲母を含む。燒成はほぼ良好である。

小皿×環（3） 口縁部細片で内外面はヨコナデを施す。淡白茶色を呈し、黒色及び白色粒子・角閃石・金雲母を含む。燒成良好。

1SD5 (Fig. 19, Pla. 17)

土師器

丸环（4） 体部細片の資料で法量は測定不能である。表面は著しく摩耗しているが、底部内面の一帯には3箇所、見込みに1箇所施され、高台型付け以外の外表面に透明釉をかける。

1SD5 (Fig. 19, Pla. 17)

磁器

碗（5） 口径10.2cm、器高6.2cm、高台径4.1cmを復原する。淡青白色の均須で手描きによる文様が外間に3箇所、見込みに1箇所施され、高台型付け以外の外表面に透明釉をかける。

4) 小結

今次調査の成果について振り返る。

關ケ区北東部に位置する1SD1～3はほぼ平行する蛇行した東西溝であった。各々の溝は埋土の状況、發育状況、出土遺物等において類似する点が所々に見られ、同時期に同じ焼成で存在していた可能性が想定される。しかし、今頃はあまりにも既存状況が悪いため性格の位置付けに至ることはできなかつた。なほ、時期については各沟からの出土遺物に土師器片が認められており概ね中世の遺構と思われる。

次に蔚金区南部で検出された東西溝の1SD4及び1SD5について述べる。調査成果から両溝には溝頭レベ

ルに30cm程度の高低差が生じており、浅い1SD5は1SD4から分岐した溝と思われる。また流水の方向については各々の溝底レベル差から東方→西方と考えられ、これについては調査区南端にある現況水路の流水方向と合致する。なお、1SD4・5は現況水路の前身である内容については本文中でも記載したところであり、溝の性格については土地境界を示すための区画溝や田畠に供給するための用排水路であったことが想定される。遺物では1SD5から古墳時代の土師器丸壺が出土したが、1SD4では中世の遺物が主体であり、埋没時期を中世と考えておきたい。

当地周辺では、これまでの試掘調査資料もあまり蓄積されておらず、埋蔵文化財については空白の地域となっている。今回の調査成果はその第1歩となる貴重な資料であり、今後に生かされることであろう。今後に期待したい。

【長さの単位はcm. ○は復原値を示す】

Fig. No.—遺物No	遺物番号	R番号	名 称	器 形	口 径	底径(高台律)	器 高	備 考
19—1	1SD1	1	土師器	壺		○ 8.0		小片
19—2	1SD2	2	〃	豆皿		○ 5.6		小片
19—3	"	1	〃	小皿×坪				小片
19—4	1SD5	1	〃	丸壺		○ (10.4)		小片
19—5	表土採集	1	磁器	碗	○ 10.2		4.1 6.2	1/4残存

Tab. 5 出土遺物観察

3. 熊野五反田遺跡（1次調査）



Fig. 20 熊野五反田遺跡 位置図 ($S=1/2,500$)

1)はじめに

熊野五反田遺跡は笠置市大字熊野517に所在する。倉目川右岸に位置し、対岸には熊野宮ノ後遺跡が所在する。標高6mほどの平地だが、熊野・藏敷の微丘陵に挟まれた谷地形である。護岸工事のためか倉目川による河岸段丘の発達は確認されない。明治14年以前は西側の字「沖」の一部であった。

試掘調査では、大型の溝状遺構2本が中世の遺物と共に確認された。調査対象面積は175m²である。調査は平成16年6月8日より始められ、同年8月25日にこれを終了した。

2) 基本層序

今回の調査区は水田として利用されていた。表土を0.1mほど掘り下げたところで昭和40年代もしくは昭和60年代に行われた河川改修工事に伴う埋土が確認された。この埋土は南側に向かい厚く堆積しており、更に0.4mほど掘り下げるところ黄白色砂質土の地山となる。遺構面は約5.0~5.2mである。

3) 接出遺構

遺構は倉目川の流路とこれに平行する水路群、両者を結ぶ小

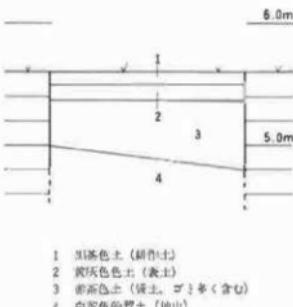


Fig. 21 基本層序模式図

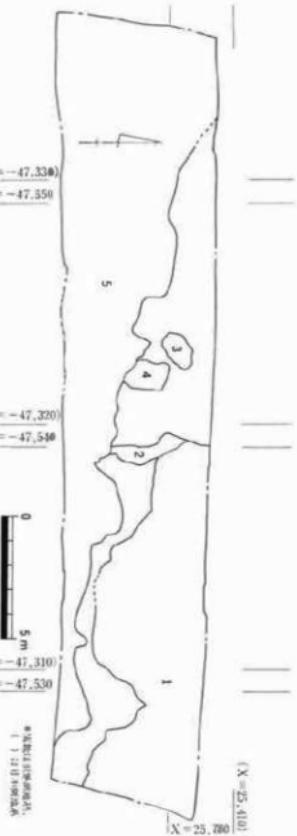


Fig. 22
黒野五反田遺跡 遺構配置図 (S = 1/200)

水路 1 条、土塁 1 基、溜り状遺構 1 基が確認された。

水 路

ISD01 (Fig. 23, Pla. 19) は、園谷区北東側で約14.2mほど確認された水路で、ISX05に平行する。当初、一つの大溝として調査を行なったが、土層境界によりこれが複数の溝の集合体であり、幾たびかの掘り直しも行なわれていることが確認された。その方向はまちまちであるが、東側から西側へ側に張り出すような大きな溝が存在し、東側において小さな水路がこれに接続するのが基本的なものと考えている。ここからは土築器窯跡、土築器片、黒曜石製石錐、黒曜石片、チャート廢石 (Fig. 26-3) (111・12層埋土下部より出土した) (Fig. 26)。大半が埋土上部からの出土で混入品である。チャート廢石 (Fig. 26-3) (111・12層埋土下部より出土している)。

ISD02 (Fig. 24, Pla. 21-1)

ISD01とISD05を結ぶかのように掘られた小さな溝で、西側にISX04が位置する。全長約3.1m、側溝



ISD01

- | | |
|---------------------------|------------------------------------|
| 1 黄褐色砂 (極細粒) | 10 棕褐色シルト (ラミナリ岩・風化) |
| 2 灰色砂 (赤茶色が見られる) | 11 棕褐色砂 (ラミナリ岩・砂粒1mm~3mm大、層下部は4mm) |
| 3 黄褐色砂 | 12 灰色粘土 |
| 4 暗灰色砂 (3mm以上の粒が見られる) | 13 棕褐色粘土 (ラミナリ岩・砂粒1mm大) |
| 5 深褐色砂 (1層と同じになら板状泥岩が混じる) | 14 黑褐色粘土 (風化砂4mm) |
| 6 黑褐色粘土 | 15 深褐色粘土 (薄か) |
| 7 黑褐色シルト | 16 黑褐色粘土 (薄) |
| 8 棕褐色シルト (ラミナリ岩・風化・風化) | 17 黑褐色・削鉢色粘土 (風化による風化・薄) |
| 9 棕褐色シルト (褐色粘土が多め) | 18 黄褐色砂 (風化・風化・15層より色濃い) |

Fig. 23
ISD01土層断面 (S = 1/150)

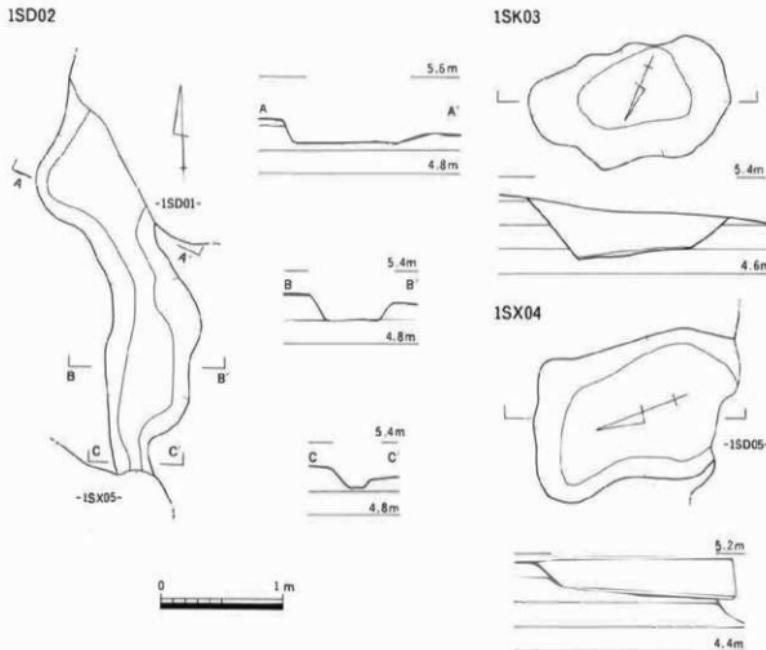


Fig. 24 ISD02・ISK03・ISX04 (S = 1/40)

0.3~1.2m。深さは約0.2mで底面はほぼ平坦あるが、水準高は僅かにISD01側（北側）が高い。主軸の傾きはN=2°-Eを測る。埋土は黄灰色の單一埋土であった。

ここからの遺物の出土はなかった。

土壤

ISK03 (Fig. 24, Pla. 21-2)

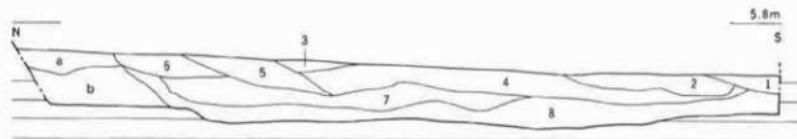
調査区中央部で検出された土壤で、両側にISX04・05が位置する。全長約1.6m、幅約1.0m、深さ約0.5m。主軸の傾きはN=67°-Eを測る。埋土は褐色砂質土を主体とするが、細かな観察は行っていない。この遺構からの出土遺物はなかった。

溜り状遺構

ISX04 (Fig. 24, Pla. 22)

調査区中央部で検出された遺構で、北側にISK03が位置し、両側のISX05に切られている。当初、上部にISX05の埋土が複数重ねていたので同一遺構として調査を行っている。検出長約1.5m、幅約1.2m、深さ約0.3m。主軸の傾きはN=21°-Eを測る。

この遺構からの出土遺物は、前述の理由により不明である。



ISX05

- 1 黄灰色砂 (ラミナ発達)
- 2 白色砂層 (1m人の砂層多い)
- 3 灰色シルト (ラミナ発達)
- 4 暗灰色砂層 (2~3mの大の石が多い、遺物・貝殻石を含む)
- 5 暗灰色砂層 (ラミナ発達)
- 6 暗灰色砂層 (ラミナ弱い、5層とは堆積方向が異なる)
- 7 黄灰色砂 (ラミナ発達、下部には2cm大的の石を含む)
- 8 黑灰色粘土 (砂層とのラミナが見られる、粘性強)
- a 白灰色シルト (砂層)
- b 黄灰色砂 (砂層)

Fig. 25 ISX05 土層断面 (S=1/50)

流路

ISX05 (Fig. 25, Pla. 20)

調査区南西側で約30.5m分が確認された倉目川の旧流路で、北側へ向かい張り出している。東側の細長い部分は別遺構の可能性も残るが検出時に分離できなかったため同一遺構とした。埋土は砂・シルト・砂

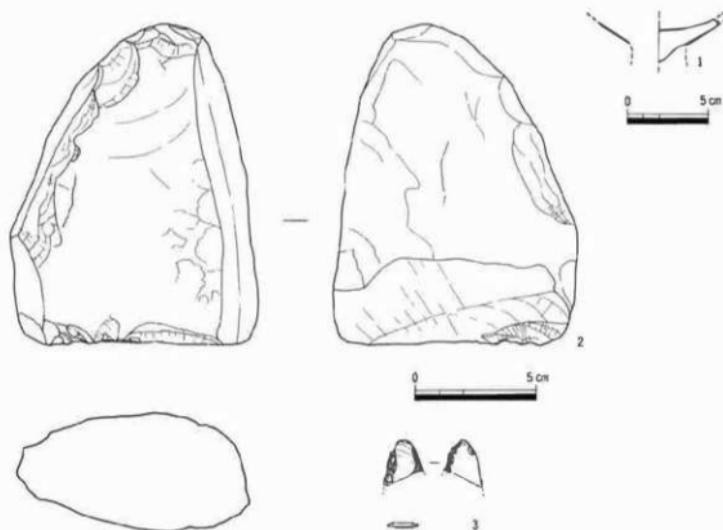


Fig. 26 ISD01出土遺物 (S=1/2・1/3)

縁唇が交互に崩壊して45り、各々ミナミナ状堆積物が発達している。7層（黒灰色沙）下部には2cm入の小石も見られ、この下から16世紀の青磁碗（Fig. 28-30）が出土している。

出土遺物には新兵器Ⅲ、須彌鉢、土師器、土師器环、土師器鉢、土師器鑿、土師器大鑿、土師器鑿、土師器高环、土師器片、瓦器陶、青磁碗、青磁皿、白磁碗、陶器碗、陶器片、サヌカイト片、黒蝶石片、チャート片が見られた。（Fig. 27・28）

4) 出土遺物 (Pla. 23)

ISX05出土遺物 (Fig. 26, Pla. 23)

1は窓口の折算部で、全体に修復を受けている。

2はチャートの原石である。この辺りでは見かけないので、搬入された可能性が高い。

3は刺片織の先端部である。編織機のある黒蝶石製で、若干風化が進んでいる。丁寧な造りである。

ISX05出土遺物 (Fig. 27・28, Pla. 23)

1～3は須恵器の縁の口縁部である。1・2は東播弄、3は燒成不良により赤味が強い。

4は須恵器皿である。底部縁をへら切り。

5～12は土削皿である。大半が削減をしているが、5・9・10・12は縫合糸切りの痕跡がある。

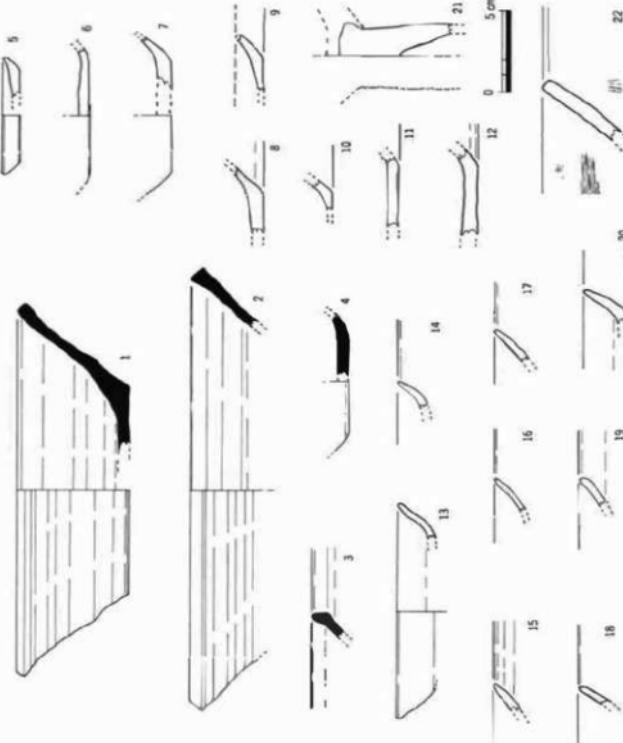


Fig. 27 ISX05出土遺物1) (S=1/3)

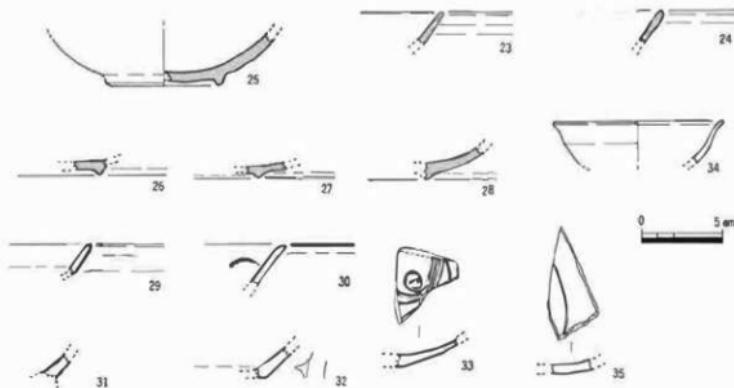


Fig. 28 1SX05出土遺物(2) (S=1/3)

13~20は土師器の环である。全て磨滅しており、調整は不明。

21は土師器の高环の脚部である。全体に磨滅が激しく調整不明。

22は土師器の鉢である。磨滅しているが、内外面にハケ目が見られる。

23~28は瓦器塊で、23・24は口縁部、その他は底部である。いずれも磨滅が激しく調整不明。

29は青磁皿の口縁部である。黒色粒子を含む灰褐色の素地に青色透明釉を薄く施し、器壁立ち上がり部分に貫入が発達している。外面には1条の沈線を施している。

30~33は青磁碗である。30は口縁部で洪水による堆積層と思われる7層直下より出土。僅かに黒色粒子を含む灰褐色の素地に暗めの緑がかった透明釉を施し貫入が見られる。内面は口縁部に1条の沈線を施し、その中に文様を施している。31は碗の体部で、器壁の立ち上がり部分である。明灰色の素地に明るく青味がかった緑色の半透明釉を施す。内面見込み部分には円窓が施され、外面には蓮弁を施す。小片であるため明確ではないが、蓮弁は立体的に表現されている。32も碗の立ち上がり部分であるが、31と比べて整形はかなり難である。灰色の素地に灰色がかった緑色透明釉を施すが、外面上には露胎部分が見られる。この露胎部分は整形された様子は見られない。外面には文様を施したと思われる凹凸が見られるが、小片のため不明である。33は青磁碗の体部である。本来はもう少し立ち上がると思われる。灰色の素地に緑がかった透明釉を施し、内面にヘラ描きで文様を施す。

34・35は白磁碗である。34は黒色粒子を含む白色の素地に透明釉を施すが、口縁端部および内面3mmほどは露胎。35は見込み部分の破片で、明灰色の生地に白色釉を施すが外面上部付近は露胎。内面には円窓が見られる。

5) 小結

遺跡のまとめの前に倉目川について概略する。倉目川は熊野丘陵と蔵敷丘陵の間を流れる自然河川で、現在は谷頭に構築された八女市の中重堀(1684築堤)や坂田溜池(1900)・昭和池(1950)などを水源としている。これらの溜池が造られる前は季節による水量の増減が大きく、農業用水としては心もとない状況であったと言われる。しかし、大雨に見舞われると一気に水量が増し、現在でも周辺に川の水が溢れ出す状況である。また小河川であるため河川改良などの記録は残っていないが、昭和40年代と60年代に河川改

良工事が行われたということである。調査開始時に確認された改良工事の埋土には肥料を管めたビニール養が見られたので、後者のものであろう。

今回の調査では主に水槽群と金目川田流路を確認したが、前者からの遺物出土はこれが所有する時代を決定する資料とはなりえなかった。しかしながら、ISD02の存在は、両者が同時期に機能していた可能性を示すものである。1SN05の出土遺物は主に中世後半のものである。前述のように供木による堆積の可能性を述べたが、須恵器や骨磁などは焼れ口はしつからしており、瓦器や土師器なども磨滅具合は弱い。磨滅が激しいのは混入していた強火や骨磁などを想われる高火（Fig. 26-1, 27-21）ぐらいである。遺物の主体は中世後半であり、この時期に河川に対しこれらを投げ込むような存在が、調査区付近に存したと考えられる。

そこで先ず思いつかれるのは坂東寺能野神社である。

坂東寺は天承元年（1131）持賢門院を家主として立並、天保4年（1138）に熊野宮に寄進された。鎌倉時代を通じ発展を経け、元弘の乱の頃（1333）に神社仏閣を焼失するも再興されている。南北朝期（1369）には稱の木田花と境争いを起し、戦国期（16c-t Q）には三光寺（山光寺）などの僧兵が焼滅に唇を構えるなど勢力を誇るが、大友氏と關辻諸勢力の争いが激化していく中、武士の所前箭削により解体されいつた。

本調査区はこの坂東寺能野神社の北に位置するのだが、出土遺物該当期やその前後に、調査区周辺での坂東寺能野神社関連の史跡の存在は知られていない。西側に隣接する三善莊に対しては下巣の宗西寺があるが、両者の争いは記録には残っていない所である。南側の熊野宮ノ後遺跡の調査成果と黒らし合せる必要があるが、現時点ではどのような施設が存在していたか、想定する出来ない状況である。

今後の開拓での調査事例に課題を残す所である。

参考文献

佐藤水原	「筑後市らが生いたたちの里」第3集	1976	筑後市教育委員会・筑後郷土史料研究会
石川山里編さん委員会	「筑後山里」	1998	筑後市
石川山里編さん委員会	「筑後山里」	1998	筑後市

视野五反而重译（1次调和）

Tab. 6 熊野五反田遺跡 遺構一覧

FID	番号	遺傳子番号	アリゲーター	瓦軒 (m)	幅軒 (m)	斜軒 (m)	斜軒 (m)	上軒	平面形状	断面形状	出土遺物	時期	備考
22	1	15D01		(14.2)	—	—	—	—	土器器、石器、白瓦			盛川遺跡の合併	
22	2	15D02		3.3	4.3~1.3	—	9.2	N 2° E	孤丘	圓柱	NON		
22	3	15K03		1.8	1.8	9.5	N 67° E	平底窪	邊角形	NON			
22	4	15K04		(1.5)	1.2	9.3	N 27° E	丸角円錐形	邊角形	NON			→ 五反田
22	5	15K05		(38.0)	—	—	—	—	箱型、圓錐、圓柱、棒状、細管、白瓦	中空	日暮貝塚		

Tab. 7 熊野五反田遺跡 出土土器一覧

Tab. 8 熊野五反田遺跡 出土石器一覽

Fig	No.	通稱	經緯	Q ₁₀₀ (m)	Q ₅₀₀ (m)	Q ₁₀₀₀ (m)	地盤(m)	孔深(m)	透石數	資料來源	備註
26	2	155003	137°47'	1.2	0.0	0.0	0.00	0.0	0-1(透石少)		
26	3	155003	137°47'50"	1.0	1.0	0.0	0.00	0.0	0-1(透石多)	先細繩	

4. 熊野宮ノ後遺跡（1次調査）

1)はじめに (Fig. 29)

当遺跡は筑後市大字熊野字宮ノ後647・651~654・655の6筆に所在する。標高9m以下の低地に立地し、調査区の北側には西流する倉目川が隣接する。試掘調査は平成15年度に行われ、当地からは溝と多量の遺物が認められた。この結果をもとに関係者と協議を重ねたところ、新設の水路工事予定箇所(1,317m²)を調査対象とし、発掘調査は筑後市教育委員会が実施することとなった。平成16年6月10日から重機による表土除去(有限会社彦光建設に委託)、遺構の検出・掘削・測量(水準点設置作業はアジア航測株式会社に委託)、実測(遺構平面図作成は株式会社理謙文化財サポートシステムに委託)、^{写真}撮影(遺構全体写真撮影は有限会社空中写真企画に委託)等を実施し、平成16年8月20日をもって終了した。なお、調査は小林勇作が担当し、一部で上村英士、阿比留士朗の協力を得た。また、調査区については現況水路や埋設物の関係で3区間に分断されたので、便宜上、東側よりA調査区・B調査区・C調査区と称し報告する。



Fig. 29 調査地点位置図 (1/2,500)

2) 検出遺構

基本土層

調査前、当地は水田又は畠などの耕作地として利用されており、耕作土は表土(約0.2m)と底土(約0.1m)で形成されている。耕作土を除去すると中世の遺物を豊富に包含する暗茶褐色砂質土が堆積しており、この包含層直下で今回の遺構が検出された。遺構検出面となる地山は淡灰色砂質土を呈し、これより約0.3~0.5mの深さでは漁灰黄色砂の堆積層が確認される。

A調査区
溝

1SD30 (Fig. 30, Pla. 27)

調査区東端部に位置した南北溝で、北側は西池する食日川に接する。検出長は約7.0m、上幅1.9~4.4m、下幅1.1~3.6m、深さ0.5m前後を有し、裏溝の平面プランは著しく凹出した不定型なものであった。溝中央部の岡井壁においては複数のヒットペーパースが集中して確認されるなどや不安定な状態を呈する。また、溝底に至っても不安定な状態は変わらず、段々蛇行した溝底の造形と若干違ったビット状痕跡が認められる。堆積土は黒灰色砂質土を基調とするものであるが、流水を作っていたことが観察される。更に、溝底で確認された溝との関係については、切り合いで確認することから斬伐削削溝の存在、或いは埋没過程中にできた自然断面跡などを考えられる。当溝の出土遺物は、各層から散在的に土師器（小皿・片）、白磁（碗）、青磁（碗）、瓦（平瓦・丸瓦）が認められている。

1SD32 (付図 4)

調査区中央部で検出した検出長約15.0m、幅0.3m前後のやや蛇行した東西溝である。深さは0.15m程度と残存状況は極めて悪く、全体的に不安定な状態で確認された。堆積土は黒灰色砂質土を基調とし、出土遺物は須恵器（片）、土師器（小皿・土鍋・片）、白磁（碗・片）、青磁（片）、染付（片）、石器（石蹴・砾石・黒曜石片）、瓦（片）など多くの遺物が認められている。

1SK31 (付図 4)

1SD30の西隣で検出した不定型形形状の土坑である。幅は0.85~0.98m、深さは0.36mを測る。底部はほぼフラットな状態である。堆積土は黒灰色砂質土を呈し、出土遺物は皆無であった。

1SK31(付図 4)

1SK31の南側で検出した梢円形を呈した土坑であり、長軸1.40m、短軸0.85mを測る。遺構内部の軸北2箇所にテラスを有し、中央部は深さ0.15mを測る。堆積土は黒灰色砂質土を呈し、出土遺物は認められていない。

落込み状遺構

1SK33 (付図 4)

A調査区の西端部に位置する。当遺構はA区とB区の調査区間に存在する南北方向の現況水路に前にかつて餘々に落ち込んだ跡跡であり、旧河川若しくは自然流路であった可能性が考えられる。堆積土は黒灰色砂質土を呈し、出土遺物は堆積土中に包含する摩滅した土器片が認められたのみであった。

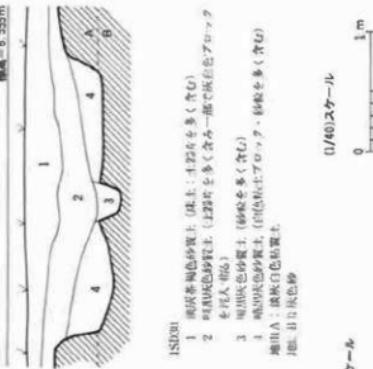
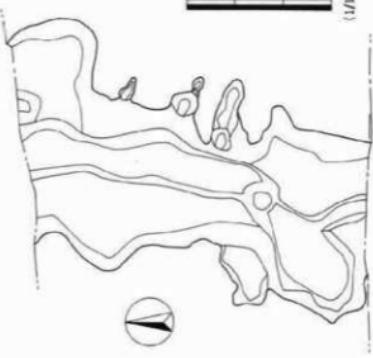
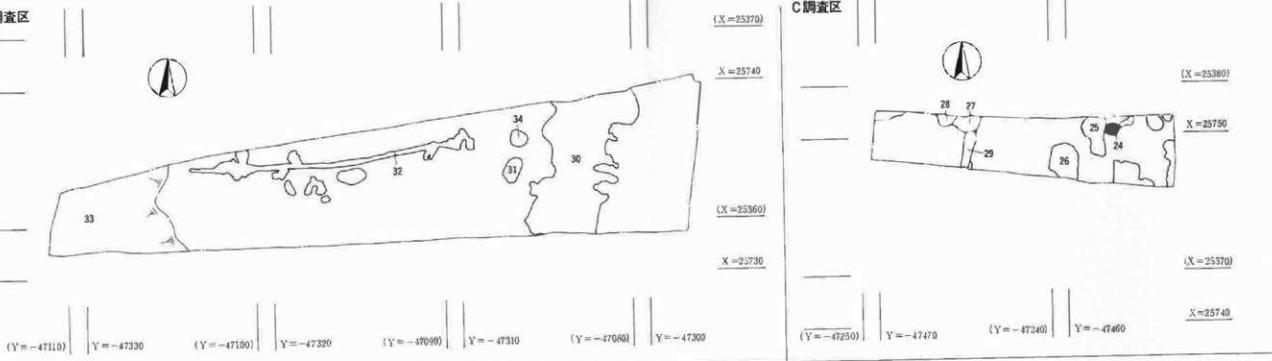


Fig. 30 A調査区 : ISD30実測図 (1/1 00 1/40)

A調査区



面所標
() 日本国跡地
() 宮古 世界遺産地

B調査区

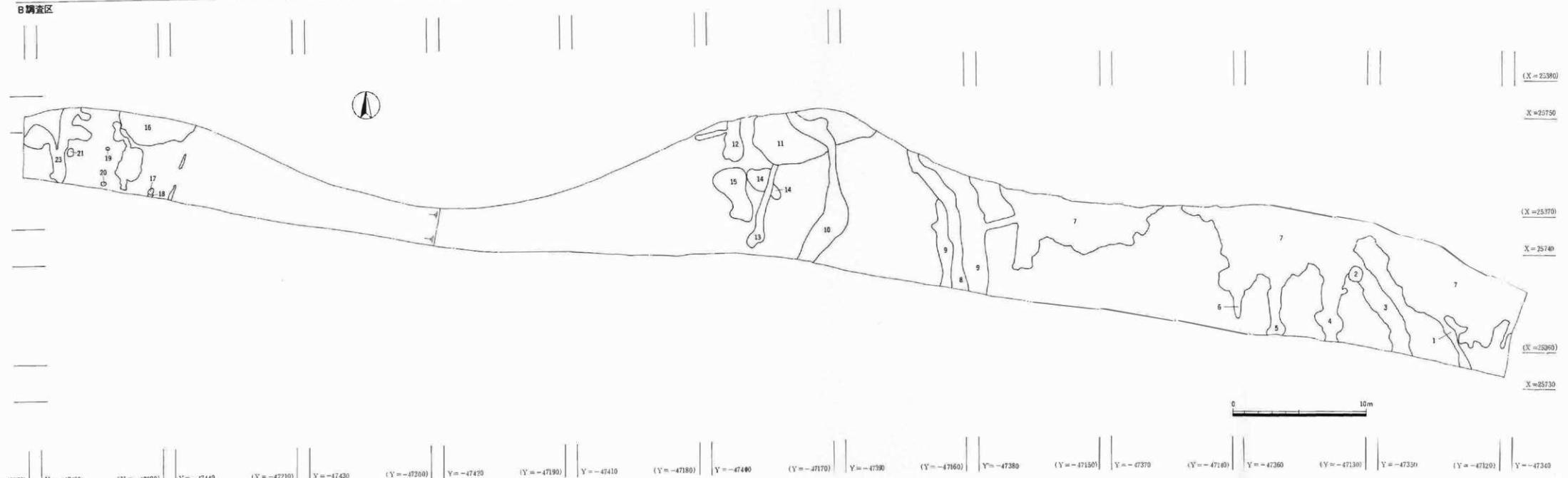
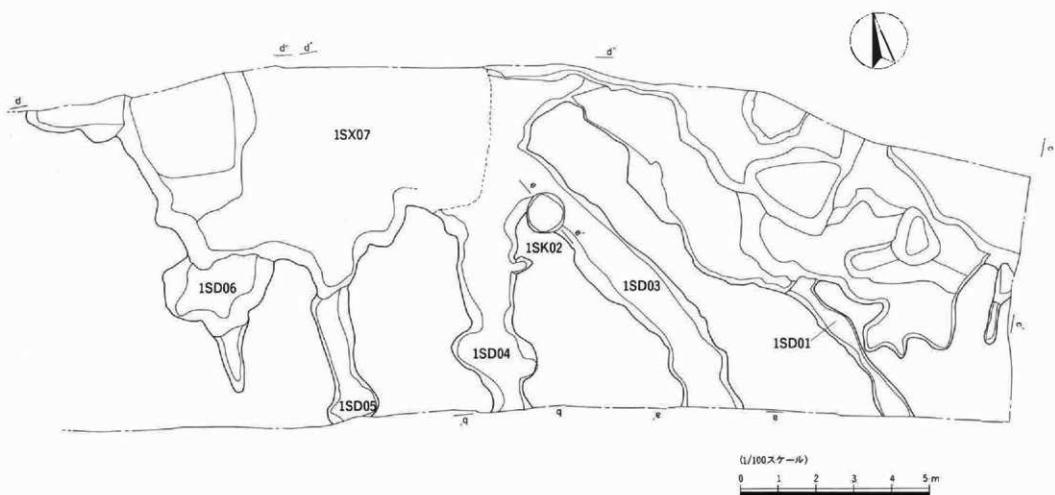


Fig. 31 熊野宮ノ後遺跡遺構略測図 (1/200)



(t/100ステール)

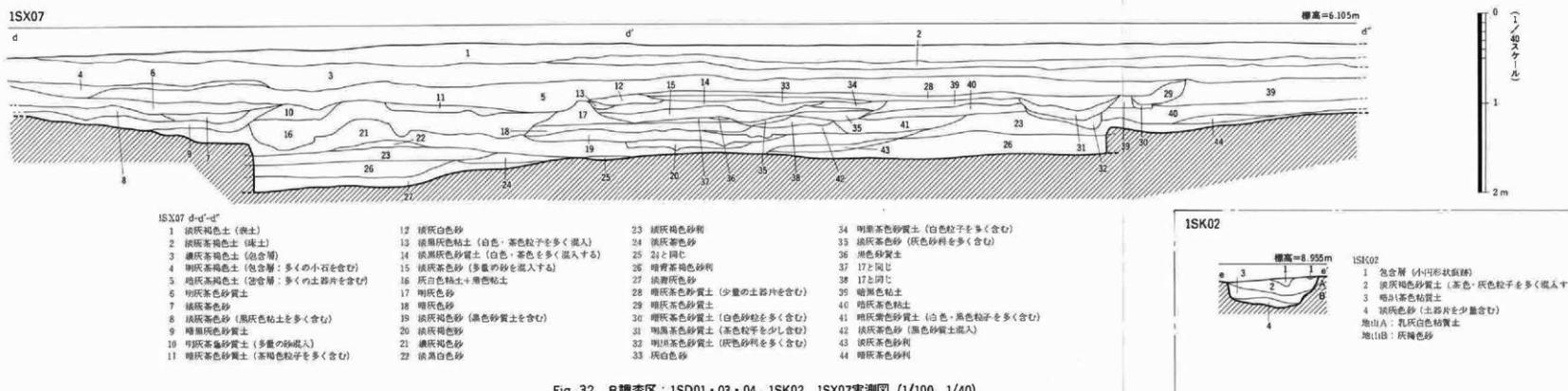


Fig. 32 B調査区：1SD01・03・04、1SK02、1SX07実測図（1/100、1/40）

B調査区

溝

1SD01 (Fig. 32)

当溝はB調査区最東端の南部に位置し、検出長4.5m、幅0.4m前後、深さ0.02~0.13mを測る。南東→北西方向を示し、溝の北端部は倉目川の河川跡である1SX07へと向かっている。[△]当溝とSX07の先後関係については把握できていないが、1SX07土層断面において包含層である暗灰茶褐色土を貫通していることが観察された（1SX07-29・30層）。当溝の堆積土は暗灰茶色砂質土を基調とし、最下層に白色砂粒を多く含んでいることから流水があったものと判断され、溝底の高低差より南東→北西への流れであったと考えられる。遺物は須恵器（甕・鉢）、土師器（小皿）、石製品（石錐）が出土した。

1SD03 (Fig. 32, Pla. 28)

当溝は1SD01とはほぼ平行する南東→北西方向の溝で、途中は1SK02に切られる。これより北端部は河川跡（1SX07）及び1SD04と接するが切り合いについては不明である。検出長約8.5m、幅1.1~1.5m、深さ0.28~0.52mを測る。溝底及び両岸はほぼ安定しており、断面形は緩やかな逆台形状を呈する。堆積土は中層域（3・4層）で乱れており、一定量の流水があったものと想定される。土師器片が出土した。

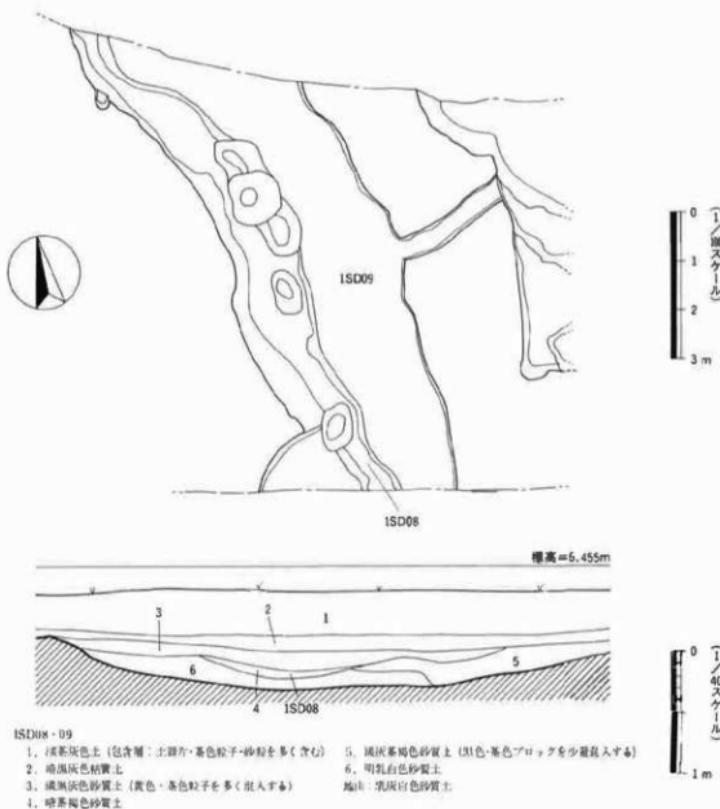


Fig. 33 B調査区：ISD08・09実測図（1/100・1/40）

1SD04 (Fig. 32, Pla. 28)

調査区東端部で確認した南北方向の溝であり、北部は1SX07と1SD03に接する。遺構間の明確な切り合は確認できていないが、1SX07土層断面において黒茶色砂質土を基調とする埋土（1SX07-31・32層）が確認されており、1SD01と同様に河川跡の1SX07を貫通していることが考えられる。検出長約5.2m、幅0.8~2.0m、深さ0.21~0.42mを測る。溝の平底プランは不安定でやや混れていたが、下位は比較的安定しており、堆積土に多くの砂を含むことから一定量の流水があったものと想定される。須恵器（常滑系甕）、土師器、輸入陶磁器が出土した。

1SD05 (Fig. 32)

1SD04の西隣で確認した南北溝である。先述してきた溝と同様に北部は1SX07に接する。堆積土は黒茶色砂質土の單一層で残存状況は悪く、検出長約3.3m、幅0.6~1.4m、深さ0.08mを測る。

1SD06 (Fig. 32)

1SD05の西側に位置し溝の北部は1SX07に接する。遺構は痕跡を僅かに留めるのみで検出長1.7mを測る。遺物は出土していない。

1SD08 (Fig. 33, Pla. 29)

B調査区中央部のやや東よりに位置し、1SD09のはば中央を南北方向に走る。埋土は暗灰褐色砂質土を呈し、1SD09を切るように検出されたが、1SD09埋没過程の一部である可能性も考えられる。検出長約11m、幅0.6~1.1m前後、深さ0.3m前後を測る。土師器片が出土する。

1SD09 (Fig. 33, Pla. 29)

1SD08と切り合った南北溝で、途中1SX07へと分岐する。溝の断面形は緩やかなU字状を呈し、溝底にはピット状の窪みが認められる。主体の溝は検出長約11m、幅3.0~4.0m、深さ0.4~0.13m前後、分岐した溝は検出長約2.3m、幅0.4m前後、深さ0.03m前後を測る。出土遺物はない。

1SD10 (Fig. 34, Pla. 29)

B調査区中央部のやや東よりで検出した南北方向の溝で、北部は後述する河川跡（1SX11）を切り込む。

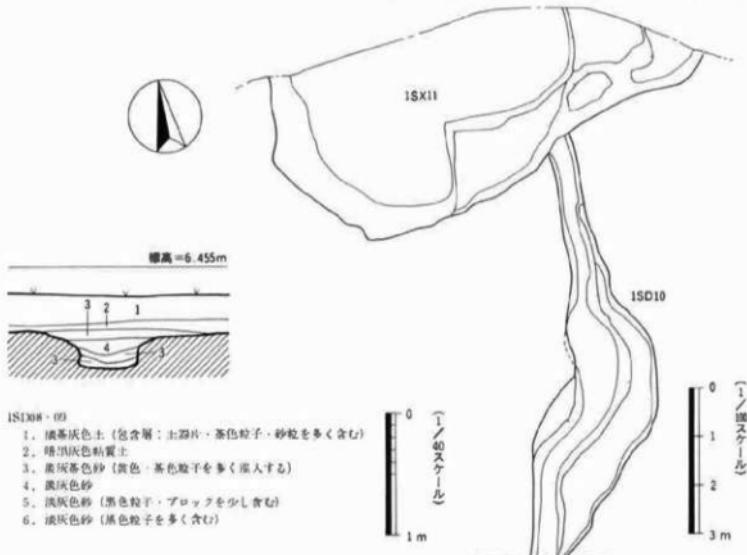


Fig. 34 B調査区：1SD10実測図 (1/100・1/40)

施行した溝で検出長12.5m、幅0.5~2.1m、深さ0.26~0.52mを測る。埋土は淡灰茶色砂質レンガ状に堆積しており、西岸部溝底が抉られていることから一定量の流水があつたものと判断される。

ISD13（付図4）

ISD13の西側で検出した南北溝で検出長4.5mを測る。構の北端部はISX14を切り、南端部は横円状に広がって終息する。残存状況は極めて悪く深さは0.17m程度であった。埋土は淡灰茶色砂質土であつた。

ISD23（付図4）

B調査区の西端部に位置する。溝は途中分岐しており、平面プランは非常に亂れた状態で検出された。溝底には著しく段差を認め、深さは12.1m、0.30mを測る。埋土は灰茶色砂質土を基し、遺物は土師器（小皿）、瓦器（輪）、青磁片を認めた。

流路

ISX07（Fig. 32, Pla. 30）

当遺構は北側を西流する倉日川の痕跡と考えられ、平面プランは不整に入り組んだ形状を呈している。

B調査区東側に位置し、便宜上東半部と西半部とに分けて報告する。遺構は一見渦が集結した溜まり状の流れ³⁾と捉えられるが、始どの溝はいか道溝を切っていることが確認されている（先駆關係にでは「各構の輪を参照されたい）。土層観察について、東半部東側（c-c'）では概ね南側から流れ込みによる堆積層が確認されたが7.8mでは「吹き寄せた砂質層が發現されており、一定量の流水があつたものと推測される。更に東半部北側（d-d'）では東側から西側へ折り返す地盤層が看取されたことにより、流水は現在の倉日川と同様に西流していたことが想えれる。西半部についても至き12.2m、幅4.0m分を検出し、深さは最大で1m程度を測る。両半部ともに出土遺物はなく、唯一部の床面から細材の自然流木が認められた。

ISX11（Fig. 34）

当遺構はB調査区中央部や東よりに位置した複数輪跡遺構でISX07と同様の河川跡と考えられる。1SD10に中央部を貫通され、長さ8.7m、幅3.9m分を検出した。遺構底部は西半部に向かって落ち込んでおり、深さは最大で0.51mを測る。土師器片、青磁片を出土した。

ISX16（付図4）

B調査区西部に位置した半円状の遺構で、先述したISX07-11と同様の河川跡と考えられる。他遺構との連合ではなく、長さ5.8m、幅2.2m分を検出する。遺構底部はほぼアラットな状態を示しており、深さは0.21mを測る。出土遺物は皆無であった。

土坑

ISX02（Fig. 32, Pla. 31）

ISD03の北側溝部を切るように検出した楕円形の土坑で径は1.1m前後、深さは0.35mを測る。埋土は概ね3層に分層でき、上層から淡灰茶色砂質土→暗黒茶色粘質土→淡灰茶色砂質土へと逐次変化する。底盤はレンガレス状に形成する。また、最上層には後に述べる不明鉄錠（小円形鉄鍛錠）土層が看取される。更掘系糸、土断器（小皿）、輸入陶磁器が出土した。

溜まり状遺構

ISX12（付図4）

B調査区中央の1SX11西隣に位置した不定長方形状の遺構で、人為的遺構とは捉え難く、端つまり状遺構として報告した。規模は長軸3.0m、幅1.1m、深さ0.3mを測り、後述する1SX14-15と同期の性格が考えられる。須恵器片、土師器片、瓦器（輪）、輸入陶磁器が出土・遺物として認められた。

ISX14（付図4）

ISD13に切られた不整形状の遺構である。規模は長軸2.9m、幅0.7m、底盤はピット状の凹凸が認められ、最大で0.32mを測る。遺構は人為的に削削された可能性は低いが、埋没時に進入したとともにられる土師器（小皿）、輸入陶磁器が認められている。

ISX15（付図4）

1SX12の南隣で検出した不整形状の遺構で、長軸4.1m、幅1.0~2.7m、深さ0.08mを測る。先述した1

SX12・14と同類の性格が考えられる。束縛系鉢、常滑灰甕、土師器片、瓦器(桶)、輸入陶磁器、石製品(砥石・黒曜岩石片)が出土した。

その他の遺構

不明痕跡 (付図4、Pla. 31・32)

B調査区からは、小円形状を呈する痕跡（以下、小円形状痕跡）並びに細く筋状に延びる痕跡（以下、筋状痕跡）が遺構検出面で集中して確認された。各痕跡のプランについて、まず小円形状痕跡は幅5~10cm程度、深さ10cm以内を測り、平面は小円形状、底部はすり鉢状若しくは若干窪んだ状態を呈する。検出面ではこの小円形状痕跡が単体のものと密集してある程度グループ化したもののが確認されており、群を呈した痕跡は梢円形状・不整円形状・連鎖状に確認される。なお、底部は凹凸状を示す。一方の筋状痕跡は直線的に延びるもの、細かく蛇行して延びるものがあり、何れも幅は5~10cm程度、深さは10cm以内を呈する。埋土について、岡痕跡は何れも包含層土に類似した暗茶褐色砂質土を基調としており、各単体によって若干の土壤に変化が認められる。更に分布状況について、小円形状痕跡は調査区内全域に広く分布しているのに対し、筋状痕跡は現倉目川との境界付近で認められている。

小円形状痕跡、筋状痕跡については今回不明遺構として報告したが、当地が永年にわたって耕作地として活用されていた状況を踏まえると小円形状痕跡は耕作時に人や動物（牛・馬）が残した歩行痕跡、筋状痕跡は鍬や鋤などの道具で掘削された痕跡と推測される。

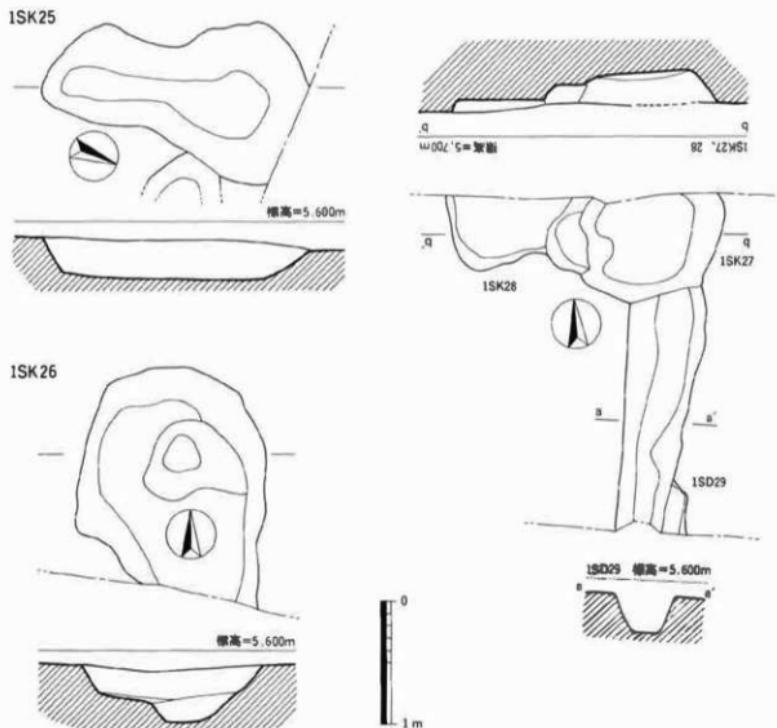


Fig. 35 C調査区：1SK25~28、1SD29実測図 (1/40)

C 調査区

溝

ISD29 (Fig. 35)

J調査区の西部に位置し、北端部はISK27に引られる。ほぼ直線的に延びる溝で検出長約2m、幅0.45~0.60m、深さ0.3mを測る。黒茶色土を呈し、出土した遺物はない。

土坑

ISK25 (Fig. 35)

平面プランは複雑形を呈し、長軸2.1m、短軸0.7m、深さ0.25mを測る。底面はほぼフラットな基盤を呈し、黒茶色砂質土を基調とした埋土であった。発生土器片、土師器片が出土。

ISK26 (Fig. 35)

先述したISK25の南側で検出したものの平面プランは不整円形状を呈する。長さ2.0m、幅1.6m分を検出し、底部中央にはビット状の跡みが認められる。深さは0.26~0.42mを測り、埋土は黒茶色砂質土を呈する。発見器片、土師器片が出土した。

ISK27 (Fig. 35)

当遺構はISK28の東側に隣接し、ISD29を切る。平面プランは半梢円形状を呈し、幅1.3m、深さ0.21mを測る。内部の西側にはテラスを呈し、埋土は黒茶色砂質土を基調とする。土師器（小皿）が出土。

ISK28 (Fig. 35)

当遺構はISK27の西側に隣接する。深さは0.02mと極めて残存状態が悪く、上層部の跡がわずかに包含層土が残存した可能性が想定される。埋土は黒茶色砂質土を基調としており、遺物は土師器（小皿）が出土した。

3) 出土遺物

A 調査区

溝

ISD30 (Fig. 36, Pla. 33・34)

土師器

小皿（1～5）は淡茶白色を呈し、口径8.0cm、底径6.0cm、器高2.0cmを測取する。外底は糸切りで内外面の調整はヨコナデを施す。2は淡茶白色を呈し、底径6.0cmを復原する。摩耗のため調整不明であるが外底には糸切り跡が僅かに残る。3は淡赤褐色を呈し、底径6.0cmを復原する。摩耗のため調整難しきが内面にはヨコナデ、外底には糸切り痕跡が確認される。4は底径6.0cmを復原する。淡茶色を呈し、外下面はヨコナデ、その他の摩耗のため調整不明。5は淡茶色を呈し、口径10.0cm、底径7.2cm、器高1.8cmを復原する。外底糸切り、内側内面はヨコナデ。

皿（6） 口径11.0cm、底径10.0cm、器高1.3cmを復原する。外底は糸切り、「内」面はヨコナデで見込みの一端でナデ調整が施される。埋土は黒色粒子、赤色粒子、青母貝を含み、焼成はほぼ良好である。

环（7～9） 7は底部細片で底径8.0cmを復原する。「内」面はヨコナデ、外底は糸切りを施し、船上に黒色粒子、赤色粒子、黒母貝を含む。色調は淡茶色を呈し、焼成は良好である。8は口径13.2cm、底径9.0cm、器高2.8cmを復原する。底部から全体にかけては内湾汽味に立ち上がり口縁部はやや外反する。外底は糸切りで内面はヨコナデ、外底は摩耗のため調整不明である。埋土に黒色粒子、赤色粒子、青母貝を含み、焼成は良好である。9は底部細片で底径9.0cmを復原する。著しく摩耗しており、内面一部にヨコナデ痕跡が僅かに認められたのみである。

白磁

皿（10） 外壁所々に窓孔相当し、底径6.0cmを復原する。暗灰白色を呈した物を全面施釉し、本体は暗灰白色を呈する。

同安窯系青磁

小碗（11） 底部細片で高径5.0cmを復原する。素地は淡乳茶色を呈し、船上に黒色粒子を少量含む。高

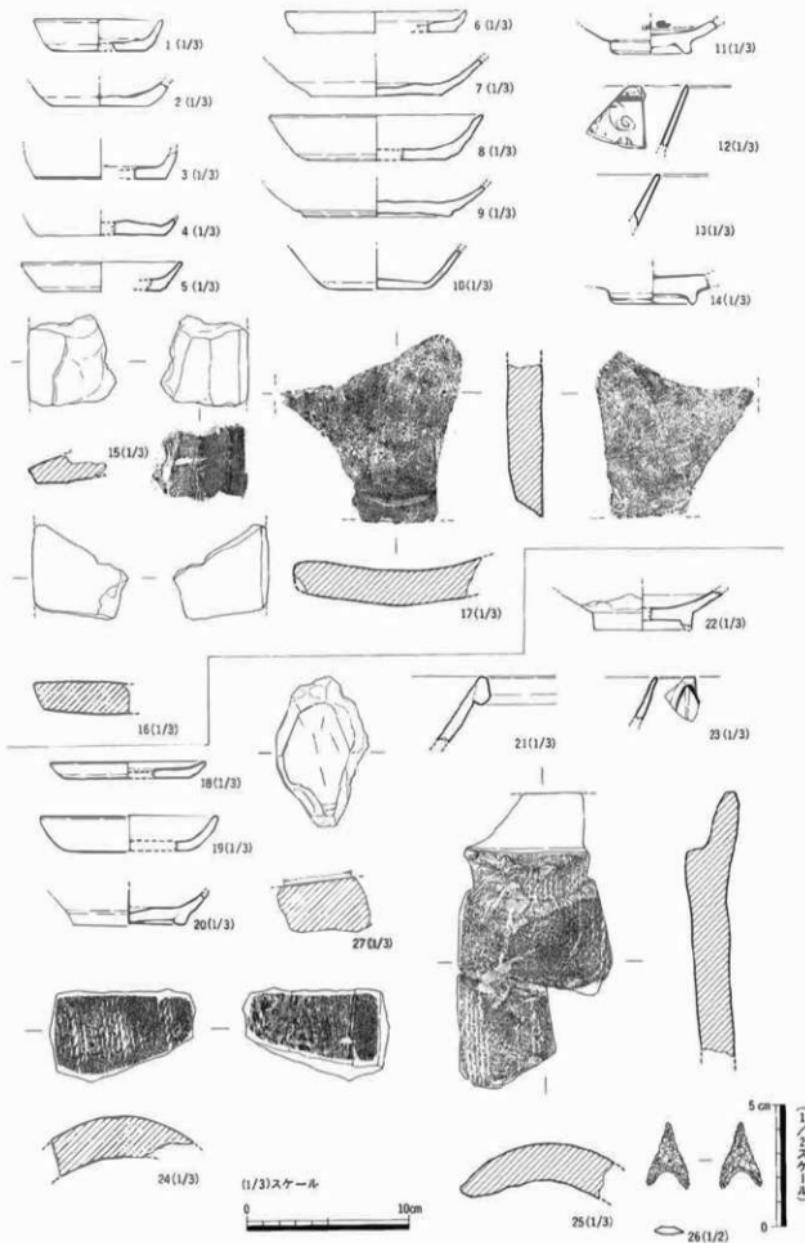


Fig. 36 A 調査区出土遺物実測図 (1/3・1/2)

右側と左側の面は露頭で内面には淡青灰色の透明帶を有す。外盛中央部は削られ、見込みには貫入が認められる。太宰府 1 頸と思われる。

龍泉系背疊

高台 (12 - 14) 12は外層風化、内面に花文を施す口輪部細片で太宰府 1 - 2 頸に相当する。13は細片で明白色の裏地に暗茶緑色釉を施す。全体に貫入を認める。14は高台径 5.0cm を復原する。盤付及び高台内は露頭で淡灰褐色の裏地に淡青緑色釉を厚くかける。

瓦

丸瓦 (15) 斜面の細片である。側面はヘラ切り後ヨコナデ、側部の凸面及び凹面側縁はザ、側縁凹面は布目表面が認められる。胎土は微砂粒、白色粒子、金雲母を含み、焼成は良好である。色調は明灰黑色を呈する。

平瓦 (16 - 17) ともに側面細片である。16は摩耗のため調整不明で色調は淡蒼白色を呈する。胎土は 1 - 2 mm 程度の砂粒、角閃石、金雲母を含み焼成は良好。17は側面ヨコナデ、側面凹凸面はナデの調整が認められる。淡茶褐色を呈し、側面の一部に煤が付着する。胎土は微砂粒、金雲母を含み、微砂粒の角閃石が表面に付着する。

I5D32 (Fig. 36, Pla. 34)

土師器

小皿 (18 - 19) 18は浅い小皿で口徑 9.6cm、底径 8.0cm、高さ 1.0cm を復原する。摩耗のため調整不明であるが、外底には僅かに削り痕跡が残る。淡乳褐色を呈し、黒色・赤色粒子を含む。焼成は良好。19は口徑 10.8cm、底径 7.4cm、器高 2.2cm を復原する。淡灰茶色を呈し、体部から口縁部にかけては緻やかに内溝し立ち上がる。胎土は黒色粒子、金雲母、角閃石を少量含み、焼成は良好である。

火鉢 (20) 胎部は高台が付着する。高台径 7.0cm を復原し、外底はナデ、置付けから体部にかけてはヨコナデ、体部内面はヨコナデ、見込みはナデの調整を施す。口縁部細片で端部は玉縁状を呈する。外底はヨコナデ、内面は摩耗のため調整不明。微砂粒、金雲母を含み、焼成は良好である。外面に煤が付着する。

白磁

碗 (22) 淡部細片で裏地は淡白灰色を呈し、淡白灰色の釉を高台部以外に施用する。高台部は露頭である。

龍泉系青磁

碗 (23) 口縁部細片で太宰府 11 - 12 頸に相当する。外側に露頭を施し、明白な青色の裏地に淡灰緑色の釉を内外面に施用する。

瓦

丸瓦 (24 - 25) 24は側面細片で凸面には粗目印き紋跡が認められる。凹面側縁はヘラ切り、凹面は布目表面が残る。淡白灰色を呈し、胎土は微砂粒、黒色粒子、金雲母を多く含む。表面には角閃石が付着し、焼成は良好である。25は側面から玉縁部にかけての破片で側面内部に粗目印き紋跡が残る。調整は表面が著しく摩耗しているため明らかではないが、側面凹面はナデ、凹面玉縁部はヨコナデと思われる。淡乳茶色を呈し、微砂粒、金雲母、黒色粒子を少量含む。

石器

石斧 (26) 完形の石器で石材はサヌカイト製である。抉りの深い二等辺三角形を呈し、縁部に細かいリタッチを加えて刃部を造り出す。表面中央には斜め方向からの割離によるボンティア面が残る。長さ 2.75 cm、幅大厚 0.3cm、重さ 0.70kg を計測する。

砾石 (27) 天然産砂岩を石材とする。重さは 176.3g を量、表面を砥面としている。

日輪塗区
横

I5D01 (Fig. 37, Pla. 34)

須恵器

鉢 (28) 東漁系口缺て色調は淡青灰色を呈する。

- 47 -

ISD04 (Fig. 37, Pla. 34・35)

土師器

小皿 (29～32) 口径7.8～9.4cm、底径6.8～8.0cm、器高1.2～1.5cmを測る。何れも外底糸切りで内外面はヨコナデ調整を施す。

环 (33) 口径13.5cm、底径9.1cm、器高7cmを測る。淡茶色を呈し、体部外面はヨコナデ、底部内面はヨコナデ後ナデ、外底は糸切りで板状压痕が認められる。

須恵器

鉢 (34) 燈灰青色で淡茶色を呈する片口鉢である。脚軒のため調整不明。
环 (35) 常滑產燒と思われ、肩部細片で格子押印文が施される。外面は断赤茶色、芯は明灰茶色を呈する。

白磁

皿 (36) 高台164.0cmを復原する。淡灰褐色の基地に淡灰白色帶を内面及び体部外面に施繪する。内面見込みは蛇ノ目状に筋を括き取る。太平府III-a類。

龍泉窯系青磁

ISD23 (Fig. 37, Pla. 35)

土師器

小皿 (38) 淡茶褐色を呈し、口径6.8cm、底径6.6cm、器高1.3cmを復原する。外底は糸切りで内外面はヨコナデを施す。

环 (39) 淡橙褐色を呈し、内外面はヨコナデを施す。外底は糸切りで板状压痕を認めめる。

須恵器

鉢 (40) 東燒系の片口鉢である。淡灰色を呈し、内外面はヨコナデを施す。

瓦器

板 (41) 高台167.1cmを復原する。内側は白灰色、外面は断灰色を呈し、調整は著しく摩耗しているため不明である。

青磁

碗 (42) 口縁部細片で淡灰褐色の基地に暗緑色の透明釉をかけるが端部は剥がれい。

土坑

ISK02 (Fig. 37, Pla. 35)

土師器

小皿 (43) 淡灰茶色を呈し、口径10.0cm、底径8.7cm、器高1.5cmを復原する。外底は糸切り、外面にはヨコナデ調整を施す。

青磁

碗 (44) 口縁部細片で外面上に輪邊押文が施され、淡灰褐色の素地に暗緑色釉をやや厚めにかける。太字脚11-h類。

流路

ISX12 (Fig. 37, Pla. 35)

瓦器

板 (45) 高台167.0cmを復原する。暗灰褐色を呈し、調整については摩耗したため不明。

白磁

皿 (46) 口縁部細片で淡灰褐色の素地に淡緑白色の透明釉をかける。全体に質入を認め、外面見込みに花文を描く。太平府III-1b類。

青磁

碗 (47) 淡白色の素地に青釉色の透明釉を施し、内面に花文を描く。太平府I-3a。

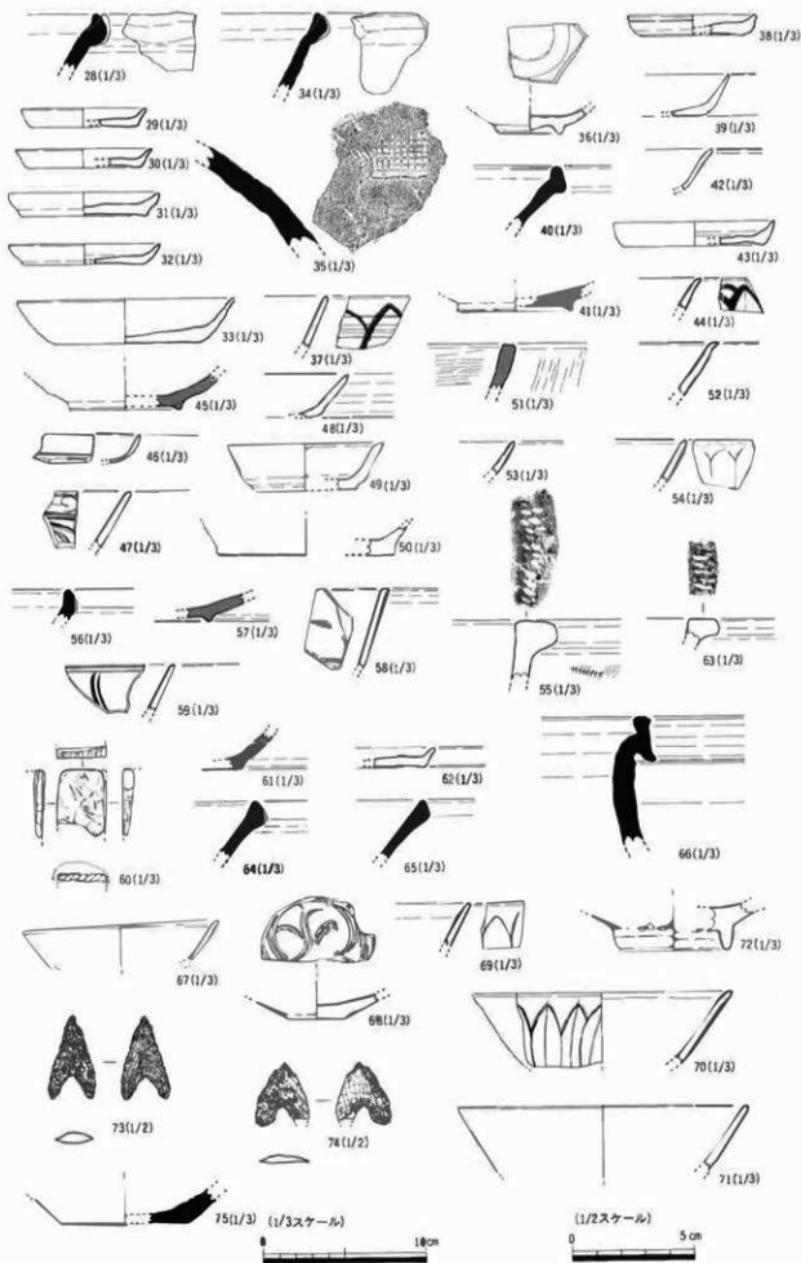


Fig. 37 B・C調査区、表土、包含層出土遺物実測図 (1/3・1/2)

1SX14 (Fig. 37、Pla. 35・36)

土師器

壺 (48) 体部細片で表面摩耗のため調整不明。胎土は墨色粒子、赤色粒子を含み焼成はやや不良である。色調は淡橙白色を呈する。

小壺 (49) 淡白茶色を呈し、口径9.6cm、底径6.4cm、器高2.9cmを復原する。外底は糸切り、内外面はヨコナデである。

壺×椀 (50) 底部細片で底径11.0cmを復原する。体部下位にヨコナデ調整痕が僅かに残り、他は調整は摩耗のため不明。淡茶白色を呈し、微砂粒、黒色粒子、角閃石を少量含む。

瓦質土器

火鉢 (51) 淡灰茶色を呈し、口縁端部はヨコナデ、内外面は刷毛目を施す。

白磁

碗 (52) 淡灰白色の素地に暗灰緑色釉を施す。太宰府Vまたは細類。

龍泉窯系青磁

碗 (53・54) ともに口縁部細片で53は無文であるが、54は外面に鈴連弁文が施される。54は太宰府II-b類。

1SX15 (Fig. 37、Pla. 36)

土師器

土鍋 (55) 口縁端部形は台形状を呈し、端部に柵目文が施される。

須恵器

鉢 (56) 口縁部細片で玉縁状を呈する。東播系か。

瓦器

椀 (57) 底部細片で調整は摩耗のため不明。色調は淡白灰色を呈する。

白磁

碗 (58) 淡灰白色の素地に暗灰緑色釉を施す。太宰府Vまたは細類。

龍泉窯系青磁

碗 (59) 口縁部細片で淡灰白色の素地に淡青緑色の透明釉を施す。

石器

砥石 (60) 泥岩製の砥石で表面及び側面の3面を砥面として使用し、細かな線刻が残る。

ピット

1SP20 (Fig. 37、Pla. 36)

瓦器

椀 (61) 底部細片で摩耗のため調整不明。色調は淡茶灰色を呈する。

C調査区

土坑

1SK27 (Fig. 37、Pla. 36)

土師器

小皿 (62) 底部細片で外底は糸切り、内外面はヨコナデか。

表土 (Fig. 37、Pla. 36・37)

土師器

土鍋 (63) 口縁部上端面に柵目文を施し、断面形は台形状を呈する。

須恵器

鉢 (64・65) ともに東播系と思われ、口縁端部が玉縁状を呈する。64は淡白灰色を呈し、胎土に微砂粒、黒色粒子、白色粒子を含む。焼成は良好である。65は口縁上面で復原していないが口径は26.0cm前後と思われる。淡茶灰色を呈し、胎土は微砂粒、黒色粒子、白色粒子を少量含む。焼成良好。

陶器 常滑産と思われ、口縁部形状は「N」字形を呈する。色調は明黒灰色を呈し、内外面はヨコナデを施す。

白磁

碗 (67) 口縁部脚片で口径12.0mmを復原する。口縁端部は口だけを呈し、明白灰白色の素地に明青白色釉を施す。太率所X型。

龍泉窯系青磁

皿 (38) 底径3.4cmを復原する。内面見込みには文が施される。明白灰の素地に暗茶緑色釉の邊明顯を外底以外に施す。太率所「二點」。

碗 (69 - 71) 外面に透舟文を施し、明白灰灰色の素地に淡灰緑色の釉を内外面に施す。70は外面に漏泄文を施し、明白白色の素地に暗緑色釉。唇く施釉する。71は内外面無文で淡灰色の素地に暗茶緑色釉を施す。69はII-a類、70はII-b類、71はI-類に相当する。

鉢 (72) 高台径4.4cmを復原し、素地は明白灰灰色を呈する。高台内は露胎で、脇背緑色釉を厚く施す。脇

石器

石蹴 (73・74) 73はやや厚めの素材を利用した尖形の石蹴で石材は黒曜石製である。抉りの深い三等辺三角形を呈し、表面に細かいリッヂを削えて転脚面を削除する。長さ3.4cm、最大厚0.5cm、重さ1.7gを計測する。74はやや薄めの剥片を利用して黒曜石製石蹴で右側脚を優かに欠損する。表面の右半部はボシティウム。裏面の左半部はネガティヴ面を大きく残す。重さは1.3gを量る。

包倉層 (Fig. 37, Pla. 37)

須恵器

鉢 (75) 東播系と思われ、底径は48.0mmを復原する。明白灰色を呈し、胎土に微砂粒、黒色・白色粒子、金雲母を含む。焼成は良好である。

4) 小結

調査

当調査区は北部と南部に存在する丘陵に挟まれた谷間にあたり、西流する日川の両岸に接続した標高5～6mの低地にある。雨期になると東側及び南側から排水が集中する場所でもあり、調査中ににおいても頻度なく現場内が水没する環境にあつた。当地は以前からこういった悪条件の環境にあつたためか、調査区内から検出した多くの熱(1SD01・03～06・08～10・23・29・30)は、何れもも前方の丘陵部から北の方の河川へと流れ込む構北溝(?)へ、危険した調査結果を踏まえると潜湖は雨水などの排水橋として機能していた可能性が想定されるものである。今回確認した沸の残存状況からは、人工的に掘削されたと考えられる1SD03・04・29・30と自然発露と想定される1SD01・05・06・08～10・13・23が存在しているものと思われ、これらは区域隔離としての橈持も持合せられていたことも想定される。各溝の年代については流れ込みによる出土遺物が殆どであったので特定に至ることはできないが、出土遺物から13c後半以降の埋設であつたことがわかる。なお、年代観の基盤としては包倉層に中世に跨る遺物が認められることから、検出された遺物は全てこれより遡るものと捉えることができる。

出土遺物

当地より雨方約300m地点には上妻川広川庄の鎮守社である神宮寺とその神宮社とその熊野神社とその熊野神社とその神宮寺があるが、開闢を向かえるのは広川莊が熊野社領となつた保延四年(1138)以前で、あ! 岩東寺境内には筑後地方で歴史的記念館「廣水元年(1232)」を有する石造五重塔(県指定建造物)が存在する。当調査区からは当該期に比定される輸入陶器類や瓦が僅かながら認められいることがある。今後これらとの関連が期待される。

注)

今般使用した陶器部分は以下の文獻を指すとして表記した。

「大宰府志第 XV - 植樹令分編 - 」[大宰府市文化財第19号] 大宰府市歴史委員会 (2000)

【長さの単位はcm. ○は幅面を示す】

Fig. №	遺構番号	遺構番号	R番号	名 称	形 性	口 径	底径(高さ)	容 量	備 考	
36 - 1	ISD29	8	7	土器	小豆	○	8.0	○	6.0 外底: 無切り	
36 - 2	"	7	6	"	"	○	8.0	○	"	
36 - 3	"	3	7	"	"	○	8.0	○	"	
36 - 4	"	2	6	"	"	○	8.0	○	"	
36 - 5	"	14	6	"	"	○	16.0	○	7.2 外底: 無切り	
36 - 6	"	1	9	"	"	○	11.0	○	10.0 外底: 無切り	
36 - 7	"	4	8	"	"	○	8.0	○	"	
36 - 8	"	6	7	"	"	○	13.2	○	9.0 外底: 無切り	
36 - 9	"	5	9	"	"	○	8.0	○	"	
36 - 10	"	9	白磁	"	"	○	6.0	○	"	
36 - 11	"	10	同安窯系青磁	"	"	○	5.8	○	太平府 I-b類	
36 - 12	"	17	龍泉窯系青磁	"	"	○	5.8	○	太平府 I-b類	
36 - 13	"	15	"	"	"	○	5.8	○	太平府 I-b類	
36 - 14	"	16	青磁	"	"	○	5.8	○	太平府 I-b類	
36 - 15	"	13	瓦	瓦	"	○	5.8	○	太平府 I-b類	
36 - 16	"	12	"	瓦	"	○	5.8	○	太平府 I-b類	
36 - 17	"	11	"	瓦	"	○	5.8	○	太平府 I-b類	
36 - 18	ISD32	1	土器	小豆	○	9.6	○	8.0	1.0 外底: 無切り	
36 - 19	"	2	"	"	○	10.8	○	7.4	2.2 外底: 無切り	
36 - 20	"	3	"	环×陶	○	10.8	○	7.0	"	
36 - 21	"	4	"	土器	"	○	10.8	○	"	
36 - 22	"	5	白磁	"	"	○	10.8	○	"	
36 - 23	"	6	朝尾路水滑粗	陶	"	○	10.8	○	太平府 I-b類	
36 - 24	"	7	瓦	瓦	"	○	10.8	○	"	
36 - 25	"	8	"	"	"	○	10.8	○	"	
36 - 26	"	10	石器	石器	"	○	10.8	○	"	
36 - 27	"	9	"	帆立	"	○	10.8	○	"	
37 - 28	ISD61	1	白磁器	小豆	○	7.8	○	6.8	1.2 外底: 無切り	
37 - 29	ISD64	3	土器	小豆	○	8.4	○	7.0	1.2 外底: 無切り	
37 - 30	"	2	"	"	○	9.4	○	8.0	1.5 外底: 無切り	
37 - 31	"	4	"	"	○	9.4	○	7.6	1.3 外底: 無切り	
37 - 32	"	1	"	"	○	9.4	○	7.6	1.3 外底: 無切り	
37 - 33	"	5	"	环	○	13.5	○	9.1	2.7 外底: 無切り	
37 - 34	"	6	项垂器	环	○	13.5	○	9.1	2.7 外底: 無切り	
37 - 35	"	7	陶器	环	○	13.5	○	9.1	2.7 外底: 無切り	
37 - 36	"	8	白磁	环	○	13.5	○	9.1	2.7 外底: 無切り	
37 - 37	"	9	龍泉窯系青磁	陶	○	13.5	○	9.1	2.7 外底: 無切り	
37 - 38	ISD23	1	土器	小豆	○	8.0	○	6.6	1.3 外底: 無切り	
37 - 39	"	2	"	"	○	8.0	○	6.6	1.3 外底: 無切り	
37 - 40	"	5	项垂器	环	○	8.0	○	7.1	1.3 外底: 無切り	
37 - 41	"	3	瓦	环	○	8.0	○	7.1	1.3 外底: 無切り	
37 - 42	"	4	青磁	环	○	8.0	○	7.1	1.3 外底: 無切り	
37 - 43	ISK02	1	土器	小豆	○	10.0	○	8.7	1.2 外底: 無切り	
37 - 44	"	2	龍泉窯系青磁	陶	○	10.0	○	8.7	1.2 太平府 I-b類	
37 - 45	ISX12	2	瓦器	陶	○	10.0	○	7.0	1.2 太平府 I-b類	
37 - 46	"	1	白磁	陶	○	10.0	○	7.0	1.2 太平府 I-b類	
37 - 47	"	2	龍泉窯系青磁	陶	○	10.0	○	7.0	1.2 太平府 I-b類	
37 - 48	ISX14	1	土器	小豆	○	8.0	○	6.4	2.9 外底: 無切り	
37 - 49	"	3	"	小豆	○	9.6	○	6.4	2.9 外底: 無切り	
37 - 50	"	2	"	环	○	11.0	○	7.1	2.9 外底: 無切り	
37 - 51	"	4	瓦質土器	环	○	11.0	○	7.1	2.9 外底: 無切り	
37 - 52	"	5	白磁	环	○	11.0	○	7.1	2.9 外底: 無切り	
37 - 53	"	6	龍泉窯系青磁	环	○	11.0	○	7.1	2.9 外底: 無切り	
37 - 54	"	7	"	"	○	11.0	○	7.1	2.9 外底: 無切り	
37 - 55	ISX15	1	土器	土器	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 56	"	3	瓦質土器	土器	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 57	"	2	瓦	土器	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 58	"	4	白磁	土器	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 59	"	5	龍泉窯系青磁	土器	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 60	"	6	石器	土器	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 61	ISP20	1	瓦	土器	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 62	ISK27	1	土器	小豆	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 63	表土	3	"	土器	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 64	"	2	瓦質土器	土器	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 65	"	1	"	"	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 66	"	6	陶器	"	"	○	11.0	○	7.1 太平府 I-b類	
37 - 67	"	7	白磁	"	"	○	12.0	○	8.0 外底: 無切り	
37 - 68	"	11	龍泉窯系青磁	"	"	○	12.0	○	8.0 外底: 無切り	
37 - 69	"	4	"	环	○	12.0	○	8.0	東羅系	
37 - 70	"	10	"	环	○	12.0	○	8.0	東羅系	
37 - 71	"	8	"	环	○	12.0	○	8.0	東羅系	
37 - 72	"	9	"	环	○	12.0	○	8.0	東羅系	
37 - 73	"	5	石器	石器	"	○	12.0	○	8.0	東羅系
37 - 74	"	12	"	环	○	12.0	○	8.0	東羅系	
37 - 75	钛金属	1	消音器	环	○	12.0	○	8.0	東羅系	

Tab. 10 出土遺物観察

5. 島嶺田遺跡（1次調査）

- 1)はじめに
漁業島崎用津野は箕面市大学橋敷95に所在する。地川左岸、幾ヶ先端部の谷地形の出口にあつた標高6mほどの平地である。明治14年以前は「島崎」といふ字であった。
試験調査では、大型の漁具網掛け確認された。調査対象面積は315m²である。調査は平成16年7月7日より始められ、同年8月26日にこれを終了した。

2) 接出端子

解り性を約0.1mほど、北側はさらに0.2mほど振り下げる床白色の遮音面となる。道幅は土塁4、解体構4、歩行1、届り状遺構1、廻廊を併記した。

三

1SK01 (Fig. 40, Pla. 42)

調査区北端で確認された不定形土塚で、北側へ伸びる。西側に1ISK02、南側に1SX02-04が位置する。土塚は複数の軸線、北側に捲乱が存在することが判明しており、掘削時にはここから大量の水が湧き出している。この事から野井戸は判りにくいかが、遺構表面はこの擾乱に向かい、埋蔵状況は傾斜的に傾斜している。



Fig. 38 蔵敷島崎田遺跡 位置図 ($S = 1/2, 500$)

藏敷島崎田遺跡 (1/250)

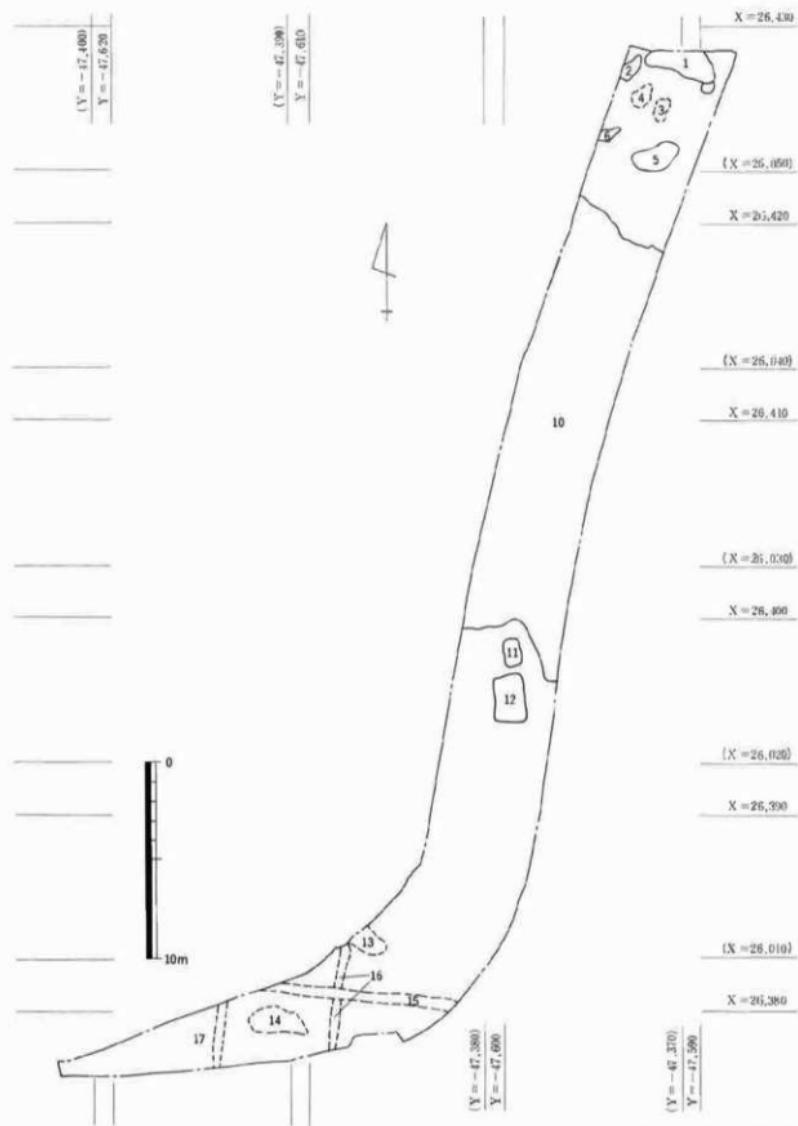


Fig. 39 藏敷島崎田遺跡 遺構配置図 (S = 1/250)

実測點付逐段地図。| : 既存手測地界

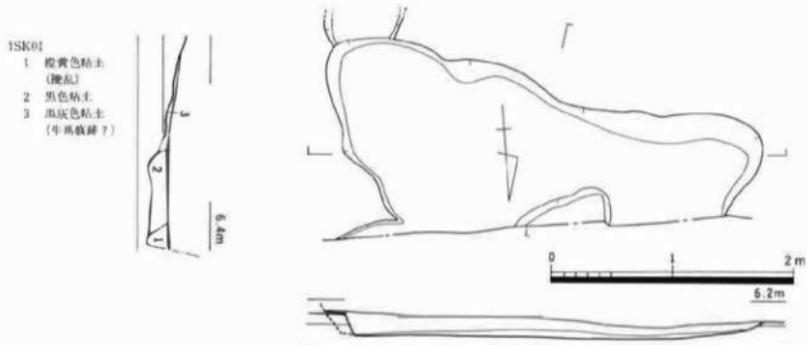


Fig. 40 ISK01 (S=1/40)

ISK02 (Fig. 41, Pla. 43)

調査区北側で確認された梢円型土壠で、東側に1SK01、南側に1SD06が位置し、一部は調査区西側に延びる。長軸約1.6m、短軸約0.7m、深さ約0.1m。主軸の傾きはN-22°-Eを測る。埋土は暗灰色粘質土による單一埋土であり、遺構の輪郭は牛馬痕跡により乱れている。

この遺構からは須恵器坏、須恵器片、土師皿、土鍋、土師器片、砥石を出土したが、いずれも固化しうる物ではなかった。

ISK05 (Fig. 42, Pla. 46~48-1)

調査区北側で確認された梢円形の土壠で、北側に1SX02・03、西側に1SD06、南側に1SX10が位置する。長軸約2.5m、短軸約1.0m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN-72°-Eを測る。平面形は複雑だが、土層から1・2層による自然埋没と考えられる。

この遺構からは土鍋、土師皿、土師器片、白磁碗、白磁片、青磁片、骨片が出土している。(Fig. 45)

ISK11 (Fig. 42, Pla. 44~45)

調査区中央部で確認された角丸長方形の土壠で、北側に1SX10、南側に1SE12が位置する。長軸約1.2m、短軸約0.8m、深さ約0.2m。主軸の傾きはN-10°-Eを測る。埋土は黒灰色粘質土を基本としている。

この遺構からは土師器坏、土師皿、土師器片、石材を出土している。(Fig. 45)

溝状遺構**1SD06 (Fig. 43, Pla. 48-2)**

調査区北側をN-70°-Eに走る溝で、約1.3m分を確認した。深さ約0.2m。大部分は西側へ延びると考えられる。北側に1SK02、東側に1SK05、南側に1SX10が位置する。埋土は暗茶灰色粘質土の單一埋土である。

この遺構からは土師器片、瓦器片、石材を出土したが、固化

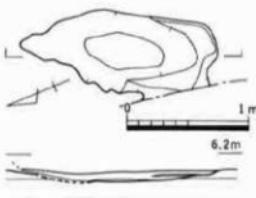
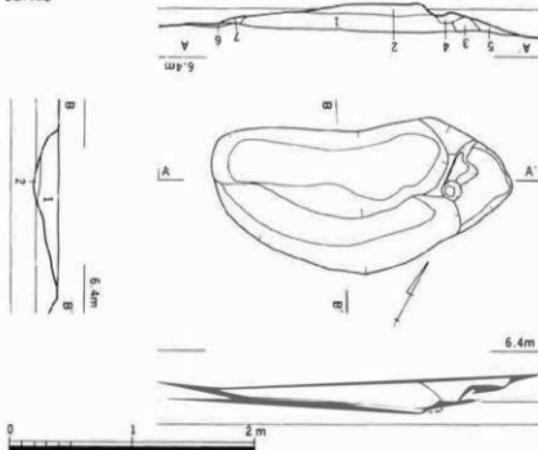


Fig. 41 ISK02 (S=1/40)

1SK05

- 1 細所茶色土
- 2 黒茶色粘質土
- 3 褐色土
- 4 茶色土・灰色砂土混合層
- 5 褐茶色土
- 6 淡灰茶色土(牛馬糞堆?)
- 7 1灰色粘質土

1SK05



1SK11

- 1 灰色粘土
- 2 黑茶色粘質土

1SK11

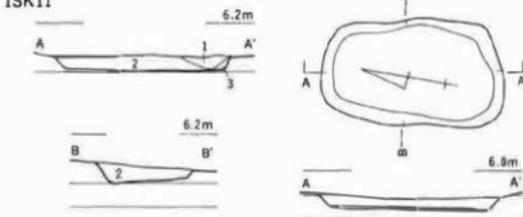


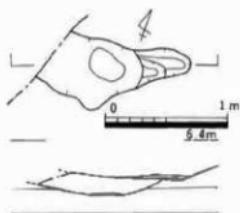
Fig. 42 1SK05・11 (S=1/40)

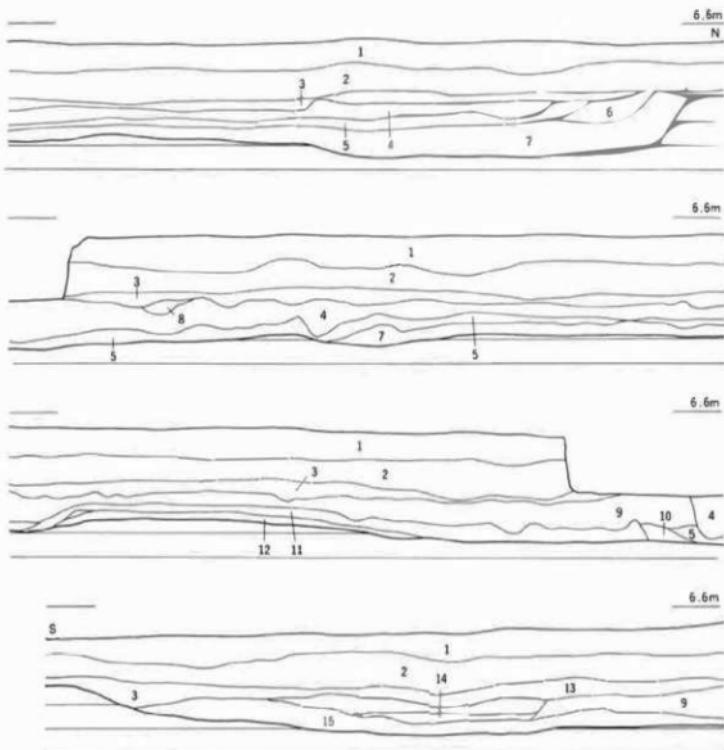
しうる物ではなかった。

ISD15 (Fig. 39)

調査区南側で約9.5m分を検出した。主軸の傾きはN-84°-Wを測る。遺土は地山の灰色粘質土と表土の褐色土から成る混合土である。この遺構からは土管を出土した。この土管は地元の方によると数箇所から発し西へ延びているとのことであった。そのため現代の構造と判断した。

ここからは弥生土器片、土器器片、瓦器片、青磁片、プリント柄磁器片、陶器片、黒曜石片、土管などが出土した。プリント柄磁器片と土管以外は混入品と考えている。遺物はいずれも陶化しいうる物ではなかった。

Fig. 43 ISD06
(S=1/40)



ISX10

1 噴黃色土 (耕作土、中性遺物含む)	6 噴黃灰色粘土	11 噴灰色粘土
2 灰色土 (耕作土、中性遺物含む)	7 黒色粘土	12 青灰色粘土 (地山)
3 噴灰色粘土 (耕作土)	8 噴灰黑色粘土	13 黒色粘土
4 灰色粘土 (植物遺体含む)	9 灰色粘土	14 オリーブ色粘土
5 赤褐色粘土	10 噴灰色シルト	15 青灰色シルト (粒子粗、植物遺体含む)

Fig. 44 ISX10 土層断面 ($S = 1/40$)**1SD16 (Fig. 39)**

調査区南側で約5.5m分を検出した。主軸の傾きはN—7°—Eを測り、1SD15に切られている。埋土は地山の灰色粘土と表土の褐色土から成る单一の混合土で、1SD15より色調が暗い程度であった。調査の結果、竹製の暗渠を確認した。竹材は腐敗が進み、底部を残すのみであった。このためこの遺構は近現代の物と判断した。

この遺構からの出土遺物はなかった。

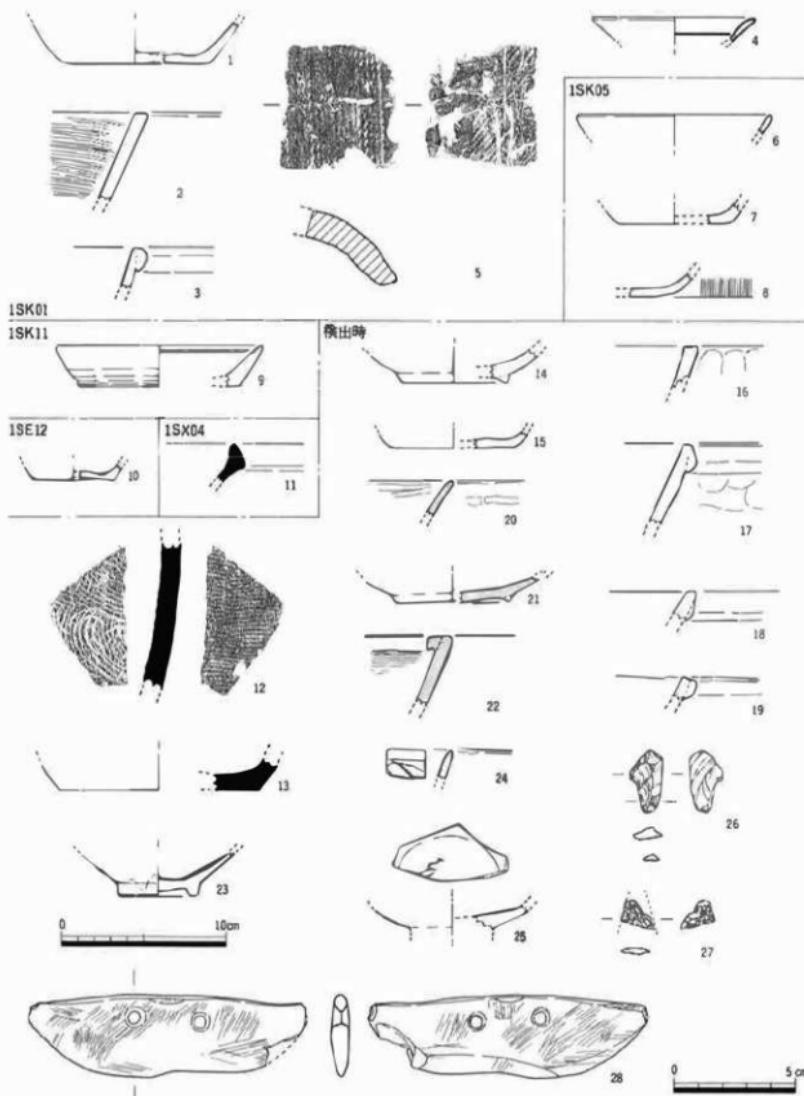


Fig. 45 出土遺物 ($S = 1/2 \cdot 1/3$)

1SD17 (Fig. 39)

調査区南側で約3.4m分を検出した。主軸の傾きはN—5°—Eを測り、1SD16とはほぼ平行となる。埋土の状況も同じであったため近現代の遺構と判断し、精査は行っていない。

上記の理由から出土遺物は不明である。

井戸**1SE12 (Fig. 39)**

調査区南側で検出された、角丸長方形の遺構である。北側に1SX10・1SK11が位置する。長軸約2.4m、短軸約1.5m、主軸の傾きはN—5°—Wを測る。1mほど掘り下げたところで湧水が多くなり精査できないと判断、作業を中断した。埋土は暗灰色粘質土の單一であり、埋没状況を推測できない。現時点ではこの遺構を「野井戸」と判断している。

この遺構からは須恵器片、土師皿、土師器壺、土師器片、黒曜石片が出土地している。

溜り状遺構**1SX10 (Fig. 44, Pla. 39-2~41)**

調査区北側～中程にかけ、約22.8m分を確認した。地元の方の話によると、この辺りには池もしくは沼があったとの事であり、これに相当する可能性もある。土層観察の結果、北側、中央部、南側の3ヶ所に落ちが確認できる。北側および中央部は自然堆積の後一度西側と同時に掘り直しがなされている。南側についても同様の堆積状況を示す。遺構の落ち床面はいずれも湧水が確認できたが、南側は東から西へと水が流れ出す状況であった。

この遺構からは弥生土器片、黒曜石片を数点確認したのみで、いずれも陶化しうる物ではなかった。

足跡痕跡 (Pla. 39-1)

この調査区では遺構面北側と南側で多くの足跡痕跡を確認した。埋土はいずれも黒色粘質土～褐色粘質土である。内北側の集中部分を1SX02・03とし土層観察を試みたが、いずれも浅く、すぐに地山となつた。

南側では1SD15・16周辺で多くの足跡を確認、1段下がったところで茶褐色の溜り状の部分を1SX13・14として半裁した。結果、足跡が集中しているのみと判断した。これらの遺構については1SD15などとの切り合いなどは不明確ではあるが、埋土はいずれも黒色粘質土～褐色粘質土であり、同時期のものと判断した。

これら足跡群については平面および立面は残していない。遺物は土師器を中心としたものを出土したが、陶化しうるものではなかった。

3) 出土遺物 (Fig. 45, Pla. 49)**1SK01出土遺物 (Fig. 45, Pla. 49)**

1は土師器の壺の底部片である。底部廻転糸切り。

3は土鍋の口縁部小片である。玉縁状口縁を有し、外面には煤の付着が見られる。

2は土師器の鉢の口縁部小片である。内面はハケ目が残るが外面は磨滅が激しい。

4は青磁皿の口縁部破片である。淡青灰色の素地に明緑色の透明釉を施す。底部付近には貫入が発達している。

5は丸瓦の小片である。内面工具ナデ、外面は網目のちナデが施されている。

1SK05出土遺物 (Fig. 45)

6は土師器の皿の口縁部破片である。

7は土師器の皿の底部破片である。底部廻転糸切り。

8は土鍋もしくは土製の培養の底部小片である。

1SK11出土遺物 (Fig. 45)

9は土師器の壺の破片である。底部廻転糸切り。

1SE12出土遺物 (Fig. 45, Pla. 49)

10は土師器の皿の底部破片である。底部廻転糸切り。

1SX04出土遺物 (Fig. 45, Pla. 49)

11は須恵器の鉢の口縁部小片である。東播系。

検出面出土遺物 (Fig. 45, Pla. 49)

12は須恵器の壺の胴部小片である。外面平行タタキ、内面同心円文。

13は須恵器の壺の底部破片である。

14は土師器の壺の底部破片である底部貼付け高台。

15は土師器の皿の底部破片である。底部廻転糸切り。

16は土師器の鉢もしくは蒸口縁の土鍋の口縁部小片である。外面には煤が付着している。

17~19は土鍋の口縁部小片である。いずれも玉縁状の口縁を有する。

20は瓦器塊の口縁部小片である。

21は瓦器塊の底部破片である。磨滅が激しく、内面の芯黒が表面に現れている。

22は瓦器の鉢の口縁部小片である。

23は白磁の小碗の底部である。外面高台部分は無釉。内面は高台径より小さい円窓を有するが、沈線状の部分と1段削られたように見える部分がある。乳灰色の素地に青味を有する湯った釉を施している。

24は青磁の碗の口縁部小片である。内面には片切彫と沈線により文様が施されている。外面には細い貫入が発達し、口唇部の釉は磨滅の為か傷んでいる。淡灰色の素地に暗緑色の透明釉を施している。竜泉系か。

25は青磁の碗の底部小片である。内面見込に花文のスタンプを施している。淡茶灰色の素地に緑青色の透明釉を施している。釉は内外面ともに貫入が発達している。

26は石錐の軸部と思われる破片である。サヌカイト製。

27は石錐の胴部片である。黒曜石製。

28は石包丁である。一部を欠損するがほぼ完形で、刃部は内側する。使用痕はほとんど観察できない。輝緑凝灰岩製。

4) 小結

この調査区は歴数丘陵上に所在する弥生~古墳時代の歴数遺跡の周縁部にあたる。検出時に出土した弥生時代の石器はここからの流入品であろう。検出時に採集された中世遺物は表土にも同時期のものが見られたため、これに起因するものと考えられる。1SK11・1SE12は1SX10の上層埋土の下から検出されているが、遺構出土の遺物は統じて小片で数も少ないため限定しうるものではない。

歴数地区は、中世戦国時代、坂東寺熊野神社の三光坊なる人物が歴数に僧坊を設け、僧兵を抱え肥前龍造寺と対立し滅ぼされたという伝承がある。ここは三瀬莊西牟田郷に近く、中世期には三光坊に代表されるような勢力を脅威するような存在があつたと想像できる。

近世になると歴数周辺では溜め池の建設や水路の開削に伴い農地が開発されていく。調査区西側を流れる堀川は芦原堀（松尾溜池、1754）を水源とし、調査区を潤していた水路は大堤や河原池（築堤年代は不明だがともに藩政期）を水源としている。歴数周辺の開発が元禄期（1688~1703）より前に始められているが、この時期の水田開発に伴う土砂の移動の可能性は、1SX10の埋土状況や地元の方の、この付近に池もしくは沼があつたという話から低いと思われる。

本調査区においては人の生活痕跡は認められたが、それ以外は判断することができない。ただ水田化す

る際の土は藏敷丘陵上からもたらされたという推論のみの結果である。

【参考文献】

石川乙次郎	『筑後松原郷土史』	1988	筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会
佐々木健彦	『藏敷遺跡第一～三ノ木遺跡の調査』	1990	筑後市教育委員会
筑後市史編さん委員会	『筑後市史』	1998	筑後市

藏数島の田跡 (1 次調査)

Tab. 11 藏数島崎田遺跡 遺構一覧

番号	遺構番号	形状	延長(m)	幅員(m)	深さ(m)	土種	平面形状	断面形状	出土遺物	備考
40	1	ISSK01	—	—	—	—	U字型	直立型	漆器、土師器、瓦器、青磁、灰瓦、骨け	
41	2	ISSK02	1.4	0.7	0.1	II種	南北向	直立型	漆器、土師器、瓦器	
29	3	ISSK03	1.4	0.9	0.0	II種	N-S型	平窓型	II種	
29	4	ISSK04	1.3	0.8	0.0	II種	N-S型	平窓型	II種	
42	5	ISSK05	1.5	1.0	0.2	II種	N-S型	平窓型	漆器	生糞的跡
43	6	ISSK06	11.20	0.2	0.2	II種	N-S型	U字型	土師器、瓦器	
	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14	8	ISSK07	—	—	—	—	—	—	漆器、土器、灰瓦	
43	9	ISSK08	1.2	0.8	0.2	II種	馬頭脚形	直立型	土器	土器
29	10	ISSK09	2.4	1.5	—	II種	馬頭脚形	(矢張型)	漆器、土器、瓦器、灰瓦	軒出付
29	11	ISSK10	11.55	1.1	—	—	不規則	(矢張型)	土器、瓦器、白陶、灰陶	下高輪層
29	12	ISSK11	2.1	1.2	—	—	不規則	(矢張型)	土器、瓦器	下高輪層
29	13	ISSK12	19.55	0.5	—	II種	W型	(矢張型)	馬頭脚、土器、瓦器、灰瓦、鐵器、陶器	浅水層
30	14	ISSK13	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
30	15	ISSK14	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
30	16	ISSK15	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
30	17	ISSK16	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	18	ISSK17	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	19	ISSK18	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	20	ISSK19	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	21	ISSK20	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	22	ISSK21	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	23	ISSK22	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	24	ISSK23	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	25	ISSK24	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	26	ISSK25	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	27	ISSK26	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	28	ISSK27	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	29	ISSK28	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	30	ISSK29	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	31	ISSK30	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	32	ISSK31	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	33	ISSK32	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	34	ISSK33	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	35	ISSK34	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	36	ISSK35	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	37	ISSK36	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	38	ISSK37	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	39	ISSK38	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	40	ISSK39	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	41	ISSK40	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	42	ISSK41	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	43	ISSK42	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	44	ISSK43	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	45	ISSK44	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	46	ISSK45	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	47	ISSK46	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	48	ISSK47	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	49	ISSK48	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	50	ISSK49	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	51	ISSK50	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	52	ISSK51	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	53	ISSK52	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	54	ISSK53	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	55	ISSK54	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	56	ISSK55	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	57	ISSK56	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	58	ISSK57	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	59	ISSK58	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	60	ISSK59	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	61	ISSK60	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	62	ISSK61	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	63	ISSK62	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	64	ISSK63	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	65	ISSK64	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	66	ISSK65	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	67	ISSK66	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	68	ISSK67	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	69	ISSK68	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	70	ISSK69	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	71	ISSK70	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	72	ISSK71	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	73	ISSK72	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	74	ISSK73	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	75	ISSK74	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	76	ISSK75	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	77	ISSK76	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	78	ISSK77	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	79	ISSK78	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	80	ISSK79	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	81	ISSK80	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	82	ISSK81	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	83	ISSK82	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	84	ISSK83	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	85	ISSK84	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	86	ISSK85	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	87	ISSK86	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	88	ISSK87	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	89	ISSK88	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	90	ISSK89	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	91	ISSK90	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	92	ISSK91	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	93	ISSK92	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	94	ISSK93	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	95	ISSK94	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	96	ISSK95	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	97	ISSK96	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	98	ISSK97	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	99	ISSK98	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	100	ISSK99	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	101	ISSK100	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	102	ISSK101	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	103	ISSK102	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	104	ISSK103	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	105	ISSK104	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	106	ISSK105	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	107	ISSK106	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	108	ISSK107	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	109	ISSK108	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	110	ISSK109	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	111	ISSK110	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	112	ISSK111	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	113	ISSK112	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	114	ISSK113	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	115	ISSK114	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	116	ISSK115	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	117	ISSK116	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	118	ISSK117	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	119	ISSK118	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	120	ISSK119	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	121	ISSK120	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	122	ISSK121	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	123	ISSK122	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	124	ISSK123	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	125	ISSK124	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	126	ISSK125	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	127	ISSK126	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	128	ISSK127	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	129	ISSK128	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	130	ISSK129	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	131	ISSK130	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	132	ISSK131	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	133	ISSK132	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	134	ISSK133	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	135	ISSK134	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	136	ISSK135	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	137	ISSK136	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	138	ISSK137	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	139	ISSK138	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	140	ISSK139	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	141	ISSK140	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	142	ISSK141	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	143	ISSK142	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	144	ISSK143	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	145	ISSK144	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	146	ISSK145	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	147	ISSK146	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	148	ISSK147	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	149	ISSK148	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	150	ISSK149	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	151	ISSK150	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	152	ISSK151	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	153	ISSK152	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	154	ISSK153	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	155	ISSK154	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	156	ISSK155	—	—	—	—	—	—	—	浅水層
	157	ISSK156								

第4章 結語

今回の調査は、北と南の地点でその様相に違いを見いだせる。

北側2遺跡（熊野水町遺跡、謫数島崎田遺跡）においては中世にさかのばれそうな遺構は無く、近代の所産と思われる遺構が中心である。これは本報告でも述べているように、灌漑施設の充実に伴う謫数集落（元謫数）の移動と共に伴う開発に由来するものと考えられる。

一方南側の3遺跡（熊野松ノ下遺跡、熊野五反田遺跡、熊野宮ノ後遺跡）からは中世遺物が多く出土し、南側に位置する坂東寺熊野神社（単に「熊野神社と呼ばれる」とその神宮寺・坂東寺との関連が想定される。坂東寺は伝教大師・最澄による創建伝承を有する寺院で、明治以前は熊野集落は坂東寺村とも称している。また熊野神社初期の文書においても「坂東寺村」という記述が見られるため、熊野神社よりは創建は古いと考えられる。一方の熊野神社は広川莊が熊野社領となつた保延4年（1138）以降に勅請されたもので、戦国期に武士の横領により広川莊が崩壊するまでその中心として勢力を誇っている。しかしながら、倉目川流域において坂東寺熊野神社に関する施設の伝承はなく、これら3遺跡の成果は広い意味での文化財の空白地帯であった該当地においての重要な成果であったといえよう。ただ、調査区が狭小なため、その性格や細かな時期判定までは出来ないのが難点となっている。

は場整備事業は今後倉目川上流と謫数丘陵北部（境川流域）に沿って進められる予定となっており、これから先に埋蔵文化財が新たに確認される可能性がある。今回の調査は今後この地域の調査が実施される際に遺跡の時代背景を考えるための1つの指標となり、今回明確に出来なかった報告遺跡の性格等が解明される事を期待し、今回の報告をしたい。

【附】

「坂東寺熊野神社」とは、市内に多く存在する「熊野神社」と区別するため熊野集落の田林であった「坂東寺村」の地名を頭に冠しただけで、熊野神社の正式呼称ではない。

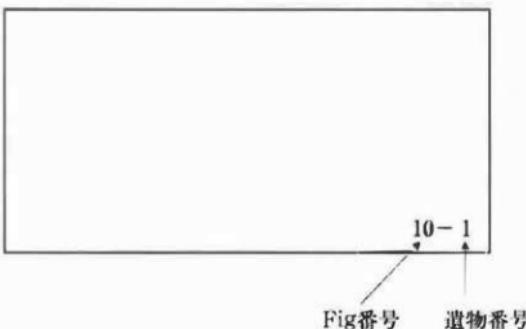
【参考文献】

筑後市史編さん委員会・編 『筑後市史』 筑後市史編さん委員会 1995

PLATE

凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。





1 熊野水町遺跡 全景（東から）



2 熊野水町遺跡 A区 全景（上から）



1 熊野水町遺跡 B区 全景（上から）



2 熊野水町遺跡 C区 全景（上から）



1 熊野水町遺跡 1SK01検出状況（北から）



2 熊野水町遺跡 1SK01土層断面（南から）





1 熊野 遺跡 1SK04土質断面 (から)

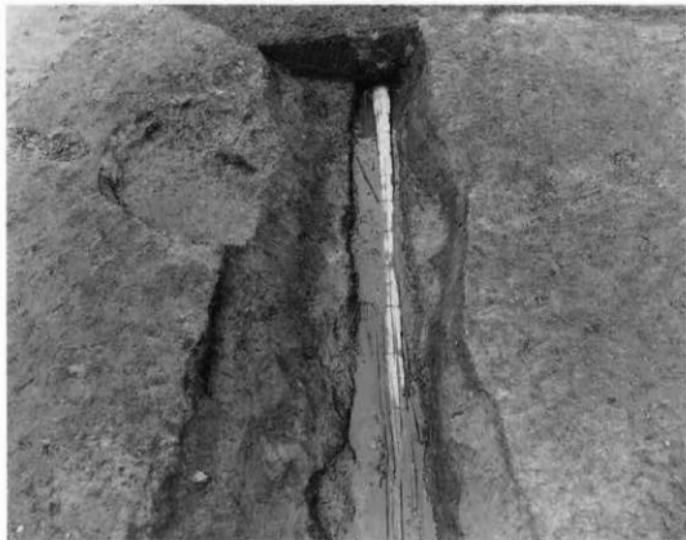
南



2 熊野水町遺跡 1SK04挖掘状況 (から)



1 熊野水町遺跡 1SD05土屢断面（南から）



2 熊野水町遺跡 1SD05竹製暗渠出土状況（南から）



1 熊野水町遺跡 1SD10土層断面（西から）



2 熊野水町遺跡 1SD10完掘状況（西から）



1 熊野水町遺跡 1SD25土層断面（北から）



2 熊野水町遺跡 1SD25完掘状況（北から）



1 熊野水町遺跡 1SD30土層断面（北から）



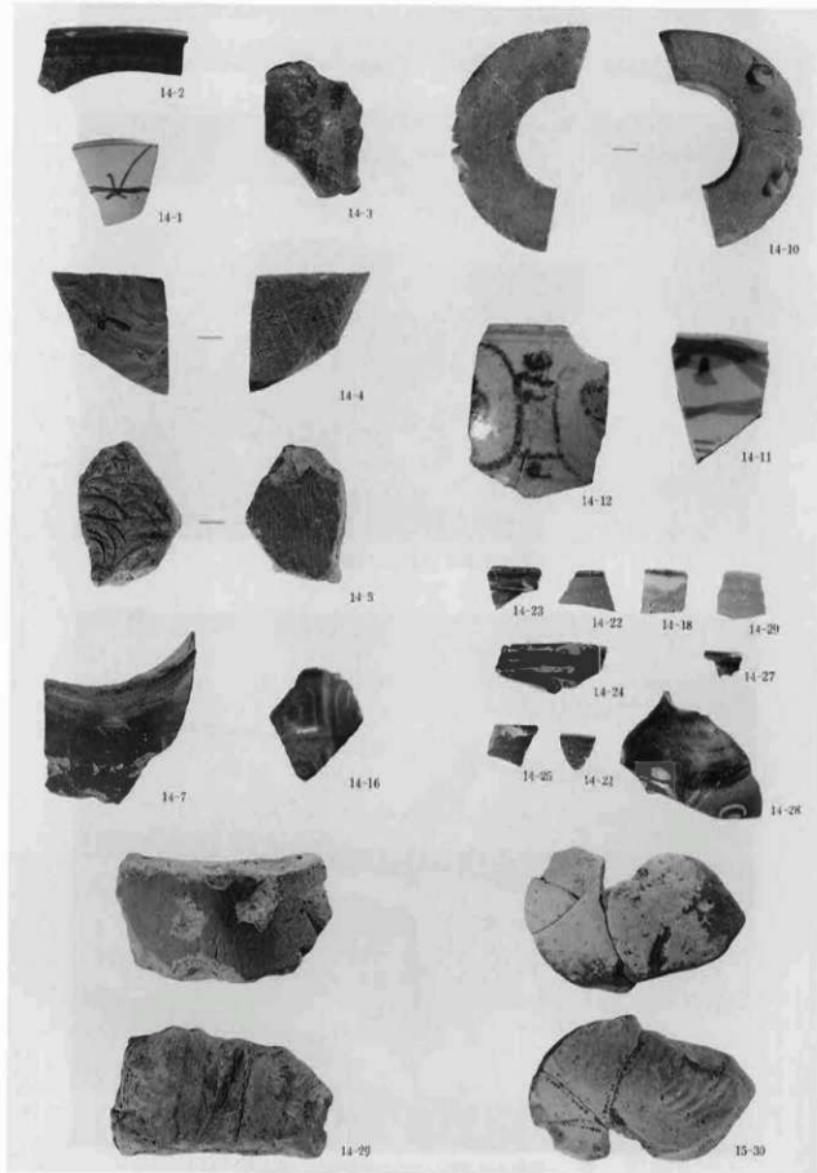
2 熊野水町遺跡 1SD30完掘状況（北から）



1 熊野水町遺跡 ISD35土層断面（北から）



2 熊野水町遺跡 ISD35発掘状況（北から）



1 熊野水町遺跡 出土遺物



1 熊野松ノ下遺跡 調査区遠景 空中写真（西から）



2 熊野松ノ下遺跡 調査区遠景 空中写真（真上から）



1 熊野松ノ下遺跡 1SD1土層断面状況（西から）



2 熊野松ノ下遺跡 1SD2土層断面状況（東から）



3 熊野松ノ下遺跡 1SD3土層断面状況（東から）



1 熊野松ノ下遺跡 1SD4東ベルト土層断面状況（西から）



2 熊野松ノ下遺跡 1SD4中央ベルト土層断面状況（西から）



1 熊野松ノ下遺跡 1SD4西ベルト土層断面状況（西から）



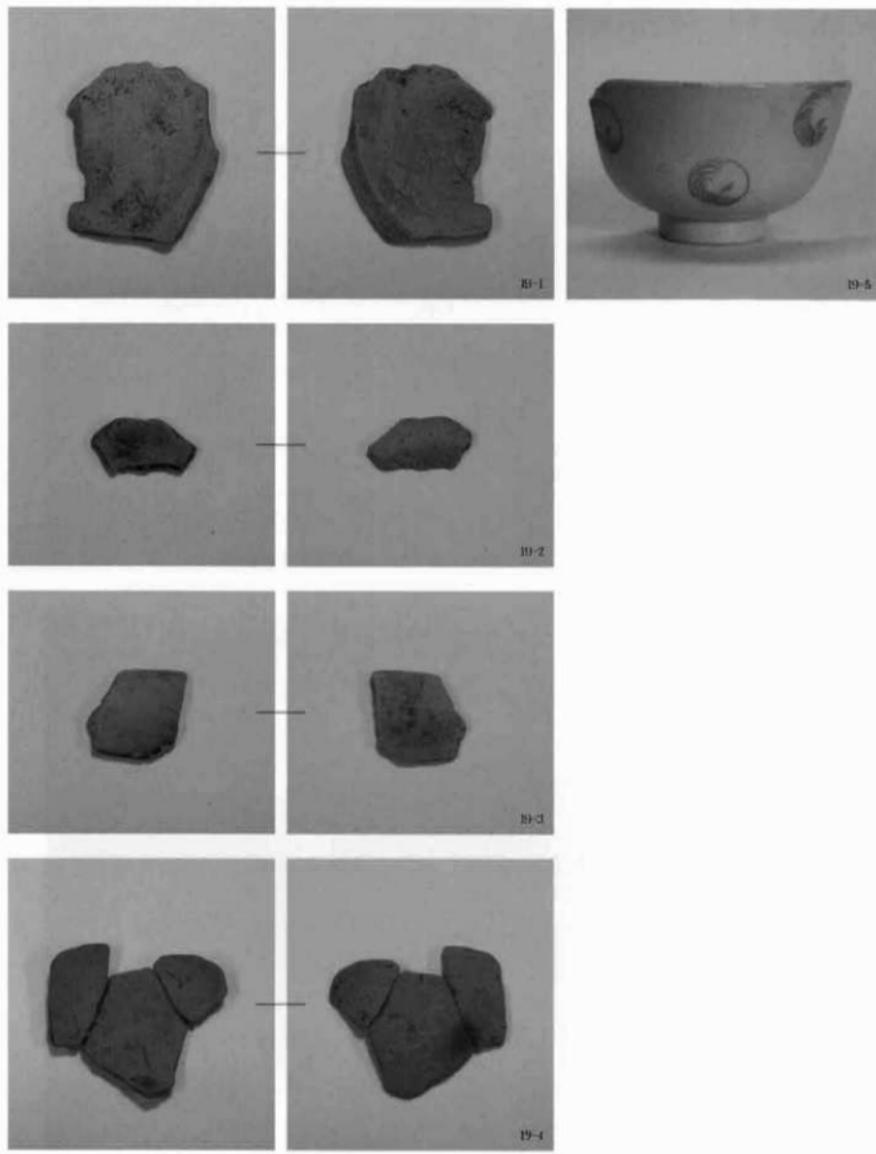
2 熊野松ノ下遺跡 1SD5東ベルト土層断面状況（西から）



1 熊野松ノ下遺跡 1SD5中央ベルト土層断面状況（西から）



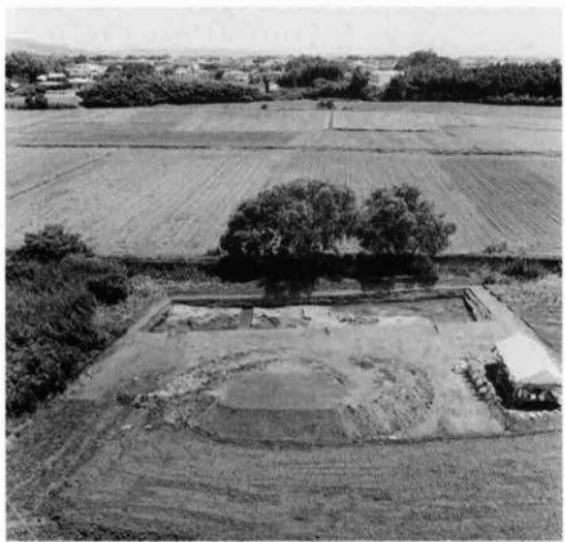
2 熊野松ノ下遺跡 1SD5西ベルト土層断面状況（東から）



1 熊野松ノ下遺跡 出土遺物



1 熊野五反田遺跡 全景（上から）



2 調査区より熊野集落を見る（北から）



1 熊野五反田遺跡 1SD01土層断面（西から）



2 熊野五反田遺跡 1SD01完掘状況（西から）



1 熊野五反田遺跡 1SX05土層断面（西から）



2 熊野五反田遺跡 1SX05完掘状況（東から）



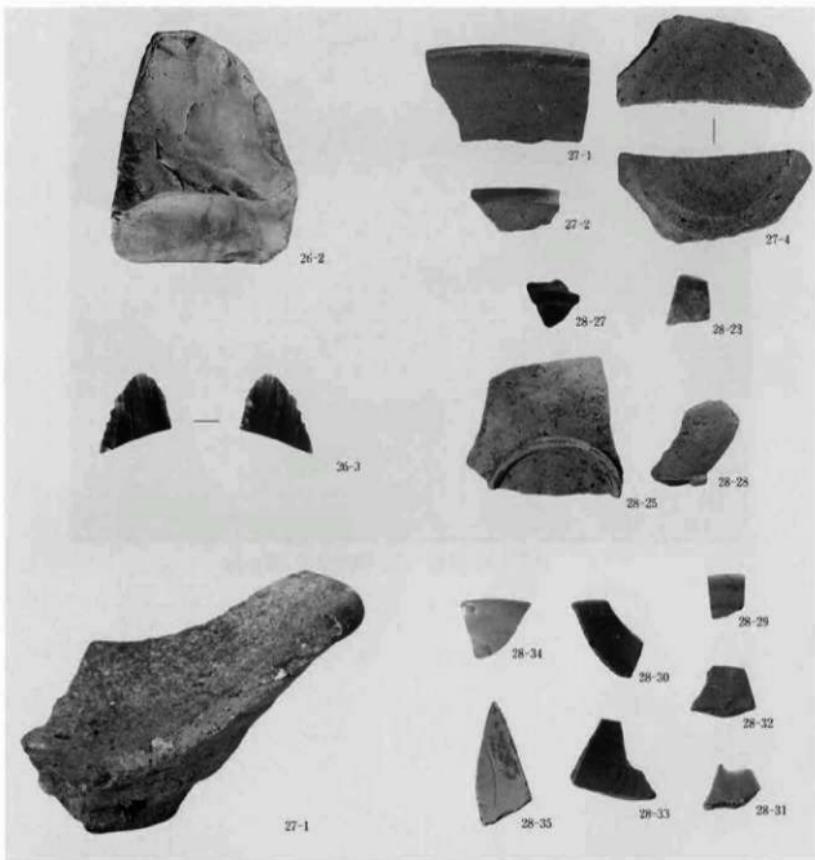
1 熊野五反田遺跡 ISD02発掘状況（北から）



2 熊野五反田遺跡 ISK03発掘状況（南西から）



1 熊野五反田遺跡 ISX04完掘状況（南から）



1 熊野五反田遺跡 出土遺物



1 熊野宮ノ後遺跡遠景 空中写真（東から）



2 熊野宮ノ後遺跡 調査区遠景 空中写真（東から）



1 熊野宮ノ後遺跡 A調査区全景 空中写真（上が北）



2 熊野宮ノ後遺跡 B調査区東側 空中写真（上が北）



3 熊野宮ノ後遺跡 B調査区西側およびC調査区全景 空中写真（上が北）



1 熊野宮ノ後遺跡 表土除去作業状況（東から）



2 熊野宮ノ後遺跡 A調査区：冠水状況（西から）



1 熊野宮ノ後遺跡 B調査区：作業状況（南から）



2 熊野宮ノ後遺跡 A調査区：1SD30土層断面状況（北から）



1 熊野宮ノ後遺跡 B調査区：1SD03土層断面状況（北から）



2 熊野宮ノ後遺跡 B調査区：1SD04土層断面状況（北から）



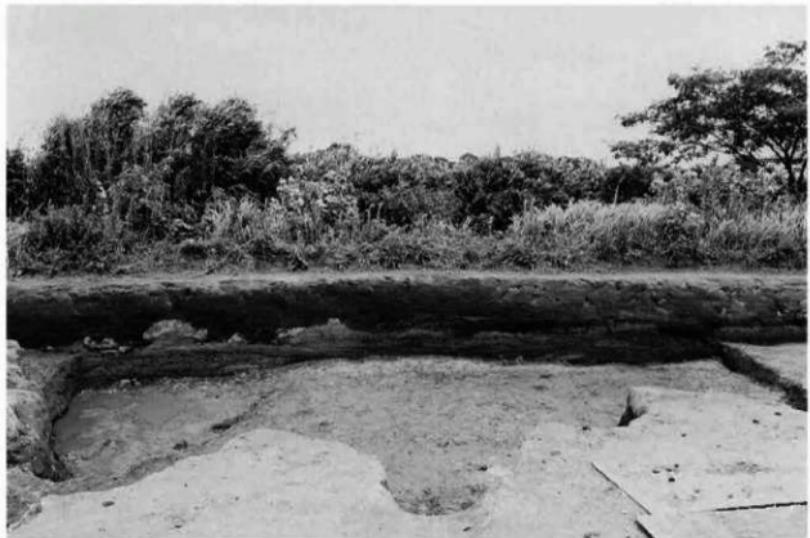
1 熊野宮ノ後遺跡 B 調査区：ISD08・09土層断面状況（北から）



2 熊野宮ノ後遺跡 B 調査区：ISD10土層断面状況（北から）



1 熊野宮ノ後遺跡 B 調査区 : ISX07 東壁土層断面状況（西から）



2 熊野宮ノ後遺跡 B 調査区 : ISX07 北壁土層断面状況（南から）



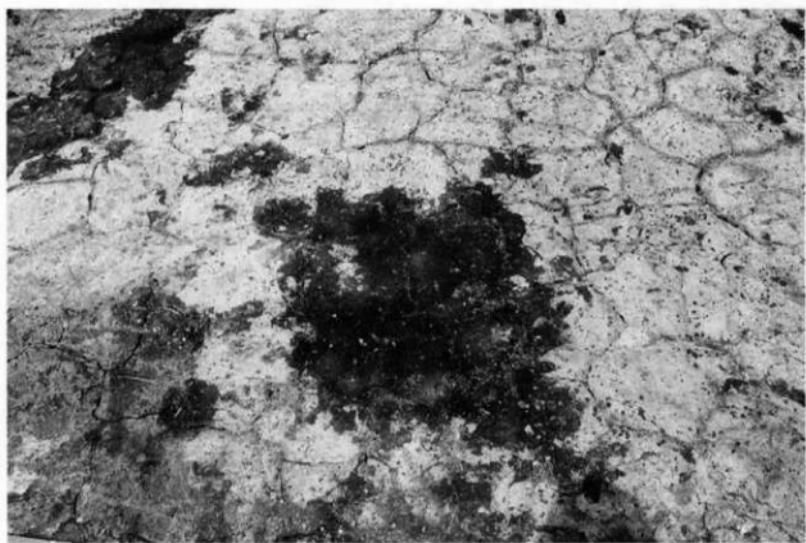
1 熊野宮ノ後遺跡 B 調査区：ISK02土層断面状況（南西から）



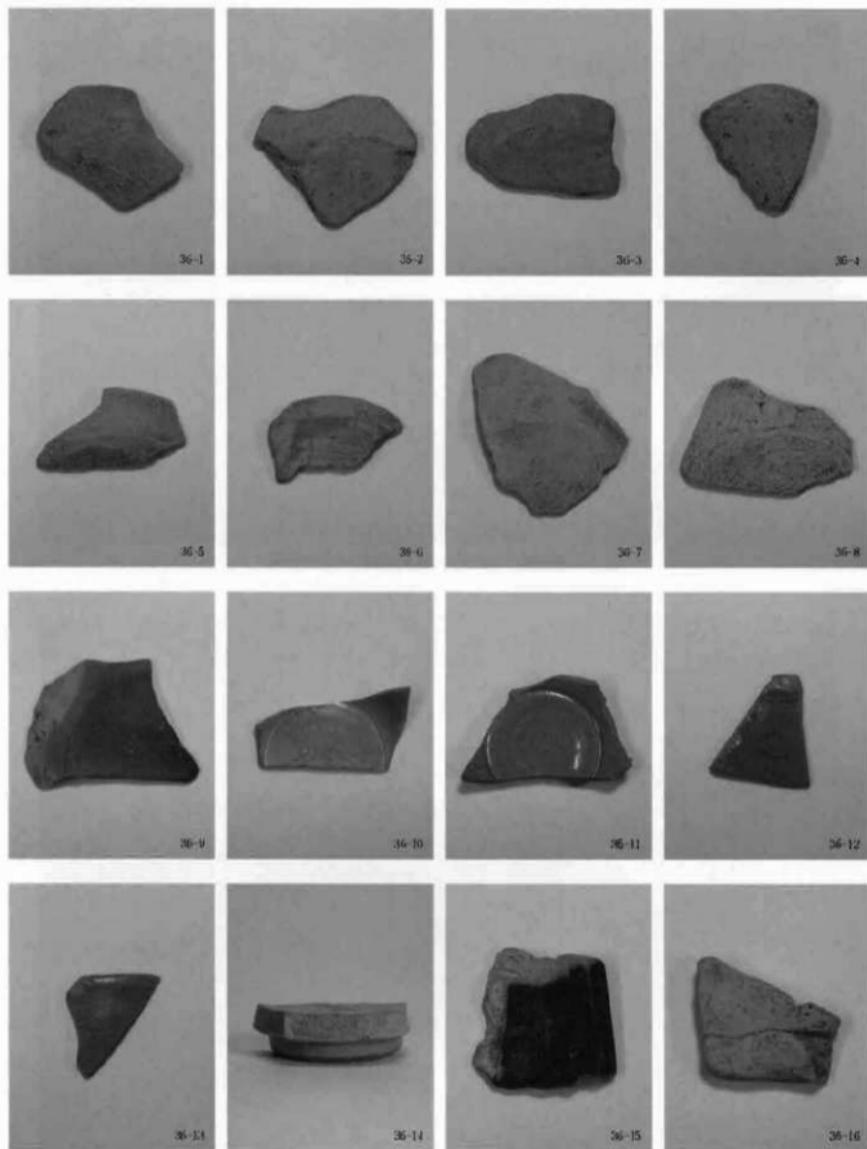
2 熊野宮ノ後遺跡 B 調査区：不明痕跡①



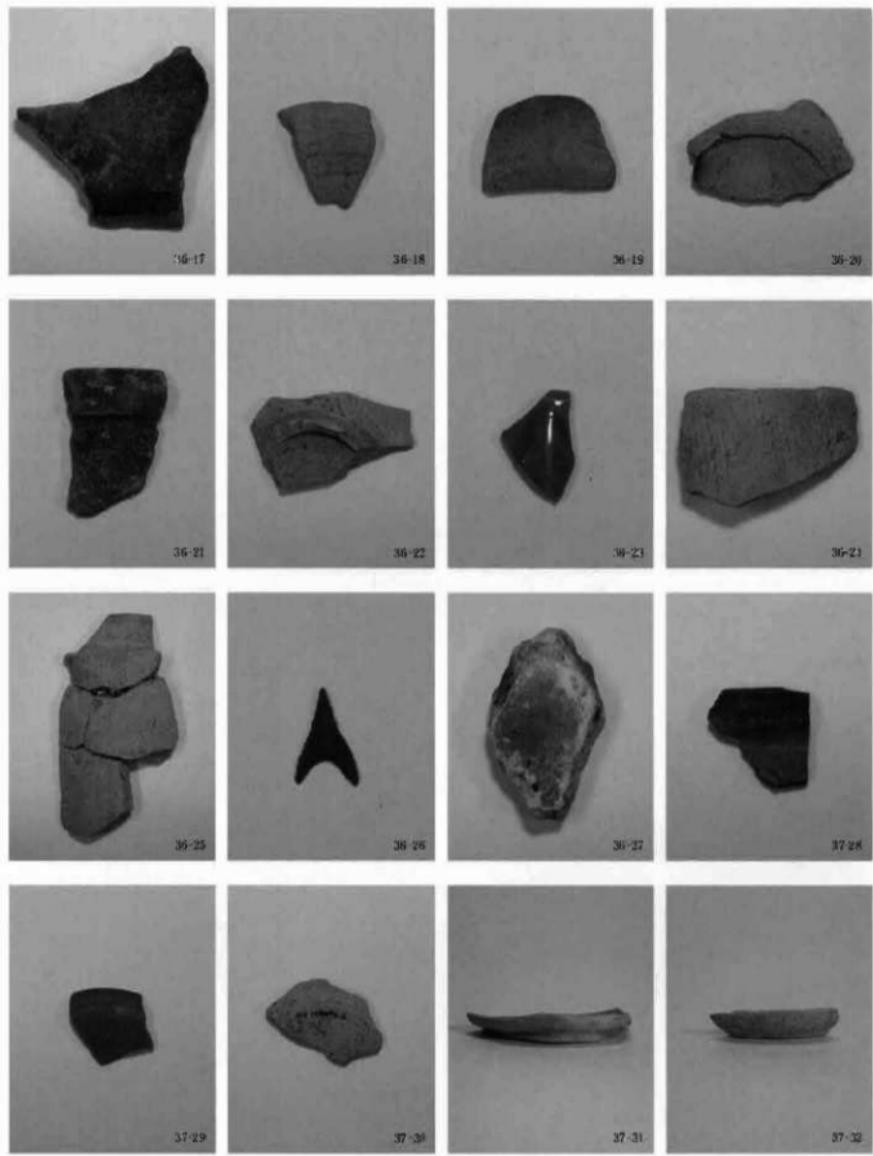
1 熊野宮ノ後遺跡 B調査区：不明痕跡②



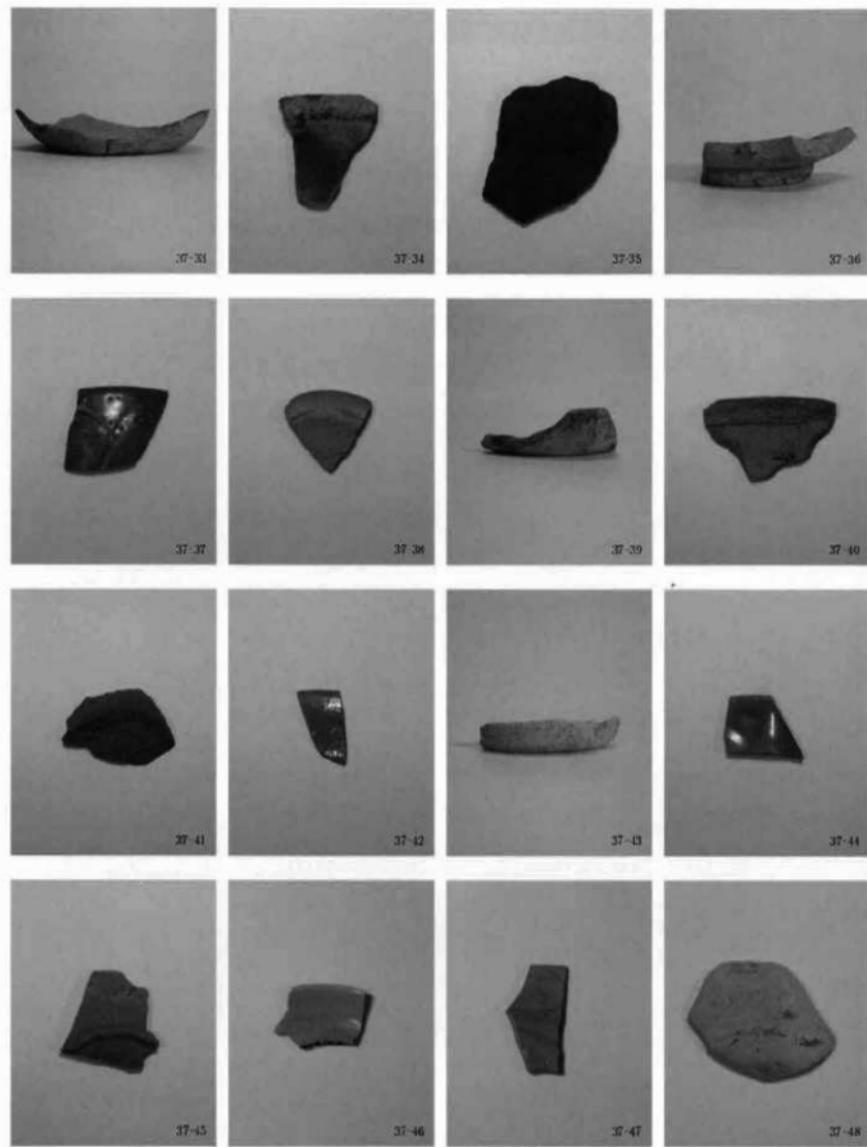
2 熊野宮ノ後遺跡 B調査区：不明痕跡③



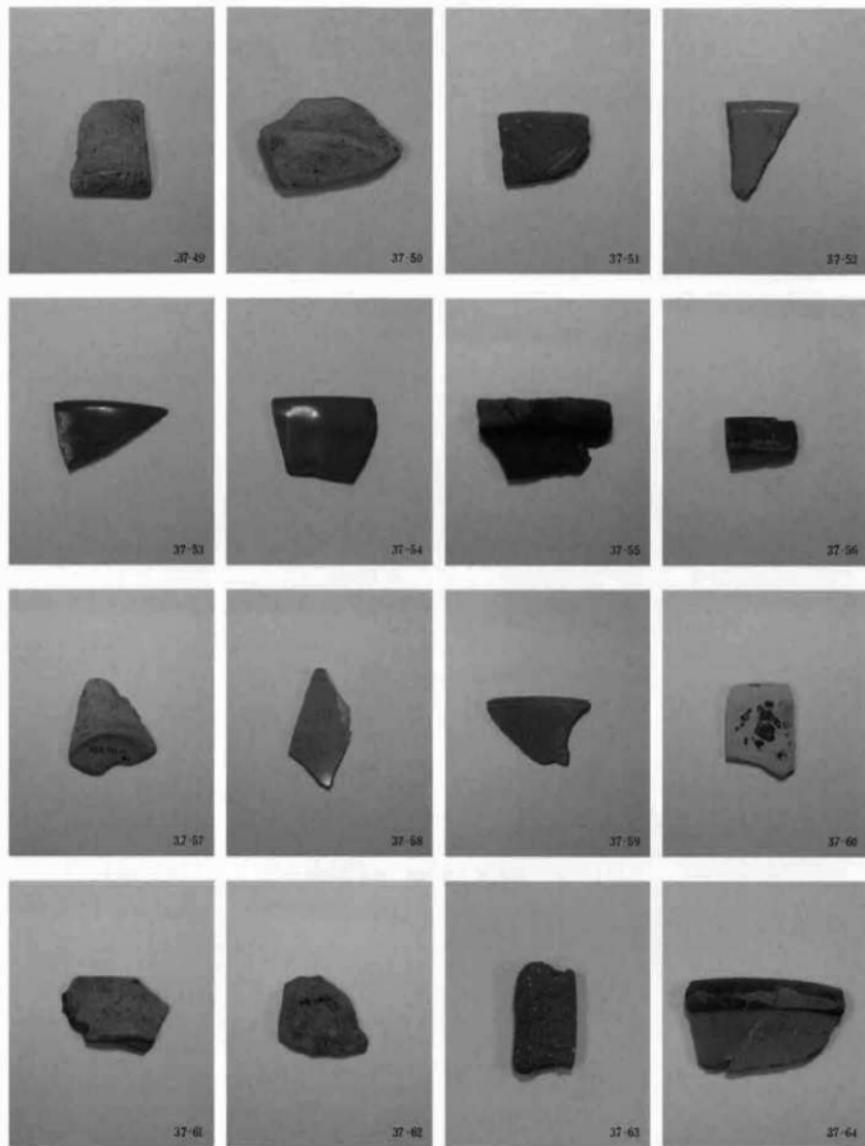
1 熊野宮ノ後遺跡 出土遺物①



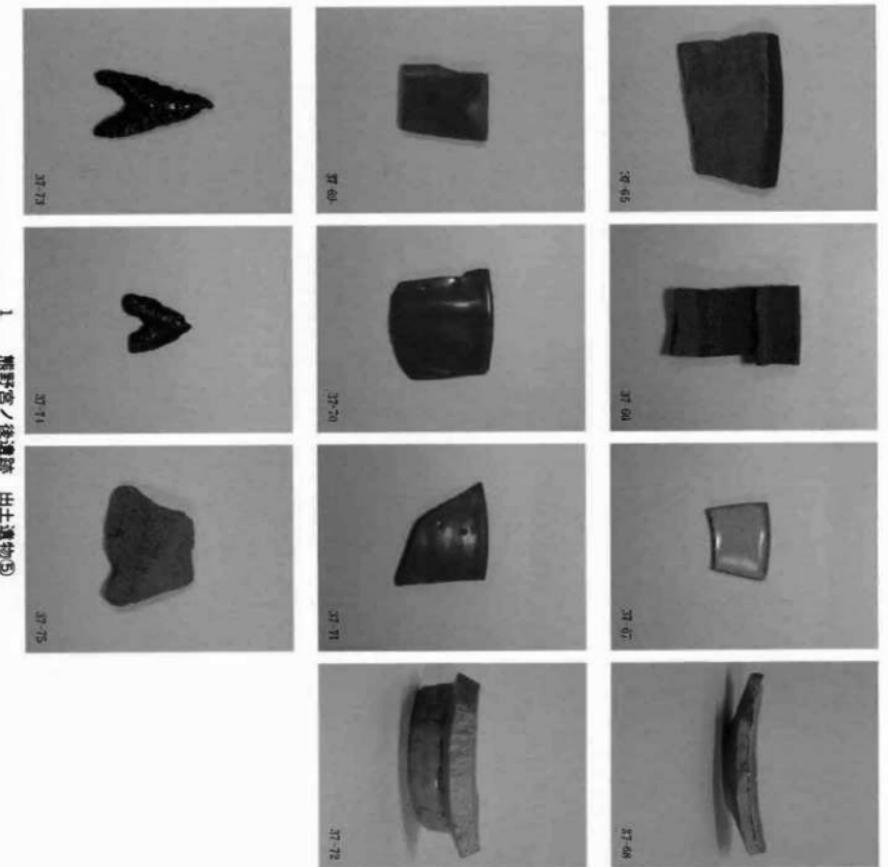
1 熊野宮ノ後遺跡 出土遺物②



1 熊野宮ノ後遺跡 出土遺物③



1 熊野宮ノ後遺跡 出土遺物④



1 熊野宮ノ後遺跡 出土遺物(5)



1 藏敷島崎田遺跡 全景（上から）



2 調査区より藏敷集落を見る（西から）



1 蔵敷島崎田遺跡 調査区南側足跡群（上から）



2 蔵敷島崎田遺跡 1SX10完掘状況（上から）



1 藏数島崎田遺跡 1SX10土層断面①（東から）



2 藏数島崎田遺跡 1SX10土層断面②（東から）



1 蔵敷島崎田遺跡 1SX10土層断面③（東から）



2 蔵敷島崎田遺跡 1SX10土層断面④（東から）



1 蔵敷島崎田遺跡 ISK01土層断面（東から）



2 蔵敷島崎田遺跡 ISK01完掘状況（南から）



1 蔵敷島崎田遺跡 1SK02土層断面（東から）



2 蔵敷島崎田遺跡 1SK02完掘状況（北から）



1 藏敷島崎田遺跡 ISK11東側土層断面（北から）



2 藏敷島崎田遺跡 ISK11南側土層断面（西から）



1 藏数島崎田遺跡 1SK11西側土層断面（南から）



2 藏数島崎田遺跡 1SK11北側土層断面（東から）



1 蔵敷島崎田遺跡 ISK05東側土層断面（南から）



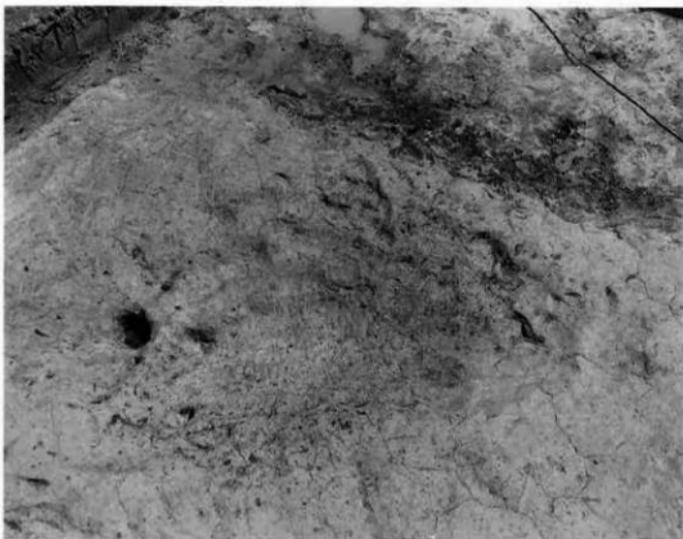
2 蔵敷島崎田遺跡 ISK05南側土層断面（東から）



1 蔵敷島崎田遺跡 ISK05西側土層断面（北から）



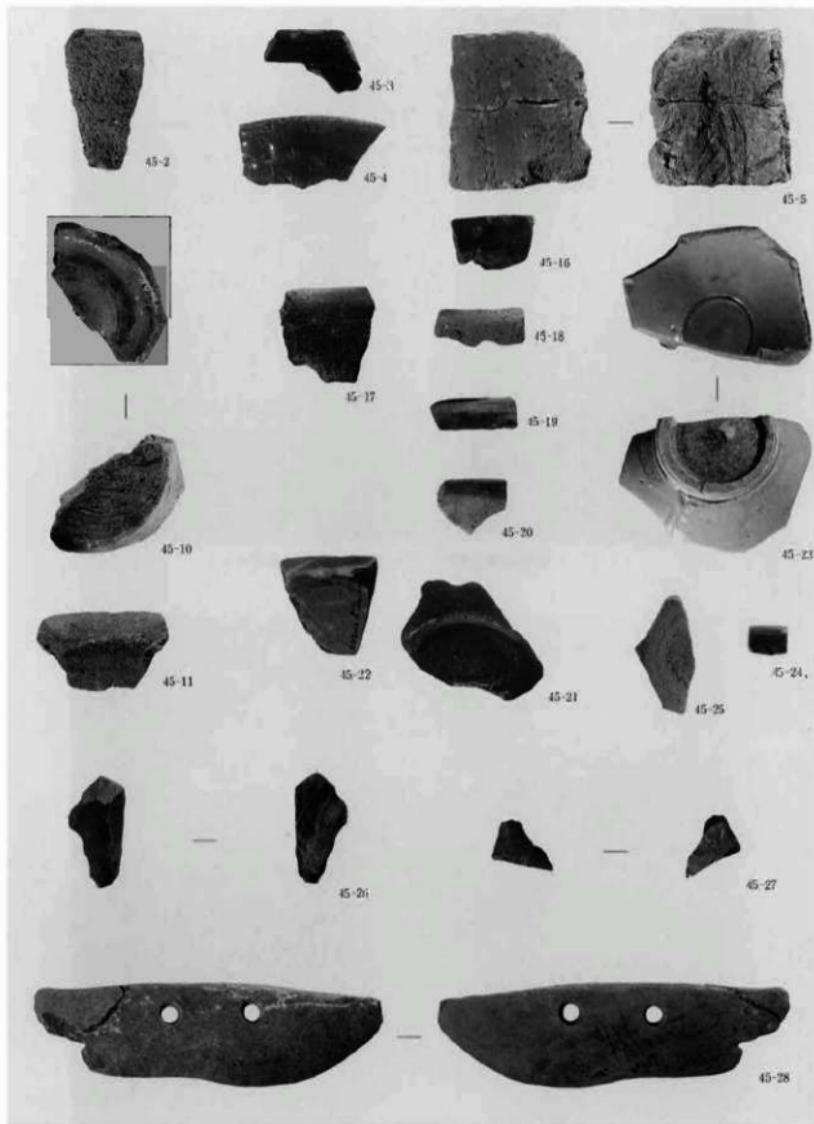
2 蔵敷島崎田遺跡 ISK05北側土層断面（西から）



1 蔵敷島崎田遺跡 1SK05発掘状況（北から）



2 蔵敷島崎田遺跡 1SD06発掘状況（北から）



1 藏数島崎田遺跡 出土遺物

筑後北部地区遺跡群 I

筑後市文化財調査報告書

第61集

平成17年3月31日 刊行

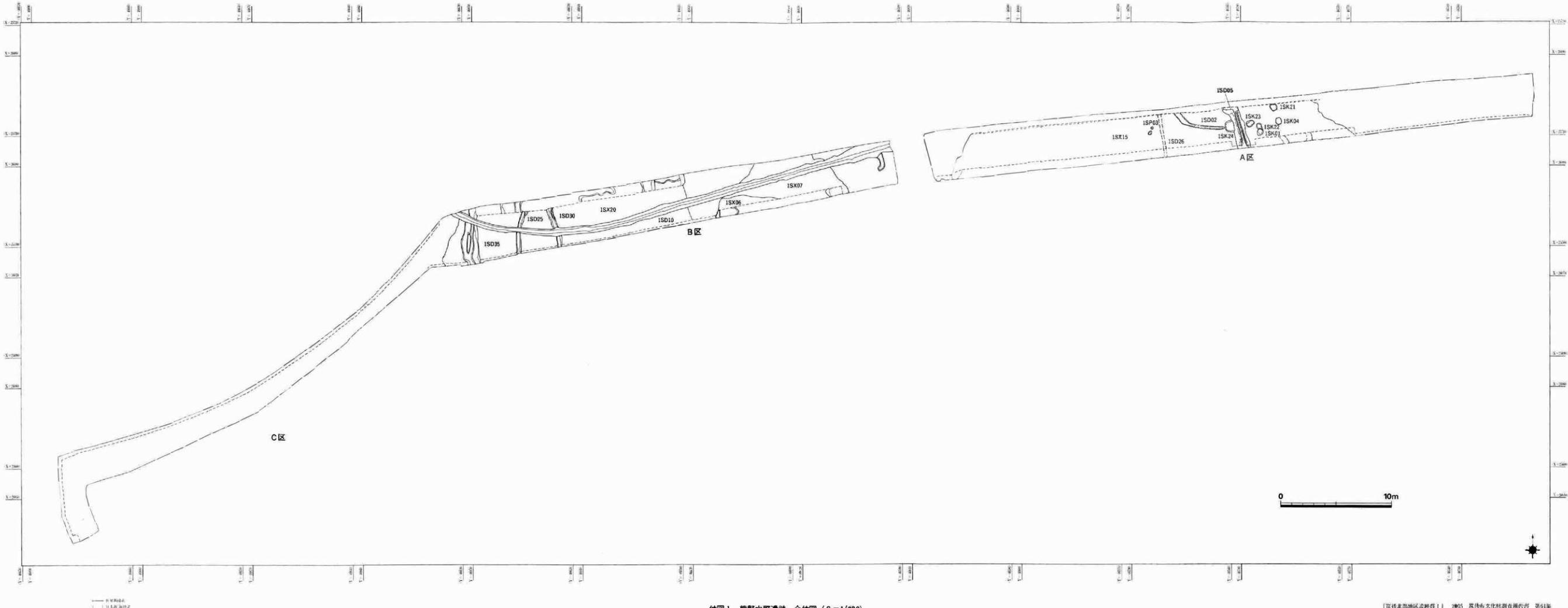
発行 筑後市教育委員会

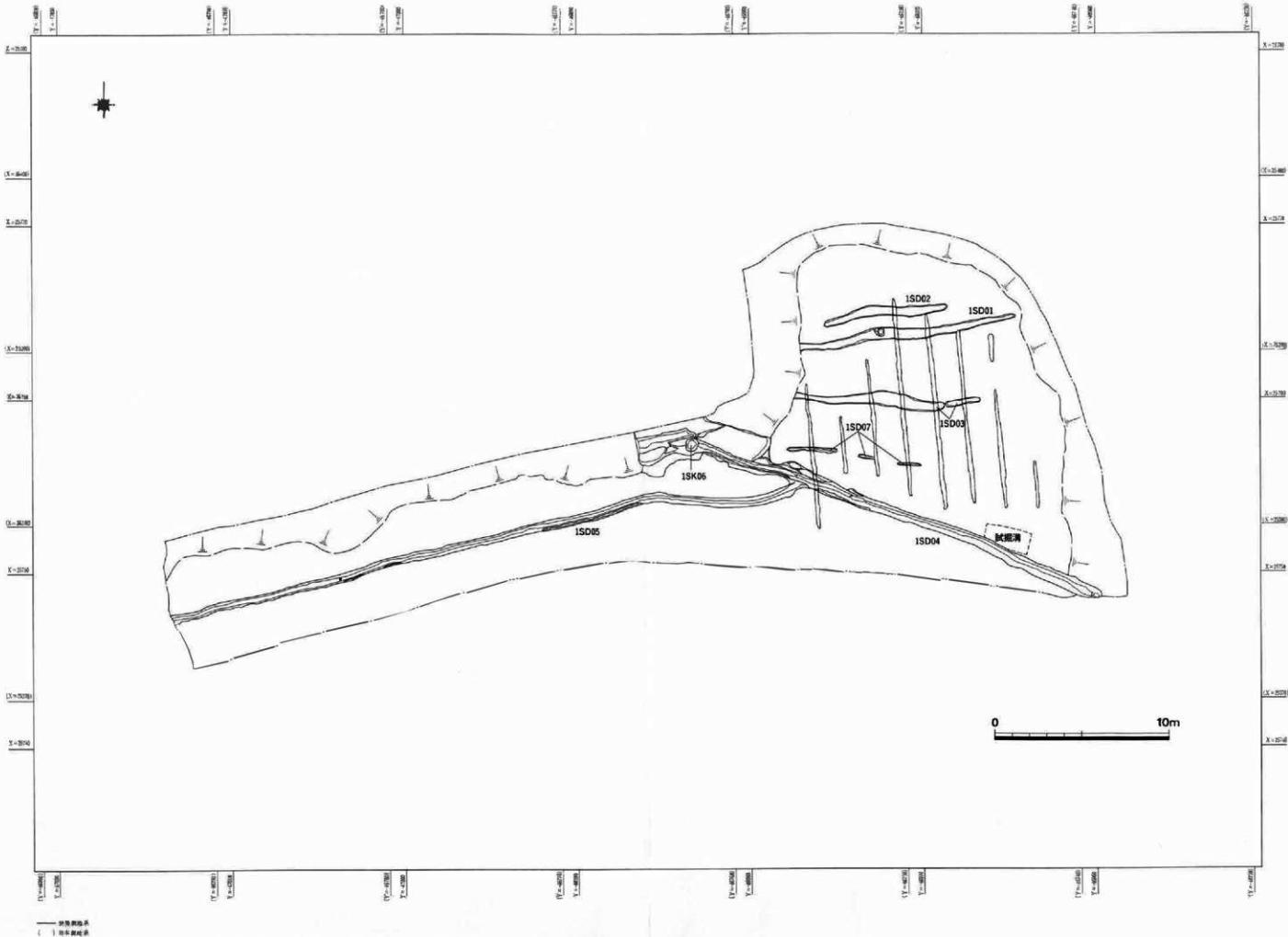
福岡県筑後市大字山ノ井898

印刷 大同印刷株式会社

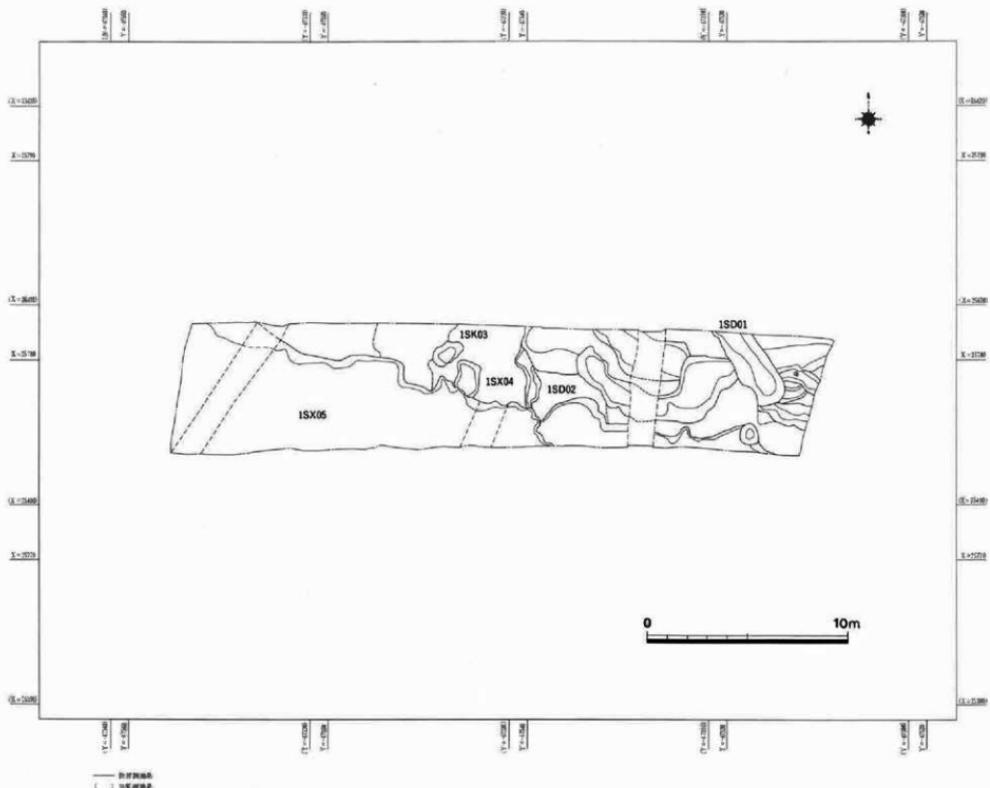
佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20

TEL 0952-71-8520



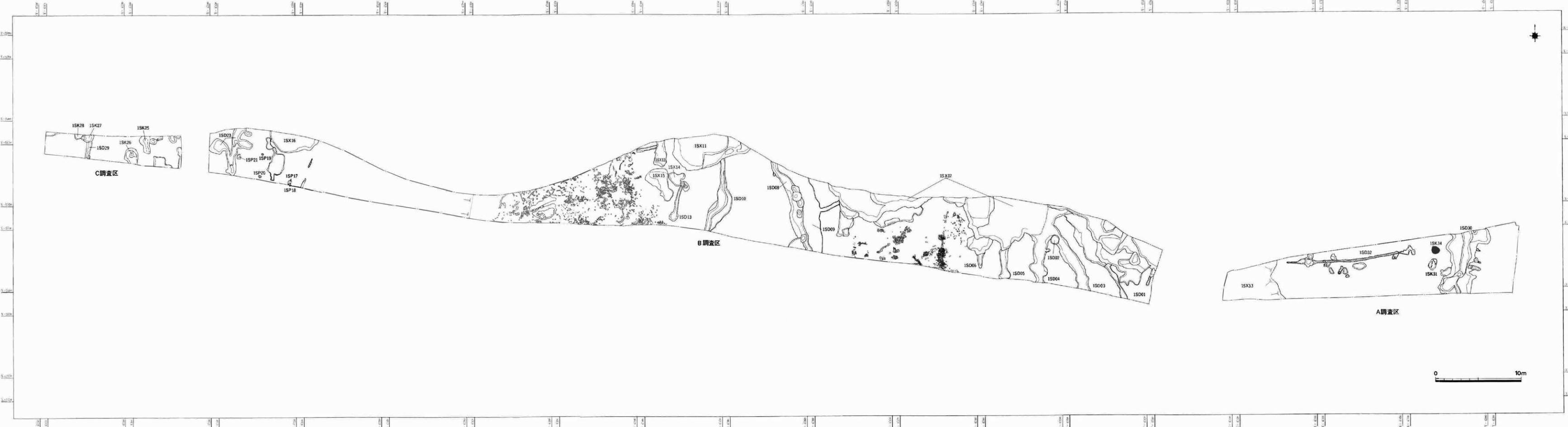


付図2 猿野松ノ下遺跡 全体図 (S=1/200)



付図3 熊野五反田遺跡 全体図 (S=1/200)

「筑波北部地区遺跡群！」 2005 筑波市文化財調査報告書 第61集



付図4 熊野宮ノ後遺跡 全体図 (S=1/200)

付図5 蔵敷施用田遺跡 全体図 (S=1/200)

